

---

# エト・エウトクタ

永良隆樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エト・エウトクタ

### 【Zコード】

Z9491A

### 【作者名】

永良隆樹

### 【あらすじ】

月に巨大隕石衝突。直後に起ころる奇禍。次々と精神崩壊してゆく人々。エレボス、サムヤサ、ア・ナネ……グリモア「エト・エウトクタ」の血の符号は人類のうえに重なるのか。バティン、アンドレアス、セレ、オロバス……ソロモン七十一霊で知られる悪魔の降臨、そして闘神アスルー、人類は彼らの災いを、悪魔らの創造による邪悪な宇宙の開闢を、阻止できるのか。／【2009-3-17】ラストシーン書き改めました。／新宇宙でのエレボスを描くことをやめ、新宇宙でのアイコの様子と置き換えました。／新宇宙の構図を、

リスト記載する」とありますので、改変お詫び申しあげます。

## 『ヒト・ヒウトクタ』

はじめに：『エト・エウトクタ』そして『馬ヶ岳風土記』はとばして読んでいただいてかまいません。

### 『エト・エウトクタ』

汝、霧の星を知る。

天に眩き光なく、小暗い霧が果てなく続くその世界を。その奥に蠢く異形の者共を。悪しき靈を。そのもたらす禍ひを。汝の血の奥底にその記憶は眠る。

が、何人もその歴史を語ることあたわず。

人に語りえるは、バサの国が栄えた、『時の歴史』以降のみのこと。

しかれども『時の歴史』以前の太古より、『時の歴史』に至るまで変わらぬこの世界のさまを語る。

世界は決して晴れることのない霧で覆われ、その霧の奥に無数の塔がそびえ立つていた。そこは悪しき魔物の巣である。そこばかりではなく、魔物は森にも草原にも巣くうが、人々はとりわけ塔を恐れ、決して近寄らなかつた。されど、オル・ヴァブに比すれば、それらの魔物はものの脅威ではない。魔物は人を喰らう。だが人より魔物の数が多くなることはない。が、オル・ヴァブがひとたび目覚めれば、人の姿は希となり、人は歴史を失う。その目覚めとなれば、人は次々と正氣を失い、魔物に喰らわれるのみとなるゆえに。かくのごとく、人は千年ごとに歴史を失う。それ故、人の歴史が、眞実には何年あるのか、誰一人わかる者はいない。

数頁欠損。

この、『時の歴史』が始まる前に、伝え残っている伝説はひとつのみである。人の知るその伝説とはエレボスのことにある。ある村で、若い男女が魔物にさらわれた。塔へさらわれ、生きて

帰ってきた者はいない。誰もがあきらめたとき、ふたりは戻ってきた。しかし、男のほうは、人の姿をしていなかつたという。その腕は剣となり、背には悪魔と違わぬ翼、頭には蛇が一めぐり纏い尾と首を背に垂らしていた。ふたりは森へ消えた。その後そのふたりを見たものはいない。

その数十年後、その森の近くの国をアスルー神の大群が襲つた。アスルーは三面六臂、眩く輝く美しい闘神である。その六本の腕にもつ剣に、立ち向かえる者はいない。人々はただ戯れに殺されるのみである。

その時、森のなかから狼の眼を持つ若者が現れた。その若者が、たつたひとりでアスルー神を排撃した。アスルーのふるう六本の剣を、若者は一本の剣ですべて弾き返し斬りふせた。そのふるう剣は音の速さを超え、ふるう度に轟音とどろかせ、衝撃でアスルーの腕は止まつたともいう。

若者は百のアスルーをすべて斬りふせると、名も告げず森へ帰つていった。これが人の知るエレボス（混沌の子）の伝説である。魔物の血の混ざつた者という意味である。それは、あの、さらわれた男女の子孫だと言われた。そして『時の歴史』とかわつた後も、森の奥深くに、その血をひく者がいると人は信じた。

『時の歴史』の始まる以前の出来事で、人の知る話はこれのみである。

数頁欠損。

『時の歴史』六六九年のこと。

大きく栄えていたバサの国の国王は、狩猟と遊牧を生業とする『星を追う民』を滅ぼした。『星を追う民』は、巨猿の背に乗りドラゴンを狩る勇猛な一族であつたが、バサの大群の奇襲に、一夜にして滅んだ。その王子が逃れたが、たとえ逃げ延びたとしても幼少。魔物のえさとなつただろうと、人々は噂した。

翌年。バサの国に王女が誕生した。その誕生の際には、テラー神、応化しあらわれ、御子に破魔の力宿りしことを伝えた。王は喜び、

宴をひらいた。その宴の大広間に魔物の群れが襲いきて、悪魔の使いの魔術師が姫に呪いをかけた。曰く、十五になる日に迎えに来る。その呪いの定めは強く、テラー神でさえ違えることができなかつた。故に、テラー神は姫を救える運命の男を定めた。

時は流れ、その姫ラ・ブティエリの十五の誕生日の日。待ち受けの勇者たちを嘲笑うかのごとく蹴散らし、魔術師は姫をさらつていつた。その勇者たちの中に、運命の男はいなかつた。

王は国にふれを出し、数百の勇者が姫を取り返さんと塔へ向かつたが、邪悪な魔術師の力の前に、ことごとく討ち果てた。

ここに立ち至りて、銀色の巨猿の背に乗るひとりの戦士があらわる。死に絶えたと思われていた『星を追う民』の王家の若者である。彼こそが、テラー神の定めし運命の男。その名はサムヤサ。

彼は単身塔に乗り込み、巨大な竜に姿を変えた魔術師を討ち破り、ラ・ブティエリを救つた。かくしてラ・ブティエリは闇の手を逃れたが、破魔の力は失われていた。

バサの王は喜び姫を迎えたが、若者が『星を追う民』であることを探ると、復讐を懼れ追い返した。

が、既にラ・ブティエリは若者を慕つていた。夜も眠れず彼を想い、その身が痩せ細るほど。

憐れに思つた叔父エリゴールの手引きで、サムヤサはバサの城に忍び込んだ。勇者もまた、塔にとらわれの姫を一目見たときより、己が想い人と定めていたのである。故に姫に自身のおもいを告げ、姫も同じおもいであると知ると、数千の兵を蹴散らして姫を奪い去つた。

こうして、サムヤサ、ラ・ブティエリ、そしてエリゴールは人の国から姿を消した。

数頁欠損。

『時の歴史』六九九年のこと。オル・ヴァブが目覚めた。一瞬にして世界を覆いつくす狂気の勢いもはや効し難く、人は次々正気を失つていった。時を得たりと襲いくる魔物の群れ。

その時である。敢然と人のまえに姿をあらわし魔物に立ち向かうは、サムヤサとその一族である。彼らはクリソレトウスという石を身につけて、その石の力により正気を保っていた。それは、サムヤサとラ・プレティエリの娘、ラ・プレティエリ・ア・ナネが念を封じた石。母から失われた破魔の力を、ア・ナネは継承していた。

そして、また、テラー神の冥助により、サムヤサは搜しだしていった。伝説であつたエレボス、その血をひく少年を。人、称してエレボス・シ・ルカヤル。

サムヤサ、エレボス、エリゴール、そしてア・ナネは、バサの国にあらわれた魔物を一掃すると、霧のなかにそびえる塔を次々攻め滅ぼした。魔物を殺し、竜を倒し、悪魔を封印した。悪魔は靈である。肉体を持たない。それは人に憑依してはじめて姿をあらわす。それを倒しても、憑依されていた人間が死ぬだけである。故に封印する他ない。

数行欠損。

ある塔の、呪いのかけられた魔の部屋で、エリゴールが自らの身を生贊にして仲間を通した。彼がその身をささげた場所は、炎の平原。地平線まで続く悪鬼の群れと永遠に戦い続ける地獄。しかし、そのおかげで、サムヤサらはその塔の霧のドラゴンを倒し、世界に光を取り戻した。光を取り戻した世界は、美しい緑の森と草原がどこまでも続き、地平はかすみたち空へ登り混ざり合っていたという。

その後、ある村で、正気を保つてゐる老いた呪術師が言つた。地獄の平原を凄まじい勢いで地上へ昇り来る者がいると。呪術師は村はずれの井戸へ一行を導いた。そこで呪文を唱えた。すると地の底から戦ひ人の影が立ちのぼり口を開いた。我、地獄より蘇りともに戦わん。それは靈となつたエリゴールだつた。呪術師は化翁けおうせしテラー神だつた。

こうしてエリゴールは靈となりても、彼らとともにに戦つたのである。

数行欠損。

その後、サムヤサラは、ある塔で奇怪な魔法の箱を見つけた。樽のようであり、数えきれないほどの管や金属がつながっており、それが幾つもあった。魔物達はそれをウイルオトスと呼んでいた。サムヤサはそれを壊した。それは、魔物が自分達の体を創つたり、より強靭にしたりするために使う魔具であつた。最悪の敵である悪魔らは、その究極の力を用いることで、肉体さえ不要としたのである。その後、彼らはオル・ヴァブの棲家である塔を見つけだし、戦いの末これを封印した。そして人々は正氣を取り戻した。

アスルーの塔をエレボスが粉碎し、そこで彼らは『眩く輝くもの』を見つけた。その『眩く輝くもの』はアスルーが守護していたもので、『すべての始まりとなるもの』である。彼らはその災いを取り除こうとしたが叶わず、かろうじて封印した。最後の塔で、サムヤサラは、船を見つけた。

この先、欠損。

リスト（ラ・プレティエリ記。綴りは原文のまま。憑依した時の姿を記し、召喚の可・不可と召喚方法を記す）

Andoreass

十四枚の翼を持つ。鳥の頭。人の体。獣の足。破壊的。召喚不可なり。交渉もしかり。

Assluw

三面六臂。好戦的。召喚不可。交渉もしかり。『眩く輝くもの』を守護する。

Ononbass

馬頭獣身。知多し。中庸の道を行く者。召喚可なり。召喚数は三七九。

召喚には四つの星、ふたつの扉を用意せよ。石はふたつで足る。

Se11e

四枚の翼を持つ。長髪の戦士。狡猾にして好戦的。召喚不可なり。

S a b a n a c k サバック

獅子の顔。獰猛。召喚可。召喚数は五一八。  
召喚には多くの石を必要とする。剣も然り。ふたつの星が要る。  
対価なくしてその魔力を得ず。

O s s e オセ

狼の頭。剛胆にして気高き戦士。召喚可なり。しかれども御し難し。

召喚には言の葉畏るべし。ふたつの星。ふたつの扉。ひとつ剣。  
V a r a c k ヴラック

双頭の竜に乗る少年。召喚可なり。しかれども交渉あたわす。

召喚には獣の血が要る。召喚すれば災ひ多し。  
B a t h i n バティン

みつつの長い首、蛇の尾を持つ。召喚可。『眩く輝くもの』の創  
造に携わる。

破滅を求めざれば召喚するべからず。  
数ページ欠損。

O l l • B a b b u

すべての災ひの元凶。

然れども、真の恐怖にあらざり。  
他、欠損。

(グリモア) より抜粋。

『エト・エウトクタ』

ミスカトニック大学

図書館蔵。

カシビリが馬ヶ岳に山城を築き、倭の國オオタラシヒコオシロワケ（大帶日子淤斯呂和毛・景行天皇）との戦にそなえた、という話しまではしておつたかの。石垣の上に土嚢を積んだ山城の外壁は、馬ヶ岳から連なる山々、果ては平尾の山までのび、まさに難攻不落の城となつたのじや。

さて、カシビリの御子は双子じやつた。故に、慣わしにより、上の子を残し、下の子を捨てた。今も馬ヶ岳の麓に残る双子岩のうえに。今は、双子岩はご神体となり社が立つておるが、昔は双子が生まれるとひとりをそこへ捨てたのじやつた。子のいぬ夫婦は双子岩を詣で、子が捨ててあれば連れて帰り自分の子としたのじや。

が、その時双子岩へあらわれたのは、我が子を亡くしたばかりの雌の武迦にかじやつた。武迦とは川に棲む人間じや。今では河童と呼ばれておるがの。河童などどいうものは、人が勝手にその姿を想像したもので、本当には人と変わらない姿じやつた。もつとも力は人と比べ物にならぬほど強かつたがの。川に棲み、滅多にその姿をあらわさず、人と争うことを嫌う。じゃが、なかには、川で遊ぶ人の子を喰らう悪い武迦もいたようじや。じゃからこの川で遊ぶ子供はおらぬ。今でも、川で遊ぶ子がいれば大人は注意するじやろう。河童に喰らわれるぞと。

さて、その雌の武迦じやが、子を失つた苦しみに血迷つたのじやろう。双子岩の子を連れて帰り、自分の乳を与え、自分の子として育てた。それがキハヤじや。尤も、皆がよく知る名は黄童丸きよどうまるじやろう。

武迦の乳で育つたせいか、いや、そればかりとは言えぬが、長大ひととなりて黄童丸は並みはずれて強くなつた。駆ければ疾きこと鳥の如し、

足が道に穴を穿ち、川のこちらの岸から反対の岸へ、軽く跳べるほどその足は強かつた。腕も力自慢の式迦が束になつても敵わぬほど強くなつた。英彦の天狗と喧嘩して勝つたといつ話もある。

それほど強くとも、それが幸せか否かということとは、別の話じや。今も昔も、それは変わらぬ。黄童丸は式迦ではない。かといつて人としても暮らせぬ。三才にひとりきりじやつた。仲間からはよそ者扱いされ、人と交わることもできず、ましてや己がカシビリの御子であることなど知るよしもない。

さて、そうしている間にも、倭のオシロワケの軍勢は、北のツチクモ、カント、オオヌキを平らげ、この川を下つた川下に広がる平原に仮宮を建てた。それ故、今もこの土地をミヤコといつ。時にオシロワケ、齡九十。

さて、その工事が忙しく行なわれてある頃に。

艶やかな嬢あでをみなの妖狐があらわれ黄童丸を訪ねた。後ろで結わえた美しい髪は腰までの長さでの、その髪につけた飾りは支那の珍しい石が幾粒も、その腰には幾本もの太刀や矛が挿してあつた。この妖狐が皆も知つてある媚狐郎びじゆうろうじや。今は豊後の社に祭られてある。今は神様じやがその昔の媚狐郎は太刀集めをしておつての。地の果てから地の果て、支那やもつと遠い国まで神器を求めて旅をしておつた。それで、この豊の国にも来たのじや。

媚狐郎は黄童丸に言つた。主の一族が守る『田子の瓊矛』ぬぼいを我によこせと。黄童丸は知つておつたが、そんな物は知らんと答えた。媚狐郎はそれが偽りであることを見抜いておつたが、それよりも目の前の男の秘めたる力に驚いておつた。

媚狐郎は腰の太刀の一本を黄童丸に渡し、ふつてみよ、と言つた。それは、普通の人間がふつても普通の太刀じや。じやが、その血を持つ者がふるうと、落雷のような音をたてる。『おとはやのつるぎ』じや。黄童丸は言われるままその太刀をふるつた。

雷鳴轟いた。黄童丸は驚いたが、媚狐郎はもつと驚いた。そして言つたのじや。

「主にその太刀預けおく。倭の猛部を倒してみよ」

猛部というのは、倭の國の戦大将じや。そして、この時、豊の国に來ていたのは、猛部の中でも豪勇無双と称されたヤマトヲウス（小碓）じや。媚狐郎が黄童丸を使ってヤマトヲウス、次いでオシロワケを殺そうと謀つたのは、彼の国が持つ『アマノムラクモの剣』を狙つておつたからじや。相討ちで武迦も滅ぶれば『日子の瓊矛』も手に入る。狐というのは謀に長けてあるからのう。

さて、じんてう晨朝（卯の刻。明け方）朝霧たちこめるなか戦は始まった。三百の戦舟に乗つた倭の軍勢が駿駿と川を上つてきた。その船団の行く手に立ちはだかるように浮かぶ一艘の小船。船の上の人影は裸身に胴衣姿。先頭の船の者が声をかけた。

「ぬしはこの近隣の漁夫か。これより、この地は我ら倭の大君が治める。大人しく従え」

霧の中からその声は返つてきた。

「我が名はキハヤ。この川の武迦の頭領にして、英彦の天狗を統べる者。そこにヤマトヲウスありや」

倭の者は驚いた。たつたひとりで刃向かうか。

「ここにヲウスなし」

その答えを聞くと黄童丸はさらに聞いた。

「オシロワケありや」

倭の者は嘲笑した。この鄙なる人とは呼べぬ乞食かたゐが大君を呼ぶとは。

「なし」

そこでさらに対いた。

「このなかの大将舟はいづ」

倭の者が嘲りながら指差すほつを見れば、確かに一艘大きな船が霧の奥にある。

黄童丸はにたりと笑うと船底を蹴つて合図をした。

水面からいっせいに武迦の手が出てきて、すべての船をひっくり返した。あつぶあつぶと川面に浮かぶ兵らを、武迦どもが川底へ引

きずり込んで殺してしまった。

黄童丸はといえば、跳びも跳んだり、腹を見せて浮かぶ船底を右に左に前へ前へ、百艘も跳んで、大将舟へ躍りこんだ。襲い掛かつ兵三人を瞬く間に蹴り倒すと、その太刀を抜き鋒（切つ先）を大将に突きつけ言つた。

「ここにキハヤありと、帰つてヲウスに伝えよ」

さて、その話を聞いたオシロワケはたいそう驚いての、肺脯の猛部ヲウスを使わすことにしたのじや。

猛部のヲウスは勇猛でもあつたが知略にも長けておつての。まずは川の上流に毒を流し込んだのじや。それで武迦は皆死んでしまつた。その酷いありさまは今に伝わるとおり。毒しき瘡身にあまねはり、膚も爛れやぶれ、手足繚戾りて、川面を流れゆく。そんな仲間や母の亡骸を見ての。黄童丸は、もの狂いに怒り、たつたひとりで猛部の軍勢に挑んでいつたのじや。

猛部のヲウスはほくそ笑んでおつた。なにしろ、川を挟んで対峙するのは千の軍勢とたつたのひとりじや。己が剣を交えることもあらまいと思つておつたのじや。

ところがじや。

一足飛びに川を飛び越えた黄童丸は、敵只中に大地をえぐつて降り立つと、その手の太刀をふりまわした。まるで雷が落ちたような音が何度も響き渡り、斬られた者は木端微塵になり、そばにいた者も吹き飛ばされた。

これにはヲウスも驚いての。アマノムラクモの剣を持つてくれれば良かつたと悔やんだのじや。

さて、逃げ惑う兵を次々切り伏せ、ヲウスのまえに現れたのは、狼の眼を持つ半裸の若者じやつた。

「汝キハヤか」と問えば、

「しかし。貴様がヲウスか」との答え。

ヲウスは答える代わりにその強き弓矢を射た。黄童丸は太刀をふるつた。雷鳴轟き矢は空へ向かつてそれた。

ヲウスは、これは敵わぬとみて、兵を退くこととした。黄童丸は地に転がる矢を取つて、ヲウスの背中めがけて投げた。矢は鎧を突き破り肩に突き刺さつた。が、兵に支えられ、ヲウスはなんとかその場を逃れることができたのじや。

さて、この間に、仮宮に襲い來たのは、馬ヶ岳城城主カシワケじやつた。あのカシビリの子、黄童丸の双子の兄じや。この兄弟が顔をあわせることは生涯なかつたのじやが、姿かたちは似ておつても、その心根はまつたく違つておつての。黄童丸が蛮勇であれば、ワケは知に長け思慮深く、兵の信任厚く、民に慕われること神代のオホナムヂのよう、まこと良き治世者であった。が、ひとたび動けば山をも搖るがす稻妻のようじやつた。そのワケが手薄になつた仮宮に襲い來たものじやから、たまらない。いとも易々とオシロワケを討ち取り神器の剣を奪つた。オシロワケは驚いたことであらうの。蛮族との戦じやと思つておつたら、鉄器を持つた軍勢に襲われたのじやから。

さて、そこからがワケの凄まじさよ。

神器を手に入れたワケは、それを証しに、行く手行く手の国々を平らげながら、倭の国まで攻め上つたのじや。迎え撃つ倭の皇子カゴサカとオシクマの軍勢を退け、とうとう倭の国を平らげた。そして妻に娶つたのがホムダマワカの娘ナカツヒメ。ホムダマワカの父はイホキノイリヒロ。オシロワケの子じや。つまりオシロワケの曾孫を妻とし、その血を残したのじやつた。名乗ることホムダワケ（応神天皇）。

さて、憐れなるはヲウスよのう。深手を負い、命削るおもいで故郷へ向かう途中で國滅びのことを伝え聞いての。皆もよく知る歌を残し天となつたのじやつた。

やまとはくにのまほろば  
たたなづくあをかき  
やまごもれるやまとしうるわし  
とな。

確かに、広く知られておる話とは違つのう。故に、この話はそつと伝えねばならぬ。小声での。

さて、黄童丸じやが、媚狐郎に剣を返したまでは知つておるが、そのあとのは何も残つておらぬ。

『馬ヶ岳風土記』（伝承による古文書・福岡県 京都郡双子岩神社蔵）より抜粋。

## 1 流星群

「ねえ、見える？　見える？」電話の向こうのミキは、はずんだ声で言った。

ホンダは赤い夜空を見上げながら答えた。

「見えねえよ」その返答にミキは不服そうに言った。受話器越しでも、唇をとがらせている彼女の顔が浮かんだ。

「えー。だつて阿蘇に落ちてくるつてテレビで言つてたんだよ。そこから近いジャン」

東京に住むその従姉妹に、ホンダは少し呆れて説明した。

「そりや、地図で見ればすぐ近くだらうけど、阿蘇山なんて地平線の向こうだぞ」彼の住む街、由布院からそこまではかなり距離がある。地図オンチの従姉妹の発言にはいつも呆れさせられる。だいたい、夏休みに来たじやねえか。その時も説明した筈だ。実際に大観望までドライブして「遠いねえ」と言つたのは本人だ。

「だいたい……」と言いかけて気をとられた。

見上げた空のなかに小さな、微かな光を見つけたのだ。

次の瞬間には、無数の流星群が空を覆つた。

「凄い……。インディペンデンスデイのラストみたいだ……」彼の言葉に、

「ホント？　ホントに見えたの？　テレビつけてみる」ミキはあわててリモコンを探しはじめた。

言葉を失うほど幻想的なその光景を、ホンダは見上げていた。

月に、巨大隕石が衝突したのだ。隕石の直径は6000メートル。月の裏面に衝突した。衝突地点に巨大なドームを形成し、巻き起こつた地殻津波は六時間で月面を覆いつくし、月は真っ赤な燃える玉となつた。粉砕された隕石とえぐられた月の地表は、月の重力圏外まで舞いあがり、自然地球に落下してきた。もちろん、ほとんどの

破片は大気圏内で燃え尽きるが、その落下地点が阿蘇一帯。

「スゴーカイ。ナマで見たい」ミキはテレビ中継を見たらしい。

「まさか……落ちてこないよな……」テレビ越しではない彼には、眼前に迫る天変地異である。鼓動は早まり、その場から逃げ出した衝動に駆られた。これ……逃げなくて大丈夫なのか……。

「インディペンデンスデイのラストと、ディープインパクトのラストってそっくりよね」あくまで他人事の従姉妹。凄い、キレイ、ナマで見たいと繰り返した。

その時、ひとり眩い光源が、北の空を駆けおりた。夜空に光芒を残し……。

「何だ？ アレ……」驚きと恐怖心から言葉を詰まらせた。理性ではない。人間が潜在的に持つ恐怖心。自然への畏れ。

「どうしたの？」耀クン

「今……何か、凄いモノが降りた……」

「降りた？」その言葉じりを不審にとらえたミキ。聞き返した。「落ちたの？」

ホンダは、それが消え去つた北の山の稜線から田をそらせす、咳くように答えた。

「分らない……」山の稜線は闇に沈んでいる。

「HFOとか」

「まさか」今のは、そんなモノじゃなかつた。ましてや、そんなモノ信じない。

気づいたとき、流星群は消えていた。夜空にあるのは星と真つ赤な月だけ。

「もう、（家へ）入つて寝るよ」時刻は午前一時。由布院の冬は冷え込む。九州とは思えないくらい。

「隕石が落ちたらテレビで言うだろ」

「そうね。何も無かつたみたい」

ホンダは従姉妹におやすみを言つて、携帯を切つた。

その夜、ホンダは夢を見た。何故、そんなモノを見たのか分らない。夢見ながら馬鹿げていると思ったが、誰がどう言つたって、それは女神の夢だった。美しく、輝く、乙女。それが彼に告げた。わたしの名は『エイ』。この宇宙の始まる以前の宇宙より在りしもの。我を思い出せ……。そして、なにか大事なことを言つたように思つたが、明け方には、そのことも、そんな夢を見たことも忘れていた。いつもと変わらぬ朝だった。彼は、バスの時間を気にしながら朝食をすませ、寝ぼけ眼でリビングへ出てきた小学生の弟と入れ違いに家を出た。彼の住む街に高校はない。バスで四十分離れた別府の高校へ通つている。

朝霧のなかに、浴衣姿の観光客の姿が目についた。あてもなく散歩しているようだ。いつものことだ。彼は気にも留めずすれ違つた。時間通りにバスは来た。いつもの運転手だ。いつもの乗客。だが、いつも一緒に乗る友人は来なかつた。定刻どおりにバスは発車した。由布岳の登山口を通り過ぎ、林のなかの美しい木々のトンネルの下を抜け、バスは走る。ほどなく林は途切れ、視界がひらけ高原が広がつていて。一メートルほど下の道路わきの湿地に、転落した車が数台。珍しいことではない。この道は、よく凍結する。ブラックバーンになっていることが多い。冬の朝には、見慣れた光景だ。バスはゆっくりとすべり、道路わきへ転落した。

「玄海原子力発電所に、運転停止要請」

「原子力発電所のみではなく、すべての火力発電所も運転停止」

「すべての鉄道も。現状では運行を許可できない」

「職員が被災するまえに、すべてを停めろ」

「ガスの供給も。ライフラインを絶つ」

## 2 奇禍

彼は静かに頭を起こした。肩が痛む。夕闇のなか、さかさまになつたバスの天井に横たわつていた。おぼろげに思い出す。そうだ。バスが落ちた。

何故。事故なのに……。夕方まで……。それに、誰もいない……。バスのなかは無人だつた。夕闇が忍び込んでいた。

俺は、朝から今まで気を失つていたのか……。けど、何故……。何故、助けがこないまま放つておかれたのか理解できない。

彼はゆつくりと、きしむ体を起こし、窓から車外へ出た。小雪がちらついていた。

見慣れた景色だが、何處か違和感がある。時計を見た。Gショックなのに壊れている、と思った。湿地でスニークを濡らしながら道路上へ這い上がつた。

しばらくそこで待つていたが、車は一台も通らなかつた。携帯は使えない。この山のなかは圏外だ。

彼はあきらめ、歩いて戻ることにした。幸い、怪我はしていない。何ががおかしい、そう思いながら、彼は山をくだつていつた。由布岳から先は、うつすらと雪が積もつていた。わだちの跡はない。狭霧台まで戻ってきた。山の中腹の大きなカーブにあり、展望開け、眼下に広がる街が一望できる場所。

日本有数の観光地の灯火が見えなかつた。夕闇のなかに、街はひつそりと沈んでいた。

停電？ しているのか？

何がが変だ。何か起こつてゐる。自然と足早になる。だが、街までは遠い。車なら十分もかかるないのに……。ようやく、たどり着いたときは、真つ暗闇だつた。いつも、煌々と灯りをともしているコンビニが真つ暗だ。三六五日、一四時間営

業のコンビニが、営業していない。それは、すなわち異常事態を意味していた。

ほんと駆けるように山を下ってきた彼だが、息切れもせず、そしてそれを不思議とも思わず、家路を急いだ。

街中の細い路地のあちこちに、たくさんの人影を見て、ほっと安堵した。胸をなでおろした。心配していたことを馬鹿らしく感じた。ブラブラ、散歩している、たくさんの人。なんだよ……。いつもと変わらないじゃないか……。停電しているのは変だけど、この様子なら……。ひとりとすれ違ったとき、その顔を見てぞっとした。どこを見ているか解らない虚ろな目、半開きの口、まるでヒューズがとんだような顔。その表情からは理性も知性も感じられない。

え！？ ……なんだ？

すれ違う人が、皆そだつた。

なんだよ？ 「レ。

観光客ばかりではない。彼はそのなかに友人の顔を見つけた。朝、バス停に来なかつた友人。思わずその肩をつかまえた。

「おい、どうしたんだよ。どうして朝来なかつたんだよ。どこ見てるンだ。今、何しているンだ」矢継ぎ早に聞いたが、帰つてくる答えはなかつた。彼はホンダが誰かもわかつていないう�だつた。どうなつているんだ。彼のことも気になつたが、家族のことが案じられた。ホンダは友人から離れ、家へ向かつた。

家は真つ暗だつた。玄関の扉には鍵がかかつていた。彼は鍵をあけ、入つた。闇のなかに、静まり返つている。嫌な予感に、心臓がふるえている。

何かが動いて、物陰へ隠れた。

何だ？ 鼓動が速くなる。今、何かが、テーブルの陰へ入つた。陰から様子をうかがい、出てきた小さな人影はこう言つた。

「耀にいちゃん……？」弟の亮太だつた。

「どうしたんだ。お前ひとりか。親父とお袋は」

亮太は泣きながら首をふつた。

「耀にいちゃん、今までどこにいたの……？」

「朝……バスが転落して」氣を失っていたという彼に、弟は驚くべきことを言つた。

「一週間も？」

「一週間！？ ジヤあ……時計は壊れていなかつたンだ。俺は、一週間も氣を失つていたのか。

「お前、ずっとひとりでいたのか」聞きたいことは山ほどあるが、何から聞いていいのかわからない。

「うん、だつて、パパもママも帰つてこないし……。おこいちゃんも

「いつたい、何があつたンだ」俺が眠つている間に。

「知らないの」弟は驚いたように問い合わせ返した。

「みんな、おかしくなつちゃつたんだよ。頭がおかしくなつちゃつたんだ。変わらなかつた人はみんな街を出たよ。別府や福岡の方へ行つた」信じられない話だが、たつた今、見てきたとおりだ。

「テレビは」そうか。停電していれば無理だ。

「電話は」

「つながらないよ。停電していない頃、一回だけ、ミキねえちゃんとつながつたよ。逃げてつて言つてた。化け物が人を襲つているつて……」

彼は携帯を取り出した。もうバッテリーが残り少ない。しかもつながらない。けど、聞かなきや。何なんだよ。化け物つて。逃げろつて、どこから？

情報源は？ 何かないのか？ そうだ。ノートパソコン。ネットだ。彼は自分の部屋へ駆け込み、パソコンを開き電源を入れた。バッテリーは充分ある。しかし、ページは開かなかつた。どのサイトも、エラーになる……。

背中をつつかれ、ふりかえると、亮太がラジオを手にこじりつと笑つていた。

そうだ。アナログ過ぎて忘れていたが、ラジオがあつた。災害時

に（「コレをそう呼んでよいのかどうかは判らないが）頼りになるのはラジオだけだ。スイッチを入れてすぐに、コレが、通常の災害の比ではないことを知られた。

被災地は、熊本・大分・宮崎全域。徐々に広がり、現在では福岡・佐賀・長崎・鹿児島を巻き込み、九州全県が、その災禍に襲われている。当然、ラジオ局でも異変は起こっている。喋っているのは、どう聞いたつてアナウンサーではない。「すべての空港は閉鎖され、九州を脱出する健常者<sup>ノーマル</sup>は、関門海峡や各フェリー航路の港に押しかけており……関門トンネル人道では……政府は現地入りしての精神崩壊者<sup>ティック</sup>の救済を困難と判断。自力で本州入りする健常者のみを」聞き慣れない単語が続々とびこんでくる。ルナティック、ノーマル、そしてデモニアック。どうやら精神崩壊した人々をルナティックと呼んでいるようだつた。そして健常者がノーマル。デモニアックは？ デモニアックはなんなんだ。「しかし、感染の怖れがあるため、日本政府は被災者の受け入れを……」感染？ 感染つてなんに。しかし、当初発表されたウイルス感染説は間違いであるとの意見が多く……」

亮太が説明した。

「脳細胞を破壊するウイルスに感染したんじゃないかつて、はじめ言つていたんだ」

馬鹿げている。

「それが隕石にくつついていたんじゃないかつて」

あの流星群か！？ やはり、アレが原因なのか。心のどこかで、結び付けたくなかつた事柄が、強引に結ばれてしまつた。ウイルス云々はともかく、やつぱり、流星群が原因で異変が起きたんだ。そうだ。あの、強烈な光……。いや、あの光は北の方角へ消えた。それは福岡の方だ。異常とは関係ない。だつたら、あの光はなんなんだ。

今の時点ではわかる情報はこれ以上ない。

「食べ物は？」弟に聞いた。亮太は微笑みながらチョコレートをさ

しだした。

「おにいちゃんの分、取つておいたよ」ホンダはそれを受け取ろうとして思い直した。

「いや、いい。お前が食べな。親父とお袋は？」

「その言葉を聞いたとたん、亮太が泣きべそ顔に変わる。「ずっと、帰つてこない」

「工房へは行つてみたのか」彼の両親は、観光客相手に陶芸の体験教室などしている。工房の場所は、それほど遠くない。

亮太はおびえた顔で首をふつた。彼の想像も同じ。そこに、皆と同じように我を失っている両親を見つけるのが怖いのだ。虚ろな、深淵のような、忘却の目をして。

「俺が見てくる。ここで待つていろ」ホンダは懐中電灯を取り上げた。たとえ、そうなつていたとしても、いや、そうなつていたなら、首に繩をつけてでも、ここから逃げ出さなきゃいけない。

彼の心はもう決まっていた。ここを逃げだす。別府へ行けば、大阪と四国行きのフェリーがある。なんとかしてそこまで行つて、どちらでもいい、それに乗る。九州から、脱出する。

工房まで五分もかからなかつた。扉は半開きだつた。彼はおそるおそるなかに入った。

もし、暗闇でなければ、壁一面を濡らすものが見えただろう。

懐中電灯の光のなかに、父の顔が浮かび上がつた。轆轤の上に乗つていてる。体のほうは、その向こうの闇のなかに沈んでいる。腹を食い破られ、手足を引き千切られ。

懐中電灯が落ちた。足の力が抜けた。立つていられなかつた。現実はたつたひとつだが、頭のなかは混乱していた。探すまでもなく答えはそこについたが、彼は必死であがらつていた。数分間、彼はそのまま動けなかつた。実際には数分だが、永劫のごとく感じた。クソ。しつかりしる。はじめにその言葉が頭に浮かんだところを見れば、精神は父を失つた悲しみよりも、この現実を生き延びる努力を選択したようだつた。母を捜す。馬鹿、捜すまでもない。これ

以上ここにいるのは危険だ。非情な心の声を無視して、工房の奥へ踏み込んだ。

奥の部屋で、目的のモノを見つけた。頬を涙がつたつたが、駆け寄ることはせず、ゆっくりと背を向けた。

心のなかで、何かが音をたてた。

いるんだ。何かが。ミキが言っていたモノが。

音もなく降る雪、その下に静まり返る家々のなかで、同じような光景が広がっていることが想像された。

亮太。しまった。ひとりにするんじゃなかつた。ホンダは暗闇のなかを駆けた。闇のなかには人がたくさんいる。夜目が利くようになつたのだろうか。全力疾走しているというのに、ぶつかることはまつたくなかつた。夜空に光はまつたくない。厚い雪雲がくろぐろと重く空を覆つていた。火照つた顔にあたる雪が溶ける。

亮太は息を潜めて彼の帰りを待つていた。ホンダはひとまず安堵した。が、弟の問いは残酷だつた。

「いた？」開口一番そう言つた。彼は目をそらし、床を見つめ、「いや、いなかつた」努めて平静を装い答えた。正直に話す必要は何ひとつない。

「用意して、ここを出よう。上着を着るんだ」

「どうして？ パパとママは？」再度、答えられない質問。

「搜しようがない……。生きていれば必ず会える」酷いウソを言つていると感じた。

彼はトレーナーに着替え、フィールドジャケットをはおつた。弟にもダウンジャケットを着せた。持ち出すものは、ラジオ、食料、水、けれどあまりたくさんは持てない。

武器が、欲しい。できれば銃……。が、叶うわけもない。

外が仄白んできていた。夜が明けはじめている。丁度、いい。まったく、眠くない。意識は、はつきりしている。まだ、大丈夫、だ。亮太は眠そうだ。この一週間、ろくに眠つてなかつたのだろう。俺が戻ってきて、安心したのかも知れない。眠そうだ。だが、起きて

なくてはいけない。これから、由布岳を越え、城島高原を抜け、鶴見岳をくだり別府まで徒步でゆく。

彼は弟の手をひき、家を出た。一面の雪景色だった。新雪のうえへ、踏み出した。ふりかえらない、と思っていたが、ふりかえった。十六年住んできた家。だが、昨日までの、生活はそこになかった。昨日まで（正確に言えば一週間前まで）あたりまえにあって、これからもずっと続していくものと、根拠もなく思っていたものが、跡形もなく消えていた。

「どうして、つながらないの」ミキは苛立ちながら携帯のリダイヤルを何度も押した。ネットで見た。本州へ逃れてきた被災者のなかに、デモニアックが紛れこんでいた。デマかも知れない。だけど、それが本当なら、もうすぐ九州からは出られなくなる。誰も、九州から。

つけっ放しのテレビからは、九州関連のニュースが延々ながれでいる。

「どうして救出に行かないのよ」腹立たしげにテレビに向かって咳いた。

由布岳の腹を走る曲がりくねった道で、後ろから来たシングルキヤブトラックが真横に停まり、運転席のおじさんが驚いた声で言った。

「おい、お前達、気は確かだな。どうして、まだこんなところにいるんだ」そのセリフの気は確か、といつ部分は、皮肉にも言葉どおりの意味だ。

おじさんは彼らの目的地が同じであることを知ると、荷台に乗るといい、と言った。毛布とビニールシートを貸してくれた。

ホンダは弟を毛布にくるみ荷台に座り、シートを頭からかぶつた。ゆっくりと、四駆は発進した。身を切るような風が、隙間から入り込んできた。だが、小一時間の辛抱だ。シートから顔を出した。大粒の雪が、降っている。山々がかすんでいる。水墨画の景色のようだ……。この雪が、別府に入ると雨に変わる。

アイロは空港で暴れていた。

「米軍は沖縄に行くんでしょう。だったら、乗せてってよ。わたしは沖縄に家族がいるの」

当然、軍人の答えはにべもない。

「民間人の日本渡航は禁じられています」

「知ってるわよ。だから、こんな空港に来たンじゃないつ」

「ここは一般空港ではありません。米軍基地です。そもそも、通行証はお持ちですか」

「持つてなきや入れるわけないでしょ」「大嘘だ。

「お見せください」

「入り口で見せたわ」

沖縄に連れて行けと大騒ぎする彼女を、警備員はつまみ出そうとした。じたばたする彼女のコートが破れた。

「どうてくれンのよ。上着はこれ一枚きりなのよ」

その時、そばに立つたボーアイッシュな女の子が、自分の着ていたフライトジャケットを渡しこう言つた。

「わたしは、違うのを借りられるから。よかつたら、これを着て」  
彼女は面食らつた。米軍基地にまつたく不似合いな女の子。たぶん、十代後半。

「あ、ありがと。あなたは……日系人?」彼女がそう思つたもの無理はない。女の子は金髪のショートボブだったが、東洋系の顔立ちをしていた。二重瞼で切れ長の瞳。薄い唇。そして、白人にしては小柄な体。けれど、違つたらしい。女の子は首をふつた。それから、わたしも沖縄に行くつもりなの、と言い、「軍にコネがあるの。話してあげるから、一緒に来るといいわ」と言つた。

渡りに船だわ。なんて幸運。

「わたしはアイコ。大学生よ。あなたは?」アメリカ人? かしら。訛りがあるけれど。

相手は驚いた顔をしている。アイコはそんな反応には慣れていた。やつぱり、こいつもアメリカ人だわ。東洋人の年齢がわからない。

「年上とは思わなかつたわ……」

「そう。ハイスクールの生徒に見えた?」

「えつと……」相手は言葉を濁した。もつと下かよ。

「わたしはイリア・サロニケ・アーナ。十六歳よ」年齢がわからぬのはアイコも同じだった。随分、大人っぽいじゃない。ませていのね。それにしても、十六歳の少女がたつたひとりで何故日本へ行くのかしら。それに、その名前、何人。

「わたしは二十歳。沖縄に家族がいるの。あなたは何故日本に行くの」

相手は少し考え、こう答えた。

「夢を見るの……。子供の頃から」繰り返し、同じ夢を。

「どんな?」それが今の日本と関係あるの? 聞き返しても、うまく言えないわ、としか答えなかつた。

眼下に、湯煙たなびく、日本最大の温泉地が広がつた。車は急な坂をくだり市街地へ入つた。思つたとおり、嫌な雨になつた。「温泉にはいりたい」亮太が言つた。そんな呑氣なことを、とは思わなかつた。冷えた体を温めたい。

放置された自動車が、いたるところで道をふさいでいた。そして、あてどなく歩いているたくさんの人。うすくまり頭を抱えている人。虚ろに空を見ている人。トラックは、ゆっくりとそれらをよけて進んでいった。ホンダは、荷台の上から絶望的な気分でその光景を見た。

十号線に出ると、車はまったく進めなくなつた。見渡す限り、放置された車でつまつっている。おじさんは車を降りると、荷台のふたりに言つた。

「ここから先は無理だ。おじさんは家族が待つてゐるから走つていく。お前達も急げよ。乗り遅れるぞ」そうつりて、走つていつた。「行こ! 亮太。一キロもない」

無言で見上げうなずく弟。

ホンダは、亮太の手をひき走つた。前方の建物の隙間に、フェリーが見える。白い船体に赤い模様。

「おにいちゃん。痛いよ」気づけば、彼は弟の手を引きずるように

して駆けていた。

「ごめんよ。と言い、背をかがめ弟をおぶつた。山を駆けくだつたときも感じたが……。何か変だ。イメージより遠い地点を足がとらえる。風を切る身体が、かつてないほど軽い。

フェリー埠頭には千人以上の人人がいた。正気を保っている人々。彼らの姿をして、ホンダは少し勇気を取り戻した。まだ、これだけ、いる。フェリーは、これ以上積みこめないというほど、人を積みこみ、丁度桟橋を離れたところだった。それが波をわり、沖へむかつしていく様を、埠頭から見送るしかなかつた。

「おにいちゃん……」亮太が不安げな顔をむける。

「大丈夫だ。すぐに次の便が来る。まだ、これだけ残つていいんだが、フェリーが戻つてくることはなかつた。二日たつても。

二日目の朝、埠頭に取り残された千人のうち、半数が北を目指して移動を始めた。そのなかに、トラックに乗せてくれた親切なおじさんの顔もあつた。関門海峡を渡ると言つていた。人道があるからと。だが、そこから関門まで、距離約百キロ。

一日間のうちに、親しくなつた人からかなり情報を得ることができた。だが、親しく話していた同世代の少女が、突如精神崩壊する様を見て（それは表情からすぐにつかがえた）、人と話すことをやめた。

埠頭でフェリーを待つ、約五百人。歯が欠けるように、その集団から離れていく人々。正気を失い……。いつ襲われるかわからない狂気の恐怖に耐えながら、じつと待つだけの時間。携帯のバッテリーは完全に切れた。コンビニで簡易充電器を探したが、ひとつも残つていなかつた。外界との連絡手段は一切断たれた。ラジオ局も沈黙している。大分だけではない。福岡の放送局も。雑音が多く聞き取り難いが、AMで山口放送と愛媛放送が入る。それだけが情報源だつたが、希望の持てるような情報は一切なかつた。九州内の原子力発電所は安全に停止された。九州を離発着する飛行機は全便欠航で再開の見通しはない。九州内の鉄道はすべて運休。こちらも運転

再開は望めない。九州を脱出しようという人間にとっては、どうでもいい話ばかりだった。福岡ドームの未知の光については、自衛隊が処理にむかつたが、まったく近寄れない状態。何だよ、光つて……。山口県内でデモニアックが確認され、政府は対策を協議中。だから、何なんだよ。デモニアックつて……。

黒電話！ 田の湯旅館のフロントにあつたのは黒電話だった。以前、家族と泊まつたその旅館のことを思い出した。黒電話ならつながる確立は高いかも知れない。彼は立ち上がつた。

「亮太、みんなとここで待つていいんだ。電話できるかも知れない」ホンダはそう言い残すと駆け出した。キーがついたままのバイクを見つけた。一瞬、躊躇したが、またがつた。ハーフメットをかぶつた。エンジンをかけた。

アイコはボーイングB747-400政府専用機のなかで、知り合つたばかりの少女と並んで座つていた。イリア・サロニケ・アナというその少女は軍にコネがあると言つていた。だが、どれほどのものなのか。この飛行機は大統領専用機のエアフォース・ワンと同型だ。いつたい何者？ 大金持ちのお嬢さんかしら。そう考えて見れば、どことなく立ち居振る舞いに気品がある（ほんの少し）気もする。お金持ちはお嬢さんが、物見遊山気分で日本に行くつもりかしら。護衛もなしに？ ありえない。それに前言撤回。こんながさつなお嬢様はいない。物怖じしない性格らしく、大胆というか、不敵というか、ぐうぐう眠つている。寝顔を見ていると、本当にまだ子供だ。あどけなさが残る。

アイコは、沖縄に着いた後のことを考えた。家族が、石垣から台湾へ渡れるよう手配しよう。石垣には台湾の貨物船がたくさん来ている。たぶん、法外な料金を要求されるだろうけれど。それは世の常。問題はその後だ。漁船がチャーターできればいいけれど……。本土に行つてくれる漁船があるかしら……。彼女の目的地は、沖縄ではなく、奇禍に襲われた九州だつた。

隣の少女ががばつとはね起きた。アイコのほうが吃驚した。

「どうしたの？」

「夢を見たの……。さつき話した夢」それから少女は、彼女がよく知る名を出した。

「ラ・プティエリ・ア・ナネという人知ってる？」

アイコは心胆でんぐり返るかと思うほど吃驚した。

「どうしてその名前を知つているの！？」

「その人が夢に出てくる……。エレボスを搜せと……」

その名に、再び驚かされたアイコ。これは偶然の一致なんかじゃないわ。名前がふたつも出てきた。この子は、何もの？

彼女は自分の手荷物のなかから、一冊の本を取り出しぢーナに見せた。

「これ、読んだことある?」

古ぼけたその本の表紙には、フランス語で『エト・エウトクタ』。  
「何……この本……グリモア（中世の魔術文献の総称）……？」  
少女はそれを手に取り、裏表紙に容易ならざるものを見つけ咎めた。  
「ミスカトニック大学図書館蔵・閲覧禁止・持出禁止と書いてあるわ」

「そこはいいから」と言つアイコを呆れた顔で見るジーナ。  
ページを開いた。数行読みすすめて、

「これは、いつたい何時代の、どこの国の話なの」呟いた。が、それはアイコも知らない。

彼女の知っているのは、少女の見る夢に出てくる人名が、その物語のなかにあること。その物語のなかのいくつかの人名は、『エノク書』にもあらわれること。サムヤサ、そしてア・ナネ。エリゴールや、エレボスも表記や訛りが加わり変化しただけで、『エノク書』へと連続しているのかもしれない。ただし、『エノク書』ではどれも男の神、いえ、墮天使、つまり悪魔として描かれているけれど。

### 3 剣

田の湯旅館は古い民宿だから、自動ドアなどない。玄関の扉は開いたままになっていた。目的の黒電話も以前来たときそのままにあつた。

ホンダは受話器をつかみ、ダイヤルをまわした。携帯に、いや、自宅だ。

彼の心臓が波打つた。呼び出し音が聞こえたのだ。機械的に連続して告げる呼び出し。頼む。家にいてくれ。これを切れば、もう一度ダイヤルしてもつながるとは限らない。呼び出し音が途切れた。受話器があがつた。

「もしもし……」それだけ言つのがやつとで、言葉が詰まつた。相手は彼の声に気づいた。

「耀クン！？ 耀クンなの！？」

「そうだ……。やつとつながつた……」

ミキは涙声で言つた。

「今、どこ？ 大丈夫だった……？ わたし、何度も電話したけど、全然つながらなくて……」

「アナログ電話を見つけて、それで……」

「みんな無事なの？ 亮太クンも伯父さん達も」

「亮太は無事だ……。今、フェリーを待つていて。別府まで来たんだ」両親のことは言わなかつた。ミキもさとつた。

「もう、一日も待たされている……。フェリーが来ない」

「駄目よ……。もう、来ないわ。関門海峡から逃げて……。急いで。そこも、もうすぐ封鎖されるから……」

「どうして」

「九州から逃げてきた人達のなかに、『デモニアック』が紛れ込んでいたの。だから」

「また、だ。なんだよ。その、『デモニアック』つて。

「いい。耀クン。ミキのこと馬鹿にしないで真剣に聞いてくれる」

ミキはあらためて真面目な口調で言つた。

「悪魔がいるの」

「確かに夢のなかでわたしは深い霧のなかにいる。その奥にそびえ立つ塔のイメージも同じよ。内容はわかつたけれど……どうしてわ

たしがこの人の夢を見るのか説明できない」

もつともだわ、とアイコは答えた。本人がそれを知らない以上、推理すらできない。

それよりも、と彼女は思つた。数時間と一緒に過ごしての感想だ。この子はいったい何人かしら。彼女はふたたび疑いはじめた。ううん。何者？

乾いた目に何かが滲んだ気がした。それは、言葉どおりの意味でいいのか。それが、俺の両親を……したのか……。喉がつまつた。「それは身体を持たないの……。人間に憑依するの。憑依された人は化け物みたいになつて人を襲うの……。だから、早く、逃げて……」

「そつちは、全然無事なのか」東京のことを聞いた。

「凄い混乱しちゃつてるけど……。コースは全然信用できない。確かなことは、それがどんどん広がっていること。はじめは阿蘇一帯。今では九州全域。もし、関門海峡を渡れなかつたら、韓国へ逃げて」

「どうやつて?」

「船で。ヨットでもクルーザーでもいいから」

「運転したことない」

「でも、飛行機を運転するよりはマシでしょ?」ミキは涙声で笑つた。

「ソウルに友達がいるわ。迎えに行くよつに頼んでおくから」

「名前は?」

「ミランスー。住所も教えておくわ。もし、会えなかつたら訪ねていつて。メモはある?」

彼は、フロントの上のメモ用紙とペンを取り、彼女の言う住所を筆記した。これから関門海峡へむかつても何日かかるかわからない。タイミング的に封鎖されている可能性が高い。船しかないかも知れない。GPS付きのそれなら、素人でも方角を見失うことはないと思う。希望的観測だが。SOSを打ち続けながら航行すれば、救助が期待できる。嵐に巻き込まれたら……それまでだ。

必ず、逃げてきて。通話の最後にミキはそつと泣いた。彼は受話器をおき、日本地図を頭に思い浮かべた。その作業が必要に思われたからだ。何か、ひつかかっていた。フロントの横の壁に、ハ

ングル文字で『よつこや。別府へ』と書かれたポスターがあつた。  
気づいた。

あの、地図オンチめ。どんどん広がつてゐるなら、東京より先に  
韓国が被災するじゃないか。  
九州からは韓国のはうが近い。

「あなたはどうしてこんな本を持っているの？」

瞳に少し警戒の色を浮かべながら少女は聞いた。

「わたしは大学で神学を専攻しているわ。民族の伝承や古い信仰を研究しているの」

だから日本へ向かっている。悪魔の存在を確かめるため。

「あなたが夢で見るア・ナネがエレボスを捜せと言っているわけでしょ。日本にそれがいると思っているの？」 そうでなければ、この少女が日本へ行く理由にはならない。

「彼女の夢は、子供の頃から見ているけれど、いつも無言だった。日本に異変が起きてから。自分をラ・プティエリ・ア・ナネと名乗る、エレボスを捜しなさいと言った。根拠としては薄いかも知れなけれど……」

その通りだわ。アイコは思った。逆に言えば、彼女が日本へ行く理由は他にあるということ。それが何か。たぶん聞いても答えないでしようけど。

ともかく、日本にいるのは、オル・ヴァブ。伝承を信じるなら、間違いない。理由はわからないけれど、目覚めた。確かに言えることはこれ一点だけ。

埠頭へ戻ろうと狭い路地へ入った。人影に驚きはしない。見慣れている。が、その女は巫女姿だった。赤い鳥居の前に立つてこっちを見ていた。艶やかな長い髪、切れ長の妖艶な瞳、赤い唇。その口が彼に向かって開いた。咄嗟にバイクを停めた。

「あなたは、無事なのか……」 正気なのに、何故こんなところに一人でいる？

女はふつと笑った。

「わたいかい？ わたいは人じやあないからねえ」 その返答にホン

ダは思わず身構えた。人じゃない？ すると、コレがテモニアック  
？

「わたしの名は媚狐郎。妖狐じやよ。齡三千年になろうかいのう。

今はそこのお稲荷さんじゃえ」

お稲荷さん！？ つて狐の神様か？ こんなモノまで現れるのか。  
それとも喋れるルナティックなのか。いくら悪魔が跋扈していると  
はいえ、お稲荷さんですと言われ、はいそうですか、とは思わない。  
「お前さん、懐かしい男の臭いがする。キハヤと同じ血の臭いじゃ  
キハヤ？ つて誰だ。ホンダの心を見透かしたように、女は言葉  
を続けた。

「その昔、ひとりの男があつてのう。駆ければ疾きこと狗のよう、  
跳べばさながら天狗のよつ」

「俺は……普通の人間だ」親だつて、普通の人間だつた。先祖代々  
そうだつた。

女はふつと笑い、

「その血のものは、この刀の使い手。持つておゆき」一振りの日本  
刀を投げてよこした。いや、日本刀に似ているが以つて異なるもの。  
柄が極端に短い。片手分のグリップしかない。アンバランスな刀。  
「音速の剣」という。神器じやよ。その刀、お前がふるえれば音の速さ  
を超え、雷鳴とどろくはず」信じられないことを言つ。

ホンダは、半信半疑でその刀を抜いた。肉厚で鎬高い。火焰の波  
紋。軽くふつてみた。自身の腕が、ふるつた太刀筋が見えなかつた。  
飛行機が音速を超えるときと同じ音。どどろいた。

ど胆を抜かれた。

狐はにたりと笑つた。

「神器もあるが妖刀じやえ……」

どつちだつてクソ喰らえだ。なんだよ、コレ。こんなの……信じ  
られない。

「どういうことなんだ。何だ、この刀。誰がつくつたんだ」

「さあねえ。わたいが知つてゐるより、もつとずっと昔のものじや  
られない。

え」そう言われても、そんな昔のものには見えない。鎧ひとつない。

「俺は……誰なんだ」心のなかにわいた当然の疑問。

「もう、飽いた。わたしは行くぞえ。目が覚めたらお堂の刀を持つていきなさい」

「えつ」どういうことだ。ちょっと待つてくれ。もつと話を。そう思つたとき、目が覚めた。彼はアスファルトのうえに倒れていた。バイクはずつと先に横倒しになつてある。夕陽に照らされている。

……転倒したのか。それで幻覚を見た……？ だが。

彼は立ち上がつた。赤い鳥居の前だつた。お堂の前に、夢で見たと同じ刀が置いてあつた。幻怪……。

彼は信じられない面持ちでその刀を手に取り、抜き、ふりおろした。

雷鳴どどりいた。商店の窓ガラスが振動で粉々に砕け散つた。

ミキは通話を終えると、コリアの友人にメールした。彼女は私学の付属高校に通つてゐる。その大学に、短期留学してきたのがミヨンスーだ。ミキの家にホームステイし、親しくなつた。帰国後もメールのやり取りがある。もつとも、ミヨンスーは日本語を話せるし読めるが、書くのはあまり得意ではない。ミキは、ハングル文字はまったく馴染だ。自然、英文でのメールが多くなるが、ミキはそつちもからつきしだつた。

ともかく、ひらがなを多用したメールを出した。わたしのいとこがそつちへいくかもしれない。コリアににげるしかないの。ようしく。

「これで大丈夫かしら？」とは、当然思つた。

「関門海峡封鎖」

「取り残された被災者は」

「やむを得ない。これ以上被害の拡大を許すわけにはいかない」

「しかし……無理があります。たとえ橋とトンネルを封鎖したとし

ても……」

「海の難所とはいえ幅数キロの海峡です。潮の停まる時間帯を見計らって船で渡ることもできます」

「報道規制を……。自衛隊に発砲許可を出す」

「国民に威嚇射撃を！？」

「いや……。威嚇ではない……」

突然、テレビが九州関連のニュースをやめ、通常番組に戻った。NHKは『名曲アルバム』総集編、延々外国の風景をバックに管弦楽を流した。

「なに『レ？』」ミキは目が点になつた。チャンネルをかえた。報道一色だったテレビが、どの局も通常番組に戻つてている。それも取つてつけたようなモノばかり。

「情報統制だ」彼女の父親が言つた。

「情報統制？」

「都合の悪いことが起こっているんだろ」と言い、続けて、テレビ朝陽はどうだ？ あそこは多少反体制的だし、報道に重点を置いているから、と言つた。だが、目にしたのは『世界の車窓から』総集編。どうやら、これを延々続けるらしい。地球を一周するまでか。

そう。わかつたわ。国民に知られてましいことを政府はやろうとしているわけね。だけど、人の口に戸は立てられないわよ、だつける。テレビが役立たずのクズなら、ネットで調べてやるわ。

そのまえに、彼女は地図帳を開いた。九州から韓国まで、船で何時間くらいかかるのか、地図上で推し量つてみようと思つたからだ。夏休み、大阪からフェリーに乗つて大分に行つた時は、一晩かかる。だつたら、韓国は……。あら、と思つた。……韓国つて、遠いのね、九州から。これを船で行くなんて無理だわ。どうじよつ。

彼女の地理観はホンダの理解力を上回つていた。

## デモニアック

### 4 デモニアック

亮太は兄の帰りを待つていた。喉が渴きお腹がすいたが、もう水も食料もなくなっていた。電気のついてない自動販売機にコインを入れたが、飲み物が出てくることはなかつた。だぼだぼのズボンをはいた、いかにも不良っぽい金髪の少年が、バールを手に言つた。

「ボウズ。ジュース出してやろうつか」

亮太の返事も待たず、少年は自動販売機の鍵穴に細いピンを入れ力チャカチャとこね、カバツと開いた開閉部の隙間にバールをこじ入れ、器用にねじり、バキッと音をたて扉を開いた。なかばジュー

スの山だつた。冷えてはいなが。一本を亮太に投げて渡し、

「芸は身をたすく、だつけ。まさか、こんな風に役に立つとは思わなかつたぜ」と笑つた。亮太も笑みを返した。コワイおにいちゃんかなと思つたが、いい人みたいただ。

あつという間に、その場は黒山の人だかりとなつた。飲料を求める人が、押し合いへし合い。バールを手にした少年は呆れ顔で、「俺は自分の分は取つたからもういい。お前ら、好きにしな」と吐き捨て立ち去つた。

押し合う人のなかにも入れず、遠巻きに見ている少女がいた。亮太より少し年上。長い髪、内気そうな瞳に桜色の頬。見るからに大人しそうなその女の子が、あの争いに入れるとは思えなかつた。

「もう、半分しか残つてないけど……」亮太は自分のジュースを差し出した。

女の子は「ありがとう」と言い、受け取つた。

「わたし、仲井麻奈。あなたは?」はにかみながら言つた。

「ぼく、亮太。ホンダリヨウタ」

「あなたのお父さんは?」

悪氣があつて聞いたわけではない。けれど、リヨウタは答えられ

なかつた。

「にいさんが言つてた。生きていれば、必ず会えるつて。にいさんは今、電話を探しに行つてゐる」

少女は、そう……。悪いことを聞いてごめんなさい、と言い、寂しげな顔をした。

「わたしもパパとふたり。食べ物を探しに行つたわ……。ねえ、フェリー来ると思う?」

「来るさ。こんなに人が残つてゐるんだもの」

ふたりは海を見た。水平線のうえは赤い夕焼け。フェリーが来るまで、みんな無事だらうか……。いつの間にか、消えていく人がいる。

「ねえ」急に麻奈は明るい声で言つた。「ゲームボーイ持つてる?」唐突な問いに亮太は思わず笑顔が出た。

「持つてるけど充電切れだよ」当然そうだ。

「わたしも」と言つて麻奈も笑つた。

「もしも……。フェリーに乗れて、充電できたら、通信バトルしよう

「いいけど。何の?」

「ポケモンは?」

「ぼくの手持ち強いよ

「百レベル何体?」

五体。わたしの勝ち。え、何体なの。十二体。凄いと驚く亮太に、「本当は、半分は妹のな」と麻奈。言葉を詰まらせる。それだけで、何があつたかわかつてしまつた。

亮太は、何も言えず、空を仰いだ。ぽつんと口から出た。

「ポケモンがいるといいなあ……」

麻奈の顔が亮太のほうをむく。

「そしたら空を飛んでどこでも行けるのに……」

麻奈も思わず微笑んだ。

後ろのほう、遠くで物音がした。ドラム缶が倒れるような音。ふ

たりはふりかえった。駆けてくる数人の人。その姿を見て麻奈が言った。

「パパ……」夕陽の逆光を受け、目を凝らす。その後ろにいるモノ。たくさん……。

蜥蜴に似た顔。大きく裂けた口に無数の牙。長い腕の先に鋭い爪。腰から下は獸皮に覆われた毛むくじやらの足……。

「パパ！」麻奈が鋭く叫んだ。その声は、父親の耳にも届いた。

「麻奈、逃げる」そう叫ぶと、彼は娘を守ろうと向きを変えた。獸の爪が易々とその体をとらえた。その場に引き倒される。血しぶきがあがる。獸が群がる。

「いや、いやあ。パパ！」駆け寄ろうとする麻奈を、亮太は必死で抑えた。どうしたらしい、どうしよう……。化け物はいっぱいこっちへ来ている。おにいちゃん……どうしたら。

声が聞こえた。

「早くっ！！　こっちへ来るんだっ！！」ふりかえれば、さつきの金髪のおにいちゃんだ。フェリー乗り場のビルの入り口で手をふっている。他の大人もみんなそっちへ走っている。

亮太は泣きじゃくる麻奈の手をひき走った。たどり着くと大人たちに奥へ押し込まれた。「女子供は奥へ」誰かが叫んでいた。建物は鉄筋コンクリ、だが全面硝子張り。しかも入り口は自動ドア。通電していない今、閉じない。自然、人が盾となる。

なかには、自分だけ助かればいい、そう思う人間もいた。そいつらは人を押しのけ奥へ逃れた。が、大多数の大人の男達は勇敢だつた。己が身を盾に獸の群れに立ちむかつた。手にした得物はバールや鉄パイプ。中に自衛隊員が数人いた。別府には演習地がある。そこで被災して隊を離脱した者達だ。当然、自動小銃を持っている。アサルト・ライフルだ。八九式小銃。乱射した。が、獸はよけた。「クソ。弾をよけるという噂は本当だつたんだ」ひとりが呟いた。次の瞬間には、最初の一匹が躍りかかっていた。台尻で殴り倒した。が、津波のよつに押し寄せた。血しぶきがあがつた。その、血

の噴水を突き破るようにして、何匹も人垣のうえに飛びこんできた。手当たり次第に喰らいつき、その鋭い爪で人を引き裂く獣。窓ガラスも破られた。悲鳴があがる。

亮太は状況がまったくわからなかつた。おみやげ物を売る台の上によじ登つた。周囲が見えた。地獄。身動きできない、逃げることも叶わない人達に襲い掛かる牙と爪。飛び散る血。べつとりと血で濡れた髪の毛。強烈な、その臭い。悲鳴と泣き声。みんな、死んじやう……。その時。

轟音。雷が落ちたと思った。それもすぐ近くに。だけど、その音は立て続けに響いた。建物の外で、粉々に飛び散る獣が見えた。木端微塵に。飛び散る肉片のさなかに見たのは。

ハーフメット、黒いフィールドジャケット、そして刀を手にした兄の耀。

その兄が、刀をふるう。手が見えない。魔物が木端微塵になる。

爆音がどどろき、周囲の魔物が転がる。

「おにいちゃん……」

「あなたのお兄さん?」気づけば麻奈が横に立つていた。息をのみ、涙の滲んだ目をみはつていた。

建物に入り込んでいた化け物達が退いた。いっせいに、耀の方へ向かっている。その数、二十匹くらい。すぐに取り囲まれた。

「おにいちゃんが、殺されちゃう……」

ホンダは狐に貰つた刀を手に、獣と対峙していた。その数、約二十。既に五・六匹は倒した。凄い刀だつた。斬つた相手が粉々の肉片になつて飛び散る。まわりの敵が衝撃波に転がる。足元のコンクリは割れ舞い上がり、太刀筋に沿い地から剥がれる。音速の剣と言つた。その名の通りだ。刀をふるう自分の腕が見えない。逆に、彼の目は、俊敏な獣の動きをスロー・モーションのようにとらえていた。何故かはわからない。勝手に反応する。反射的に動く。しかも、恐怖は、感じない。それも、また、不思議だつた。たくさんの人を殺した獣。だが、憎しみもまた感じていなかつた。感じるのは鬪気のみ。弟のことさえ忘れていた。四方八方から襲い掛かる獣に、腕をふりおろし、横に薙ぐ。とどろく轟音。増幅される衝撃波に、小さな血の竜巻さえ起きた。

冷静だつた。こいつらがデモニアック。違う。こいつらは兵隊だ。親玉のデモニアックはあそこにいる。

人に似た身体にふたつの首、ひとつは鴉の頭、ひとつは青白い老人の顔、背中に十四枚の翼カラスを持ち、腰から下はこの獣達と同じ山羊に似た足。獣の群れのむこうに、瘴氣をまとつて浮いている。地上一メートル。

片目眇めて敵を見た。奴を殺す。

右手に刃、左手に鞘、頭を低くして駆けた。襲い掛かる獣は薙ぎ払う。降り注ぐ血と肉片のなかを駆け抜けた。阻む獣。フェイント。左に行くと見せて右へ抜けた。抜けざま隻腕ふるい斬つた。とどろく爆音。躍り出た。そのデモニアックのまえに。鴉の口が開いた。「これは、喫驚。きつきょう その刃、その眼。まなこ その血の者がまだあつたとは」口がきけるのか、こいつは。ならば、問うまで。ハツ裂きにするまえに。

「貴様に問う。その血とは」

「己を知らぬか。エレボスよ。混沌の子よ」

エレボス？ 名を知つても、何者か説明はつかない。

「エレボスとは何だ」

悪魔はにたりと笑つた。

「貴様にウィルオトスについて話しても理解できまい」

「ウィルオ……」

「ウィルオトスはめんめんと受け継がれるもの。我はその完成形なり。我においてそれはもはや変わらぬ」何を言つてやがる。

「貴様は悪魔か」その名の通りのモノなのか。

高らかな哄笑をもつて悪魔は答えた。

「忘れたか。我が名はアンドレアス。干戈を交えるか。エレボスよ。愚かな。汝に我は斬れぬ」 悪魔が剣を抜いた。その足が地についた。刹那。瘴氣渦巻き、獰猛な悪魔の刃が襲い掛かった。弾いた。弾いただけで爆音どろいた。悪魔が羽ばたき身を宙に躍らせた。あわせて跳躍した。宙を斜めに飛びながら、腕をふり抜いた。轟音と衝撃波。悪魔の身体が粉々に吹き飛んだ。

地に転がった鴉の首が、口を開いた。嘲りとともに。

「貴様に我は斬れぬ」首は人間の頭に変わつた。

忘れていた。これは人間に憑依する。俺が斬つたのは、人間……？

背後から、斬つたはずの悪魔の声が聞こえた。人垣の中から。

「故に言つたであろう。我は斬れぬ」

ふたたび、宙約一メートルのところに浮いている。その鋭い爪に子供をつかみ。子供は女の子。悲鳴があがり人垣が割れた。たつたひとり、悪魔の足にしがみつく少年の姿が見えた。離せ、離せよ、小さな拳で殴つている。

「亮太っ！」ホンダは叫んだ。亮太はふりかえった。

「おにいちゃん、助けてよ。麻奈ちゃんが殺されちゃう」その声に覆いかぶせるように悪魔が言つた。

「これは貴様の家族か。面白い。引き裂けば貴様は苦しむだろう。それが人間だ。笑えるほど弱い」その爪を亮太の頭にかけた。

クソ野郎。させるか。ホンダは剣を投げようとした。その時。

「許せ」悪魔の正面に立つた自衛隊員、そう言うと自動小銃を乱射して、その頭部に銃弾をぶち込んだ。崩れ落ちる悪魔の身体。地に倒れたときには自衛隊の服を着た人間の姿に変わっていた。頭はぐちやぐちやに砕けていた。

悪魔は、それ以上憑依することはせず、何処か遠くへ去ったようだつた。獣の姿も消えていた。血まみれのルナティックの姿がそこかしこにあつた。……そのふたつを結びつけて考えたくない。……許されるなら。

ホンダは刀をふるつた。轟音とどろいた。一瞬で、刀身の血は吹き飛ばされた。一滴の血も残っていない。鞘におさめた。

既に薄暗がり。陽が残つていれば、埠頭じゅうに散らばる肉片とコンクリを濡らす血が見えただろう。海上に赤い月。水面に映つている。ゆらゆらと波に揺れ……。美しいとは思わない。禍々しい。

生き残りは、約二十人。デモニアックを撃つた自衛隊員が歩み寄り聞いた。

「俺の名は豊田。君は？」

「ホンダ……」

「いや、君のことだ。その刀は？　君は何者なんだ」  
「それは、彼自身が一番知りたい。」  
「わからない……」

## 5 海峡封鎖

関門海峡。建設当時、世界最大のつり橋といわれた関門橋は、本州へ渡る人であふれていた。放置された車が道をふさぎ、通行できる状態ではない。強風に煽られ、時折落ちそうになる人もいる。それでも、押し合いへし合い、人々は本州へ向かっていた。その本州側に自衛隊員が控えていた。目配せをし、時計の針を確認して、うなずきあうと、突然、通行を押しとめた。笛を吹き、人々を手で制し、その流れを止め、自衛隊の車両が道路を封鎖した。素早く、他の隊員が鉄条網を張りめぐらせた。罵声がとび、悲鳴があがり、怒号飛び交った。が、銃を以つて威嚇した。それが返答だった。

鉄条網で引き裂かれた親子が多数いた。本州側の親が、娘に手を伸ばす。が、隊員に連れ去られる。娘は泣き崩れ、いつまでもその場を離れない。一組の夫婦が、幼い我が子を鉄条網の向こうに投げ入れた。隊員が気づいた。逃げなさい、夫婦は必死で叫んだ。が、子供は金網のむこうでパパとママを呼んでいる。父親が怒った顔を見せた。ようやく子供は駆け出した。母親が夫にすがつて泣いた。鉄条網だけでは不十分だとばかり、隊員は土嚢を積み始めた。その作業中も、整然と並び、銃口をこちらに向いている隊員。取り残された人々の顔に絶望が浮かんだ。吹き抜ける強風が、人々のすすり泣きをさらつていった。

同時刻。関門トンネル人道出口。通常は、エレベーターで昇降する。が、通電していない現在、被災者達は長い非常階段をのぼつて本州へ入つてきていた。あと、少し。もう一段で本州の扉だ。突然、扉は閉じられた。施錠された。暗闇のなかに、人々は取り残された。叩いても、蹴つても、その扉が開くことは二度となかった。

関門トンネル入り口、門司港側。こちらもまた、現在車の通行はなく、流れているのは人の群れである。九州各县から避難してきた

人々。ゲートは開け放たれ、道路公団の職員の代わりに、自衛官がいた。彼らも、時計を確認し、いっせいにゲートを閉じた。自衛隊の車両が道路を封鎖し、鉄条網が張りめぐらされ、警備の隊員が立つた。銃を持つていてる。

そこでは暴動が起きた。自衛官が威嚇射撃をしたが、押し寄せた群衆は隊員を押し倒し、ゲートをよじ登り、鉄条網を踏み越え、トンネルの中になだれをうつて駆け込んだ。だが、真っ暗で長いトンネルの最後までたどり着いた彼らが得たものは絶望。そのトンネルには出口がなかつた。下関側は完全にふさがれていた。崩れ落ちた天井で。

生き残りは十八人。ホンダと弟の亮太。仲井麻奈。自衛官の豊田。金髪の少年（川野と言つた）、妊婦とその夫。老人。数人の男女。二十代に三十代……。

「フェリーは来ない」彼らをまえにホンダは言つた。  
「東京と電話がつながつた。確認した。フェリーはもう来ない。北へ。関門海峡を渡るしかない。そこも、もうすぐ封鎖される」

「車は無理だな」豊田が言つた。歩いていくしかない。全員の顔を見回した。

彼の考えていることはわかる。着いて来れそうにない者を選別している。老人、妊婦、子供……。いや、体力のある者でも、いつもナティックとなるかわからない。その時は残酷な決断をしなければならない。もちろん、彼自身がそうなる可能性は承知のうえ。

「もし、海峡が封鎖されいたら、船しかない。適当なクルーザーを盗んで」

「どこへ行く」

「韓国。ないし、瀬戸内海を東上し広島、岡山あたりを目指すか、日本海へ出て鳥取あたりを目指すか……」山口県は頭になかつた。自分達がたどり着く頃には、当然、被災しているだろうから。

「素人の俺達がか？　この中に船舶の免許を持つていてる者は？」素

人ばかりで海へ出るほど危険なことはない。だが、誰ひとり、手を上げる者はいなかつた。

しかも、たとえたどり着けたとしても、そこが安住の地ではない。これが広がつているのなら、さらに逃げなければならない。どこまで……？

## 6・沖縄

「ふたりで二十万。それ以上は出せないわ。どうせ、向こうで密を拾つてくるんでしょ」

きつぱりとアイコは言い切つた。船長は、苦い笑いを浮かべ舌打ちして答えた。

「しようがねえなあ……。出航は明日の十時だ。それまでに用意して来な」しかし、今どき、本土へ渡りうたあ、醉狂な娘だ。とつけくわえた。

鹿児島から脱出する被災者を拾い、法外な値段で沖縄へ逃れさせる船があると聞き、訪ねたのだ。船長にしてみれば、往路の客など皆無だから拒む理由はない。

これで、九州へ渡る段取りはできた。既に、家族を台湾へ密航させる段取りも済んでいる。パスポートのない渡航だから、当然、彼らは難民となる。が、それも仕方ない。

皆、考えが甘い。この奇禍を、九州を襲つた局地的なものとどちらにいる。そうじやない。違う。コレが、オル・ヴァブの災禍なら、この禍いは地球規模へ広がる。

C-17Aは輸送機だ。ずんぐりしたボディが滑走路にある。アレに乗せてもらえれば言つことないんだけど……。

沖縄、嘉手納基地。イリア・サロニケ・アニナは指示された人物に会つた。あらわれた人物はこう言つた。

「残念ながら、ここまでだ。君を日本へ送ることはできない。すまない」師団長のリチャード・ネルソン。

「そう……。無理を言つてごめんなさい」

「しかし、何故、君が日本へ行く?」この男は、そこまでは聞いていない。尽力してくれたのは、上からの命令だから。黙つている彼

女に、続けて言つた。

「日本へ行けば、遅かれ早かれ正氣を失う。昨日はパイロットがやられた。搭乗者は全員死亡。部下を失つた」

ネルソンは大きくため息をつき、

「なにが起つているのかわからない。どう作戦を展開すべきかも、敵がなにかも、わからない。被災者の救出も止められている。何もできない……」 最後は咳くような嘆きだつた。

ポケットからコインロッカーの鍵を取り出した。

「頼まれたモノを入れておいた。那覇空港西口のコインロッカーだ。私にできるのはここまでだ」

「ありがとう」 礼を言い、立ち去りうとした彼女に、ネルソンは言った。

「もう、会う」とはないのだろうな……

ふりかえり、笑みを浮かべた。

「たぶん……」

那覇空港のコインロッカーから、彼女は大きな鞄を引きずり出した。女性用トイレの個室に入つて中を確かめた。

9mmオートを二丁取り出した。フレームがオリーブ色のスプリングフイールドXDピストル。五インチ、タクティカルモデルだ。それからオーストリア製ステアーティムP二丁。これはサブマシンガンだが、そのコンパクトさから、マシンピストルとも分類される。ホルスターに収めるためフォアグリップを切り落としている。

そして、銃身が短く、銃床がないピストルグリップのショットガン、モスバーグ。これのみ、海兵隊のおさがりらしい。年季が入つていて、所々傷が目立つ。

他にはグロック18Cが一丁。これはフル・オートで撃てるピストル。

四五口径のガバメント・カスタムが一丁。これは、ちりめん状になつた金属製グリップ（エルゴ・グリップ）が特徴的な、シグ・ア

ームズ社製レヴォリューションXO。そのブラック。

最後に史上最强のハンドガンと呼ばれるスミス&ウェッソンM500リホルバー一丁。その4インチ、スナブノーズ。専用のコードン社製440gr弾は、44マグナム三発分、9mmパラベラム弾六発分の破壊力がある。熊を倒しコンクリートの塊を粉々に碎く。うまく撃てるかしら。拳銃の腕にはかなり自信がある彼女だが、その拳銃は未知だ。それより、これが必要な状況になるかどうか、だ。

ステアー二丁を腰の大型ホルスターに収めた。ガンベルトを付け、右利き用のホルスターを左腰に付け、左利き用のホルスターを右の腰につけている。左右とも銃のグリップが前を向くかたちになる。こうしておけば、腕を交差させて素早く抜ける。スプリングフィールド二丁も身につけ、コートのジッパーをあげた。外観からは銃器を身に付けているとはわからなくなつた。ちょっと太めに見えるのは不本意だけど。

グロック18と四五口径、M500、そしてショットガンはカバンに入れた。その大きなカバンの中は銃弾であふれている。ずしりと肩に食い込んだ。

携帯に着信。アイコからだつた。まだ、何か用かしら。

「これ以上、進むのは無理だ。そのコンビニで夜明けを待とう」豊田が言つた。別府の市街地を離れ、少し北上したところ。道は、まだ、別府湾に面している。

コンビニの中は荒らされていて、食料となるものはほとんどなかつた。空のダンボールばかりふんだんにあつた。床にダンボールを敷き、人々は横になつた。

ホンダは、眠れず、駐車場に出て、海に向かつて座つた。ひとりで考えたかつた。

俺は人を斬つた。たぶん、それは間違いない……。この刀は、いつたい何だ。血の意味は。デモニアックは、ウイルオトスとつて

いた。まったく意味がわからない。

恐怖を感じなかつた。だけじゃない。一切の感情が麻痺していた。

今も、その感覚は残る。

月が赤い光を放つてゐる。ルナティック（狂人）とは言ひえて妙。ルナは月の意味だ。月は、人を狂氣へと導く美しさと恐ろしさを孕んでゐる。古来、人は月を見て、そこに狂氣を、畏れを感じたのか。兎が餅を、などと夢想したのは日本人だけかも知れない。西洋では魔女の横顔。

「耀にいちゃん……」ふりかえると亮太がいた。月明かりのなか、その瞳の奥に怯えが見える。そこにいるのが、本当に兄なのか、それともまったく知らない恐ろしい何かなのか、懷疑の目。

「耀にいちゃん。どうしたの……？」質問の意味はよくわかる。しかし、彼にも答えようがない。

「心配ない……」

ホンダは歳の離れたその弟を横に座らせた。

思いついて、刀をふらせてみた。

「えいつ」亮太はふつてみたが音はしない。では、何故だ。彼と亮太は正真正銘の兄弟だ。では、妖狐の言つた血の意味は何だ。それは血縁を指していない。

何もかも、わからないことだらけだ。

翌朝。日の出前から、一行は歩き始めた。妊婦もいれば老人もいる。ゆつくりとした行軍だった。<sup>ひじ</sup>日出まではおおむね平坦な道路。が、その先は峠。右手にサンリオのテーマパークが見える。お城のような建造物が木立の向こうで静まりかえつてゐる。そこはまだ峠の入り口。

一行の中に、旅館の息子がいた。息子といつても四十代だ。妻を従え、足早に歩いている。威張つて妻を怒鳴る。のろのろするな、とか、水を寄せ、さつさとしろ、とか。

その様子を見て、不愉快そうに唾を吐いたのは、例の金髪の少年。彼は知つていた。化け物が襲つてきたとき、その男が人垣の奥へ逃

げ込んだことを。

ホンダは列の最後尾にいた。メンバーの中には妊婦もいる。妊娠七ヶ月だそうだ。彼女の夫は、妻を気づかいゆっくり歩く。その後ろを、ホンダは、亮太と麻奈を連れて歩いていた。その前方には、老人が数人いる。自分達の歩みも遅いのだが、さらに遅い人間は許せないようだ。時折、妊娠している女性を迷惑そうにふりかえり、ブツブツ言っている。

集団の先頭にいるのは豊田だ。自然、彼がこのメンバーのリーダー的存在となっている。実際、卓抜した判断力があり、サバイバルでは一番頼りになると思われた。

ただ、歩く。黙々と。傾斜を。山の中の曲がりくねった道。

一台のトラックに豊田が気づいた。コンビニの配達用トラック。荷台を開けると、飲料に食料が満載してあつた。数人が人を押しのけ乗り込み、我先にと奪いあつた。豊田が空に向けて拳銃を撃つた。

「女性と子供が先だ」その口調の強さに、男達は不承不承従つた。

亮太と麻奈が品物を取ろうとすると、鋭い視線が矢のように集まる。臆してしまい、のばしかけた手が止まる。ホンダはおかまいなしに、ふたりのリュックにチョコレートやカツチラーメンをどさどさ入れてやつた。ペットボトルは自分の荷物の中に入れた。飲料は何本もあるとかなりの重量になる。子供には重荷だ。

妊婦さんにはなにがいいのか判らない。スナックやカツチラーメンはあまり摂らないほうがいいそうだ。彼女の夫が、パン類にカロリー

メイトや、栄養補助食品を、自分のリュックに詰めた。

荷台を降りたホンダに、豊田が言った。

「自分の分は取つたのか

いや、と彼は答えた。

「俺は、腹が減つてない」

「無理しても食べておいてくれ。また、デモニアックに襲われたら、お前だけが頼りだ」

目を交わした。互いが信頼できる。この、まとまりのない集団で、

女性と子供を優先させた。

「自分の順番は？」ホンダは逆に問い合わせ返した。

「俺は、一番後だ」自衛官らしい、厳しい口調でさえある。ホンダは苦笑した。

「じゃあ、俺も最後だ」

「……もう、封鎖しちゃったんだわ」ミキはネットの掲示板でその情報を見た。関門海峡が封鎖されたらしいという書き込みがあった。橋も、トンネルも。そして、信じられない書き込みもあった。

関門海峡は潮の流れが速い。それでもその流れが止まる時間帯がある。九州を脱出する被災者達は漁船や小型船舶で海峡を渡ろうとしているらしい。が、山口に上陸しようとする船は、片つ端から銃撃されている。自衛隊に。勿論、デモニアックの本州上陸を阻むために。

「マジ?」眞也あつた。波打ち際に打ち寄せられた幾つもの死体。捏造? 本物?

どうじみつ。

「鹿児島に渡る手配をしたわ。お金も払つておいた」開口一番、アイコは言った。

アーナは面食らつた。何故あなたが? そこまで親切にしてくれるので。

「沖縄まで連れてきてくれたお礼よ」

そういうこと。彼女はお礼を言った。日本人は義理堅いというけれど本当ね。実際、この先どうやって九州へ行くか、苦慮していたところだし、素直に感謝した。彼女は、そのチケットがふたり分だとは夢にも思っていない。

「それから、うちのお祖父ちゃんが言つていたの。本土へ渡るのなら、自分の知つている鍛冶屋の刀を買って行きなさいって

「刀つて、日本刀?」日本刀の魅力は知つているけれど、自分には必要ない。

「魔除けの刀らしいの」アイコはアイコで、それは必要ないと思っているようだ。けれど、行かないと祖父がうるさいらしい。

尋ねた場所は、随分山奥の刀鍛冶の家だった。刀鍛冶は若く、三十そこそこに見えた。まるで、ふたりが来るのを知っていたかのように迎えた。

「こんな山奥へ、ようこそおいでくださいました」と、片言の英語で言い、奥座敷へ通した。待つほどもなく、古びた桐箱を持つてあらわれ、座卓の上においた。

「私どもの家系では、代々なまくら刀を打つてまいりました。人は斬れぬが、魔を斬る刀です。皆様には、家の魔除けに使つていただいています」しかし、刀を見せる様子はない。

「昨夜、夢枕に、美しい女性があらわれ、『預けおいた物を、明日訪れる者に渡せ』と、こうおっしゃるわけで」

両名、ピンときた。顔を見合わせ、

「その夢は、ひょっとして、深い霧のなか?」アーナが聞いた。

刀鍛冶は驚いた顔を見せ、

「おっしゃるとおりです。やはり、あなた方で間違いないようだ……。しかし、『預けおいた物』と言われても、さっぱり見当がつきません。父が祖父が生きておれば、何か知っていたのかも知れませんが……。思い当たるもの、と言えば』卓上の桐箱を引き寄せ、蓋を開けた。

「これしかありません。鉄でも鋼でもない。いつの時代のモノなんか、誰が作ったモノなのか、何のための道具なのか、皆見当もつきませんが、我が家に代々伝わる品です」

そういうて、綺麗な布に包まれた『棒』を取り出した。

なに? 「コレ? ふたりは目が点になつた。何の役に立つの?

それは金属の『棒』だった。長さ三十センチほどの。全体に流麗な浮き彫りがほどこしてある。一方の端が牙をむいた獅子の彫刻で飾られている。反対の端は石突……みたい。

なに? 「コレ? いくらながめても、穴が開くほど見つめても、そんな感想しか出でこない。

「誰が名付けたか』日子の瓊矛(瓊矛とは玉飾りのついた矛)』と

呼ばれています

矛？ 矛って槍？ 全然、槍じゃない。

「ヒコノヌボロ……？」聞き返すアーニナに、アイコは英語に置き換えて話してあげた。

「ランス・オブ・サン……。でいいのかしら？」

バリ島のバロンに似ている、アーニナは彫刻の感想を言った。沖縄のシーサーにも似る。

「さわってみても、いいですか」

「どうぞ」

アーニナは手をのばし、それを手に取つてみた。握った感触は悪くない。手にしつくり来る。それよりも、驚いた。一瞬、血が逆巻いた。この感覚は何……？

「これを貰つても？」いいのですか、彼女は聞いた。

「ええ、どうぞ」刀鍛冶は頭をさげた。

翌朝、アーニナはホテルを出た。タクシーの運転手にアイコの書いてくれたメモを渡した。埠頭の場所が書いてある。そこへ、行って頂戴。英語で言った。運転手は了解したようだ。

埠頭に着いた。船がある。アイコの姿も見えた。見送りに来てくれたのか。日本人の義理堅さに頭が下がるおもいだつた。タクシーを降りたアーニナにアイコは言った。

「じゃあ、行きましょうか」

アーニナは目が点になつた。聞きまちがいかしら。ではなかつた。

「九州は寒いからね」ダウンジャケットを着込んでいる。手には大きな鞄。

「何を言つているの！？」

「あら。一緒に行くのよ

「危険だわ！！」

「あなただつて」

「若い女の子の行く場所じゃないわ」

「あなたはわたしより若いわ」

「わたしは違うの。第一あなた素人じゃない」

「あり、あなたは何のプロなの？」

「ぐ、言葉に詰まつた。できれば知られたくない事柄だ。

「わたしの準備が万端かどうか、行ってみなければわからないけれど、わたし抜きで行くほうが危険だわ。だいたい、あなたソロモンの七十一靈も知らないでしょ」

「知つているわ。レメゲトンくらい読んだもの」言つてからしまつたと思った。

「アイ」はほくそ笑んだ。どんどんボロがでるじゃない。やっぱり、この子の目的もわたしと同じ……と、一人ごちた。

「エト・エウトクタにあつたでしょ。これがクリソレトウス」アイコは石のついたペンダントを取り出した。

「エト・エウトクタだけじゃない。多くのグリモアにその名を残す『悪魔のもたらす狂気と幻覚を防ぐ』効果のある石」

「何處で、そんなモノを」目をみはるアーナに、

「苦労したわ。けど、いっぱいあるからひとつ貸してあげる。これで、精神崩壊からは身を護れる。それから、これがアナキティードウス。悪魔を召喚するときには使う石よ。これがシノキティス。召喚した悪魔を従わせる力がある石。そして、これがポンティカ。悪魔に返答を強いることができる」次々とペンダントを取り出して見せた。開いた口がふさがらないといった表情のアーナ。

「悪魔を召喚するつもり……なの？」そう受け取つていいの？

「あら、違うの？」アイコは意外な顔をして見せた。「この先に本物がウジヤウジヤいるのに？」と、デモニアスト。

「この人……。勘違いしているわ。

「人間に悪魔は召還できないわ」

「あら、今は状況が違うわ。だって、そこにいるんですもの」

ミランスキーは、ずっとパソコンと向き合っていた。掲示板で見たのだ。隕石衝突の瞬間の月面写真を撮影したアマチュア天文家のホームページがあると。が、どの検索エンジンを使っても、その男のホームページはヒットしない。既にサーバーから削除されたのかしら……。

日本の友人から、二通目のメールを受け取っていた。彼女は平仮名ならすべて読めるし、日本語にも精通しているつもりだったが、二通目のそのメールは難解だった。混乱していることだけはよく伝わった。大意もなんとか理解できた。つまり、九州は封鎖されたらしい。船で本州へ上陸しようとすると射殺される（信じ難いけど）。本当に韓国へ逃げるほか道はない、ということらしい。『けど、口アリってちずでみたら、ちょうどおくつて、いけっこないよ。やまぐちにははいれないし、しゃしんもみたの、ころされたひと。どうしよう』難しい口語体で、難解な文脈が続いていた。うまく翻訳できない。

ただ、その計画は無謀に思えた。迎えに行くにも何処へ漂着するかわからない。そもそも、船舶の免許もない者が、日本海を越えるなど無茶だ。対馬まで行くのも難しいだらう。流されればだだつ広い東シナ海に出来る。

運良く、この国に来たつて……。

そう。それがどんどん広がっているなら、もし、ここまで被災した時、この国には逃げ道がない。北へ逃れることなどできない。地雷原と十万ボルトの鉄条網が逃げ道をふさいでいる。たとえ北が、わたし達を受け入れると言つても、短時間でそれらを撤去するのは不可能だ。

## 7 十号線

重い飲料を持ち歩く必要はないことに気づいた。この国は、異常に自動販売機が多い。自動販売機を見つければ、川野という少年が片つ端から開けてくれた。勿論、開けられない自販機もあるが、飲料で困ることはない。

「凄いな。公衆電話もできる?」ホンダが話しかけると、金髪の少年は得意気に応えた。

「ああ? 黄色だつたら大丈夫だ。まあ、開けてもたいした儲けにならないし、滅多にお目にかかるないけどね」

「もし、この先、黄色い公衆電話があつたら頼む

「まかせろ」川野は嬉しそうに笑つた。

「アレは、コツがあるんだ。電話機の下の隙間にバールを突つ込んでさぐると手ごたえがあるから……」少し話すと同じ歳だとわかつた。

「煙草、吸うか?」

「ああ……」何の抵抗もなく、吸つてみようと思つた。投げて寄こした箱の中から一本抜き取り、火をつけた。

「なんだ、そりや。金魚じやねえか」煙を口に含んだだけの彼を見て、少年が笑つた。

「こうやるんじゃないのか?」

「ちゃんと吸い込むんだよ」言われて不用意に吸い込んだ。途端にむせた。ふたたび、少年が笑つた。苦しかつたが、自分でも笑いがでた。

翌朝、目覚めると、数人の老人が消えていた。豊田とホンダ、そして川野と数人が周囲を捜した。無駄だと思ったが……。戻ると、旅館の息子が苛立つっていた。

「捜したつて無駄なんだ。もし、見つかっても呆けた奴を連れて行

くつもりか。ただでさえ、遅い奴がいるというのに。グズグズしている時間がないことくらいわかるだろ?」

川野が唾を吐いた。

豊田は表情を変えず言った。

「あなたの家族が消えても同じセリフを言えるか」

相手は豊田をにらみつけた。その顔を見れば、言えそうだ。

「お前は俺たちから離れるな」ホンダにむかって言った。

「もし、化け物が襲つてきたら誰が俺たちを護るんだ」

思わず目をむいた。何のつもりだ。いや、何様のつもりでいる。

くわ野郎はクソッタレなセリフしか吐かない。亮太や麻奈の方がよっぽど大人だ。辛いだろうに、我慢して歩いている。

「今後は……できるだけそうしてくれ」豊田の言葉に驚き、思わず反発の眼をむけた。

「奴の言葉に従うわけじゃない。護るべきものの大多数はここにいる。子供や、女性。妊娠している女性も。襲撃を受ければ立ちむかえない」わかるだろ。田で言った。

「さあ、出発だ」豊田は全員を促した。

川野がすれ違いざま、旅館経営者をにらみつけた。相手は、不良が、と吐き捨てた。

その夜、一行は宇佐に到着した。山岳地帯を抜けた。これから先は市街地が続く。だが、真つ暗だ。月だけが煌々と夜空にあつた。禍々しく。

その夜、またふたりいなくなつた。

「初期キリスト教会の歴史は排他的歴史ね。それまで人々が崇拜していた神々をすべて邪神とし偶像崇拜を禁じた。その流れのなかで、多くの神々が悪魔のレッテルを貼られていったわ。有名なバールがそう。それは古代セム人の豊穣の神だった。アシュタルテもそう。セム人の豊穣の女神。バビロニアではイシュタル。ギリシャ名はアフロディーテ。あの、アフロディーテよ。アフロディーテが、まりまわって悪魔になっちゃってるわけ。極端な例をあげたけど。だから、ソロモンの七十二靈というけれど、実際には何靈いるのか、はつきりしたことは言えない。もっと少ないとと思つ。あきらかに捏造された靈もある。マモンはシリア語で『富』や『金』を意味し、聖書の中で非難されている。そこから、マモンという名の金銭欲の悪魔が創造されたの。有名な蠅の王ベルゼブブの語源はバールゼブブ。前述のバールにその名の由来がある。これから見ると虚構っぽいけど、蠅の王の存在は古代から伝わり、生贊がささげられていた。名称の正否はともかく、いるかも知れない。どう? 愉快じゃない。真贋のほどをこの目で確かめられるの。もうすぐよ」九州へ向かう船の中だ。

「召喚に成功したことは? あるの」アーナの問いかに、アイコは何を馬鹿なことを、という顔で応えた。

「あるわけないじゃん。居もしないモノを呼ぼうとしていたの。けど、今は違う。確實にいるの。この先に」彼女のつかんだ情報では、少なくとも十以上のデモニアックの群れがある。群れとはつまり、ひとつずの靈が率いる軍団である。例えばアガレスというソロモン七十一靈の悪魔は、三十一の悪靈を従えると思われている。ソロモン七十一靈とは、中世のグリモア『ソロモンの小さな鍵』通称『レメゲトン』に列記されている悪魔達である。これらは第一の『エノク書』にある悪魔のリストから多大な影響を受けている。第一の『エ

ノク書』とは、眞の『エノク書』が知られていない頃創出された悪魔のリストとその技の書である。そしてのその墮天の物語である。眞の『エノク書』は、断片としてしか残っていない。紀元前の默示文学。人類に文明をもたらすため、地に降りた天使たちの物語。そこにサムヤサの名がある。

その『エノク書』が、『エト・エウトクタ』の物語の続きであるならば、彼らは人間である。何故、『エノク書』では墮天使として描かれているのか。そこはわからない。

「少し整理して考えましょう。エト・エウトクタを信じるなら」アイコの言葉を、アニナがさえぎつた。

「あの陳腐なRPGのシナリオみたいな物語を信じるの」

「あら。現にあなたの夢に出てくるのは、その登場人物でしょう」ラ・ブティエリ・ア・ナネ。

「わたしの夢は…… ただけど……」

「この先にいるのは、オル・ヴァブ。災禍の現状を見れば、完全に一致する。でしょ。アスルーもいるかも知れない。エト・エウトクタの悪魔のリストには、ソロモン七十一霊と似た名前を持つものも多い。オノボスはオロバス(Orobas)。セレはセーレ(Sere)。サバックはサブナク(Sabnak)。わたしはこう考えているの。これらの悪魔は本当にいる。そしてエリゴル。ソロモン七十一霊にエリゴル(Eligor)という悪魔がいる。民間の伝承の中にアビゴール(Abigor)と言う悪魔がいる。共通点が多い。静謐な騎士の姿で現れる。これがエト・エウトクタのエリゴールと同一かも知れない。『エノク書』でサムヤサとともに地上に下つた墮天使のリストにアキビール(Akibeele)そしてアジビール(Azibeele)と言う名前がある。このどちらかがエリゴールの訛つた名前で、後にアビゴールそしてエリゴルへと、召喚が試みられるなかで徐々に正しい名に近づいていったのだとしたら。面白いじゃない」まあ、行つて見ればわかるわ。それに、彼を召還できれば、他の悪魔から護つてもらえるかも。

「エレボスは……？ エレボスは何なの？ 捜せばどうなるといふの？」

「あ……」それは、アイコもわからない。オル・ヴァブを倒せるとか？ うーん……。エト・エウトクタでは、エレボスはアスルーを倒したとある。悪魔は封印する他なかつたとも。だったら、エレボスには倒せない。ア・ナネを捜すべき。理屈ではそうなるわ。それを捜し出してどうしろといふのかしら。そもそも、この子、なんだつてそんな夢見るの？

## ショッピングモール

### 7 ショッピングモール

一行は椎田道路に向かい国道十号を北上している。相変わらず、道路状況は悪い。放置された車が道をふさいでいる。下り車線も上り車線も立錐の余地がないほど車が詰まっている。北を向いて停まっている。ドライバーの姿は何処にもない。いや、あてもなく佇んでいる人々がかかつてはそうだったのかも知れない。

メンバーは既に八人に減った。豊田。旅館経営者の大田。川野。妊婦さんの幾田圭子。その夫の幾田哲郎。ホンダ兄弟。仲井麻奈。大田の妻が消えたとき、彼は自身の言葉どおり捜そうともしなかつた。役立たずが、と呟いた。誰も非難しなかつた。こんな男と連れ添った女性に同情しただけ。

対照的なのが幾田夫婦だった。まだ若い。ふたりとも髪を染めている。夫の哲郎は板金工だと言った。つねに妻に寄り添い、お腹の子供を気遣っている。これだけ歩くことが胎児に良いわけがない。悪くすれば早産。この現状では助からない。七ヶ月の未熟児は。

くたびれて、ただ歩く一行。スーパーのカートが荷物を運ぶため役に立つた。コロコロとカートを押し、ただ歩く。一歩ずつ近づいている。海峡へ。それだけが希望だった。

中津競馬場を過ぎると、左側に大きなショッピングモールとホームセンターが見えた。一行は道をそれで立ち寄った。目的は物資の補給と、家具コーナーのベッド。誰もがゆっくり眠りたい。ダンボールのうえで薄い毛布をかぶり、身を縮めて寝るのはなく、ふかふかのベッドのうえで暖かい布団をかぶり、身体をのばして眠りたい。誰もがそうだ。特に妊婦さんは休ませる必要がある。

店内は真っ暗だった。無人ではない。暗闇のなかを動き回る人影がある。不気味だが、もう慣れた。懐中電灯の光を頼りに食料を探した。店内は荒らされていたが、バッклームにはインスタント食

品の箱が山積みになつて残つていた。

「当分、困ることはないな」川野が言つた。大型のカートに投げこみながら。

「別れて探そう。電池は必ず欲しい。それから木炭とコンロがあれば調理が出来る」暖かい食事にありつける。売り場の肉は腐つていたが、野菜は大丈夫だった。

「野菜鍋は寂しいな。カレーがいい」川野が言つた。

「亮太、麻奈。俺たちは木炭とコンロを探そう」ホンダはふたりの子供に言つた。

豊田が幾田夫婦に言つた。

「家具コーナーへ行つて、奥さんを休ませてやつてくれ。食事の支度ができれば呼びに行く。大田さんは俺と一緒に来てくれ。川野君は電池を探してくれ」この時の人選が、生死を分けた。

動いていないエスカレーターの段差を懐中電灯でてらした。足元ばかり見て昇つていくとめまいがした。家具売り場の場所は知つてゐる。幾田夫婦は、何度もここへ買い物に来たことがある。こんなベッドが欲しいね。いつかふたりで話した、そのベッドへ妻を横たえた。枕元に懐中電灯をおいた。暗闇のなかはふたりきりではない。うごめく人影がある。気味が悪いけど仕方ない。

「俺達は運が良い」夫の哲郎が言つた。

「ふたり揃つて、まだ、大丈夫だ」妻の圭子が笑みをかえし、お腹をさした。

「そうだつた。三人だ」彼も笑つた。少し間をあけて彼は続けた。

「こんなこと、普通じゃ恥ずかしくて言えないけど……、俺は今は信じている。俺たちは、この子に会つために生まれてきた。必ず、元気に生まれる。きっと、強い子になる。必ず、三人そろつて生き延びよう」

彼女は笑みを浮かべ、夫を見つめた。背後の巨大な影に息をのんだ。

無数の鋭い牙のある巨大な口が、夫の上半身を食いちぎった。残りは枕元に腰かけたままだつた。悲鳴も出なかつた。たとえ、声を出せたとしても、そのいとますらなかつた。

川野は電池を探していて、かすかにその音を聞いた。それは埠頭で聞いた音と同じ。耳について忘れられない音。人間の骨が噛み砕かれる音。

懐中電灯を消した。暗闇に身を潜め、目が慣れるのを待つた。周囲の様子が闇に見えてきた。うごめいている、無数の人影。だが、こいつらじゃない。どこにいる。

家電売り場から、家具売り場へ、音のほうへ向かつた。物陰から様子をうかがつた。

闇のなかに、巨大な輪郭が見えた。サイのようだ。背中に人が乗つている。勿論、わかっている。人じゃない。サイのようだが、頭部は、いや、口は蛙のように巨大だつた。細かく鋭い無数の牙が、血塗れて懐中電灯の光にてらてらとぬめり輝いている。その口が動くたびに、ぱりぱりと、血の凍るような音をたてた。

どうする。俺の運は何処まである。ここまでか？ アレから、逃げられるのか。あの懐中電灯はある夫婦のだ。やられたのか。人間が食いたきやいくらでもいるじゃないか。クソ野郎。

彼はじりじりと後退を始めた。足元さえおぼつかない暗闇のなかだ。人にぶつかる。群れが現れたらそれまでだ。焦つた。エスカレーターの方角はわかつていて、が、彼が探したのは、従業員通用口。バックヤード。

微かな光の漏れる四角い枠を闇のなかに見つけた。そこだ。一気に希望がわいた。もつれる足で駆けた。暗闇でぶつかつた。何にぶつかつたのかわからない。けど、倒れていられない。巨大な獣の足音が響いた。気づかれた。こつちに来る。

通用口は引いて開くドアだつた。ラッキー。奴には手がない。彼は薄暗がりのバックルームにとびこんだ。そこには窓がある。太陽

の光がさしこんでいる。暗いけれど。入荷した商品が未整理のまま山積みされている。足音はもの凄い勢いでこっちへ来る。

窓から飛び降りるか、何処かへ隠れるか。待て。エレベーターの横に小さな扉を見つけた。アレはたぶんショーター。扉を開け、中を覗き込んだ。資源ごみのショーターだ。下のほうの薄暗がりのなかにダンボールが見えた。飛び降りた。イテエ。ダンボールはたたまづに捨ててくれ。その瞬間、獣が通用口のドアをぶち壊した。顔を突っ込み、様子をさぐる。川野は息を殺した。一秒が長い。立ち去る足音が響いた。助かつた……。

が、出口もなかつた……。

## ショッピングモール2

豊田と大田は、頭上で響くその足音を耳にした。何だ？ この音は？ 訝しげに眉をひそめる豊田。拳銃を抜いたその時。

エスカレーターを破壊して巨大な獣が駆けおりてきた。サイのような巨体に平たく大きな口。無数の牙。その牙が、腰を抜かした大田をとらえた。断末魔の叫び声。骨の砕ける音。

豊田は左手の懐中電灯で目標を捉え、立て続けに引き金を引いた。何発も頭にぶち込んだ。が、効かない。違う。上に乗つている奴だ。少年。背に黒い翼がある。残忍な眼。

狙いを変えた。

が、そいつは銃弾を剣で弾いた。愉快そうに笑った。

ホンダは亮太と麻奈を連れ、隣接するホームセンターの方へ来ていた。木炭やコンロがあると思ったからだ。

チキンラーメンを袋のうえから叩いて中を粉々にし、子供ふたりに投げて渡した。

「特大のベビースターラーメンだ」

「普通のベビースターの方がうまいや」店の出口だ。目的の品は容易に見つかった。木炭にバーベキューグリル、大きな鍋をカートに満載していた。

「亮太君とお兄ちゃん、仲が良いのね」麻奈が言った。

「そんなことは……」と言いかけたやめた。そんなことはなかつた。確かに、こんな状況になつてからは大事なつた一人の弟だ。けれど、それ以前は、弟なんて邪魔なだけだつた。いつだつたか、小学生の頃、友達と野球をしに出かけようとしたとき、連れて行つてくれと言つてきかなかつたことがある。亮太はまだ幼稚園児だつた。邪魔だと思った彼は、亮太を公園に連れて行き、ここで試合があるから待つてろと言つて、グラウンドに向かつた。夕暮れ、家に帰る

途中で公園をのぞいて見たら、まだそこにいた。亮太は彼を見つけるや泣きべそ顔で言つた。おにいちゃん、だれも来ないよ。とつくに、家に帰つていると思つていた。まだ、待つては思つてもいなかつた。

アレは、ホントにひどいことをしたと今も心が痛んでいる。良い兄とは思えない。

「麻奈の妹ね、香奈つて言つんだけど、朝起きたらいなくなつたの。パパが捜したけど全然見つからなかつた。ベッドのうえにゲームボーイだけあつたの。麻奈ね、香奈のお気に入りのポケモンを麻奈のポケモンと交換したの。スイッチを入れたらあの子絶対気づくと思うの。そしたら、わたしが生きているつて、わかるでしょう……」

「僕のポケモンもあげる。バンギラスあげる。一番強いんだ」亮太が言つた。

三人はパークリングにいた。ホームセンターを背に、ショッピングモールに向かつて。そのショッピングモールの正面入り口を壁ごと破壊して怪獣が躍りでた。

サイのようになに巨大な蜥蜴。体横にがにまた氣味に突き出た太い足は、それが恐竜の類ではなく、蜥蜴であることを示していた。低くかまえた頭は山椒魚のよう。もつとも、ぬめぬめした皮膚ではなく、銀色のうろこで覆われている。パックリと割れた大きな口から滴る血。その口にくわえた人間。

「……にげる」息も絶え絶えのその人間が言つた。手にはしつかり拳銃を握り締めている。豊田。

ホンダは子供たちを背後にかばい、カートに乗せていた刀を取つた。抜いた。

途端に感じる。まだ。血が逆巻く。鬪氣の奔流が恐怖を凌駕する。化け物をまえに恐れがない。まったく人間的ではない。

「エレボス在りと聞きしが、真のようだ」甲高い声に耳にしてはじめて気づいた。蜥蜴の背に乗る少年の姿に。こいつが、デモニア

ック、本体。

「だが、まだ、小童だ」そう言つテモニアックに、力ない腕をあげ、引き金をひいた豊田。だが、銃弾はましても剣に弾かれた。少年が高々と強つ。大蜥蜴が口を閉じた。噛み千切られた豊田の身体が地に落ちた。血が滝のように零れ落ちるなかをどうと沈んだ人の上半身。臓腑がアスファルトに流れでる。

「見るな」背後の子供ふたりに言つた。だが、遅かった。息をのみ、瞠目している。悲鳴すらあがらない。

蜥蜴は豊田の脚を吐き出して、猛然と牙をむき襲いかかつた。糸を引く血の混じつた唾液まではつきり見える。が、一撃で粉碎した。とどろく轟音。飛び散る肉片。瀑布のごとき血の雨を全身に浴びた。蜥蜴は頭を吹つ飛ばされて、横倒しに転がつた。次の瞬間には、頭のない馬に姿を変えていた。多少驚いた。馬を化け物に変えていたのか？

「デモニアックは宙約一メートルのところを浮いていた。愉快そうに笑つた。

「汝に余等を滅すること叶わず。たとえ、ア・ナネ在りとも「また、わけのわからぬことを言つてやがる。

「貴様は？」聞くまでもない気がした。知つている。彼の記憶ではない。刀の記憶……？

「ウラク」

「そう。その名だ。なぜかわからぬが知つている。こいつは恐るに足らない。もつと恐ろしい名も知つてゐる気がする。思い出せないが。これは刀の記憶か……？ それとも血の奥底に眠る記憶……。

「俺は……だれだ」再びわいた当然の疑念。悪魔に問うて答えるとは思わないが。

「エレボス」嘲るように、愉快そうに笑つた。

「己が何者か知る人間などいるものか。ここにある現実は明瞭。貴様に我らは斬れぬが、貴様は肉体を滅ぼされればそれまで」

「そうだ。こいつらは人間に憑依しているだけだ。いくら斬つても

実体は斬れない。

「どうした。 我を斬つてみよ」 祸々しい笑みを浮かべた。 クソ野郎が。 余裕だ。 どういう意図だ。 斬つてみるとは。 累な感じだ。 その手に乗つてはいけない気がした。 斬つてもこいつは違う人間に憑依するだけ……。 悪魔の邪な意図に気づいた。 ここに人影はない。 亮太と麻奈以外。

なるほど。 クソ恐ろしいことを考えやがる。 デウする……。 いちかばちか。

「走れ。 亮太っ、 麻奈っ。 建物の中だ」 なかへ逃げ込め。 叫んだ。 弾かれたように子供ふたりが駆け出した。

「あがらうか。 小賢しい」

途端に悪魔がその姿を消し、 大地に崩れ落ちたのは憑依された人間。

クソ野郎っ。 ホンダは駆けた。 またも不思議な感覚。 目に映るもののすべてがスローモーションの如く感じる。 遅い……。 子供ふたりは既にショッピングモールの入り口に入っている。 間に合え。

入り口に飛びこみ、 子供ふたりの前に躍り出た。 亮太と麻奈は……。 変化ない。 大丈夫だ。

闇の奥から、 悪魔がその姿をあらわした。 間に合つた。 思つたとおりだ。

「やつぱりそうか。 貴様らは、 健常者には憑依できない。 ルナティックにしか憑依できない。 ルナティックが貴様らの入れ物だ。 この災禍をひき起こし、 入れ物を用意し暴れまわつてはいるが、 その力の及ぶ範囲は災禍の圈内だけだ。 違うか」

愉快 そうに悪魔は晒つた。

「違うな」 そう。 それは埠頭で日にしていた。 健常者の自衛官が憑依された。 そして、 この災禍の圈外に出たデモニアックもいる。 ニキから聞いていた。

だが、 ノーマルとルナティック、 入れ物がふたつあれば、 憑依しやすいのはルナティックのほうだ。 それは間違いない。 亮太たちを

ここへ駆け込ませたのは正解だった。奴はルナティックに憑依した。もひ、亮太と麻奈は心配ない。奴がどれほど憑依を繰り返そうが、斬るだけだ。斬つてこの場から退ける。

睨みすえた。敵は少年の姿。禍々しい眸子。歪んだ笑みを浮かべた口もと。漂う邪氣。

五感が高まる。全方位だ。刃の先まで血が通つているかのごとく感じる。一気に踏み込み横に薙ぎ払つた。が、彼が踏み込んだときには、悪魔は跳躍し、彼の背後を取つた。空を斬つた刃が轟音放ち、ウイングーが粉々に吹き飛んだ。二刃叩き込むべくふりかえつた。目に飛び込んだのは敵の剣先。咄嗟に刀で弾く。再びどろく爆音。衝撃波に悪魔の体は外まで転がつた。

敵は背中の羽ではばたき立ちあがり、高らかに囁つた。

「後ろを見る。エレボス。我が群れを」

ふりかえつた。子供ふたりが立ちすくんでいる。その店舗奥の暗がりに、無数の何か。唸つてている。人間大の恐竜に似た化け物。二足歩行で長い尾。頭でつかちで大きく裂けた口。手はない。吼えた。畜生つ。麻奈に飛びかかつてきたそれを叩き斬つた。子供ふたりを左手で引き寄せた。隻腕続け様に活塞のごとくふり抜く。轟きわたる轟音。土砂降りのようになり注ぐ、血と肉片。店舗のタイルが、壁紙が裂け、コンクリに亀裂が走る。が、いくら斬つても、奥から次々現れる。キリがない。地響きをともなう足音にふりかえると、斬り倒したはずの大蜥蜴が再び現れていた。新たに召喚したのか。悪魔がヒラリとその背に乗つた。

「また、遊べ。エレボス」高らかな哄笑を残すと、まるで見えない階段でもあるかのように、空を駆け昇つて行つた。同時に、忽然と恐竜の姿は消えた。替わりに、血まみれのルナティックの姿。ホンダは悪夢を見ているような気持ちで、空駆けるデモニアックを見送つた。

## ショッピングモール3

遠く聞こえた呼び声に、川野はあらん限りの声をふりしほって叫んだ。コンクリの壁を叩いた。が、その声は届かなかつたようだ。何の物音も聞こえなくなつた。静寂。真つ暗闇のなか、ひとり取り残された。

絶望的だ。ここは資源ごみ用のショーター。出口である小部屋はダンボールが詰まつてゐる。縦坑はんばまで塞いでいる。そして、登れない壁。

クソ。こんなところで飢え死にするのか。ポケットになにか食い物は？ チョコレートがあるだけだ。多少は高カロリーだ。いや、そんなことを喜んでもしようがない。冷静に考える。

わけわかんなくなつて化け物に食われるよりはマシか……。いや、冷静になつてない。状況は？ 整理してみる。わかりきつたことでいい。

普通、シユーターのしたには小部屋があるはずだ。そして、資源ゴミの搬出口がある。店舗外に面した扉があるはずだ。今、その小部屋は天井までダンボールが詰まり、シユーター半ばまで埋もれた状態なんだ。冷静に考へても結論は同じ。やっぱり、それじゃ、外に出れねえのかよ。

クソ野郎。何もかもクソ喰らえだ。腹立ちまぎれにダンボールの床を蹴つた。

しばらく蹴り続け、無駄に体力を消費するだけだと気がつきやめた。しゃがみこんだ。クソ。小さく呟いた。クソだ。繰り返した。しかし。

無駄かも知れない。無駄だとわかつていても、生き延びるための努力を最後まで続ける。足搔く。

足元のダンボールをめぐり始めた。片つ端からめくつていく。背後に積み上げていった。思つたより早く、小部屋の天井に到達した。

ここだ。ここが天井だ。希望がわいた。助かる、かも知れない。  
えつ、と思った。差し込んだ手が空洞をつかんだから。何もない。  
もしかしたら。

まさぐる手に触れたダンボールを思い切り押した。ズン。身体が沈んだ。ダンボールが雪崩うつて流れ落ちた。どわつ、思わず叫んだ次の瞬間には、真っ暗な空間に放り出されていた。

ダンボールは小部屋いっぱいに詰まっていたのではなく、シユーター真下の空間だけを埋め尽くして塞いでいたのだ。

どうだつ。誰にともなく自慢した。俺にはまだ運がある。闇のなか、手さぐりで扉を探しあてた。絶望し、あきらめかけていた戸外。凍てつく星空が満天に広がっていた。

「どうだ。先公も、親父もお袋も、人のこと頭空っぽみたいに言いやがつて。俺にだつてこのくらいできらあ。俺はまだ生きてるぞ、この野郎」言つてから、ふいに景色が滲んだ。彼らが多分もういないだらうことを思い出したからだ。

吐息が白い。耳を澄ましても、人の声は聞こえない。歩いて正面にまわった。

月明かりで見えた。白い壁に飛び散った黒い飛沫模様。黒く見えるけれど、血だ。足元がずるずるぬかるんでいる。肉の塊を踏んだ。

「あいつ。また、やつたんだ」……見たかった、かな。

黒々とした塊に気づいた。人間にしては短い。近づいて見た。人間だつた。

「豊田……？」死んだのか。みんな、死んだのか。幾田夫婦は殺られた。この目で見た。あいつと子供は多分無事だ。死ぬはずがない。かすかに俺を捜す声も聞いた。後は大田だけだけど、奴を捜すつもりはない。

豊田の手から拳銃を取つた。脚をそばで見つけた。その腰のベルトから弾倉を取つた。平気じゃない。歯をくいしばりながら手をのばしそれらを取つた。コレは必要だ。生き延びるために。使い方は、やつて見ればわかるだろう。エア・ガンとそんなに違うとは思わない。

い。

ひとりになつた。

だつたら、バイクだ。バイクで関門海峡まで一直線だ。明け方は着くだろう。途中であいつらに会つたら、それはそれで良いし。

「近づいたわね」漁船の甲板だ。

「感想はどう？」

アニナは日本のガイドブックらしきものを見ながら不服そうに言った。

「サクラジマは何処？ 見えないわ」

「ここは鹿児島湾を包み込む薩摩半島と大隈半島の南端。その薩摩半島側。桜島はもつと奥よ。この先に山川港という小さな港がある。そこで降ろしてくれるらしいわ」

「そんな港、載つてないわ」と言つアニナのガイドブックを覗き込み、

「でしょうね」とアイゴ。表紙の写真は、床の間に仏像（大仏のような）が鎮座していて『神風』と書かれた書の掛け軸がかかっていた。忍者が座布団に座つている。照明器具は天井からぶら下がつた提灯。何処の国の写真かしら。それは絶対日本じゃない。とつても興味深いけど、後でじっくり見せてもらおう。

船が大きく旋回する。埠頭が見えた。黒山の人だかり。遠くからでも、わかる。

厳密に言えば、このふたつの半島の南端はまだ被災していない。そのわずかなスペースに逃れてきた避難民、十万人以上。と、噂されている。数えようがない。

海上保安庁や、自衛艦の監視をすり抜けて、救出に向かっているのはこの船だけではない。定期航路のフェリーも勝手にやつてている。そちらは通常料金。だが、数が少ないうえ、監視する側も見て見ぬふりができる。自然、値段は高いが、漁船が多くなる。漁船乗船のルールは簡単。子供最優先。料金は志し。大抵の親は、我が子を

逃すために有り金のすべてを払う。

船が近づくと、人々から歓声と落胆の声があがる。喜びの声をあげたのは、桟橋の行列にいた人々。嘆きの声はその後ろのほうの人々。やつてきた船が小さな漁船だつたから。自分たちまで順番はまわつてこない……。

「カメラを持つてる人がいないわ……」不思議そうに言うアーニャを、アイコは無視した。もし、生きて九州を出れたら、彼女の持つガイドブックの著者を呪い殺そう。

船が接岸すると、はしけが渡されるより先に入々が押し寄せた。船長の怒鳴り声が響いた。

「降りる客が先だつ」

氣あされて人垣が割れる。大きな荷物を抱えたふたりの若い女性を驚嘆の顔で見る。

「じゃあ、船長。ありがと」

「チャオ」ふたりはそれに礼を言い、船をおりた。

「帰りはどうするんだ?」そのふたりの背中に向かつて、船長は言った。

「考へてないわ」ふりかえつてアイコは言った。

「十日後にまた来るが。それが最後だ」船長の言葉に笑みをかえし、ふたりは人垣の中を進んだ。もう、ふりかえることはなかつた。背後から、人々の声が聞こえる。この子をお願いします。うちの子を乗せて。そして、親が子に言い聞かせる今生の別れの言葉。

とても聞いていられない。アイコは足早にそこを離れた。言葉はわからなくてもアーニャにも霧岡氣で通じた。とても、辛い、現実。彼らは難民と同じ。古今東西の難民につきまとう悲劇。彼らを保護する政府は既に存在しない。

沈痛な霧岡氣漂う埠頭を後にして、ふたりは幹線道路に出た。大渋滞。というよりも、どの車も乗り捨てられている。ドライバーの姿はない。

「どうするの?」

「よく見て。詰まっているのは、下り車線だけ。上り車線はガラガラよ。つまり、人々の避難経路である南へ向かう道は通行不可だけど、逆はフリーウエイ。多分、熊本近辺まで」樂に行けるわ。

「車を手に入れましょ。腐るほどあるわ。有料道路から、九州自動車道へ」

## 脱出不可

### 8 脱出不可

川野は、はじめ駐車場で見つけたスクーターで出発したが、ほどなく路肩に後輪の太いスズキのグラスホッパーを見つけた。キーもついたまま。ガソリンは満タン。神様、ありがとと言い、乗り換えた。途中、どうにも進めない事故現場などは迂回して裏道を通り、北上した。実際、横転したトレーラーが道をふさいでいることが多かつた。多分、運転中に被災したのだろう。

俺は、何故まだ無事なんだ？　被災した人間と、そうでない人間に何か違いはあるのか。いや。ありはしないだろう。多分、時間の問題だけだ。遅かれ早かれ、正気を失う。俺に出来ることは、全速力で、この地域を抜けることだけ。関門海峡くらい、泳いででも渡つてやる。

ヘッドライトの中に、一軒の古い商店がうかび、彼は急ブレーキをかけた。商店の前には黄色い公衆電話。約束を思い出した。

彼はリュックからバールを一本取り出した。電話機の下の隙間にバールの先を突っ込み、さぐる。ここだ。ガコン、という音をたてて、電話機が台ごとすべりでた。コインケースは後ろにある。このタイプは、南蛮錠ばかりだ。二本のバールでねじ切つた。ジャラ、と音をたててコインのたっぷり詰まつたケースが開いた。中は百円玉でいっぱい。多分、携帯の通じない状況で、皆こぞつてアナログ電話で連絡を取り合つたのだろう。その人達は、既に関門海峡を渡つたか、どこかをあてどなくうろついているか、どちらかだ。

俺も、どこか電話してみるか。誰かいたつけ？　親戚。そうだ。北海道に叔母さんがいた。通じるか……。おお！　やつた。コールしてゐるじゃん。

「もしもし」

「おお。俺たい。叔母ちゃん。わかるか」

電話の相手は吃驚した。

「あんた!! 郁ちゃん!? 無事だったの……」涙声にかわつた。

父母の消息を聞かれたが、川野はうまく答えられなかつた。

「とにかく。今は、俺ひとりだ。仲間がいたけど……。はぐれた。もう、切らなきや。この電話は仲間も使うんだ。百円玉残しどとかないど……」

「そつちは? そつちはどんな様子なの? 本当に化け物がいるの?」

「ああ。一回襲われたよ。けど、逃げ切つた。スゲエ奴がいるんだ。狐から貰つた刀で化け物を木端微塵に叩き斬るんだ。スゲエ奴だつた。奴のおかげで助かつた。本当にスゲエ奴だぞ」得意気に話して聞かせた。大粒の雪が頬にあたつた。闇のなかに無数の白い粒が舞つていた。

「異常な寒波が大陸から日本海側へ進んでいます。上空の気温はマイナス五十度。前例のない寒気団です。今夜半には、北海道から東北、北陸、山陰、九州北部までの日本海沿岸部は大雪に見舞われるでしょう。積雪は、多いところで……」

今さら、なに言つてんの。ミキはテレビ画面を睨んだ。

異常気象がニュースになるの。だつたら九州は? どうなつているの? どうして教えてくれないの?

唇をかんだ。見捨てたの……。

隕石衝突で、何かがずれたのか。地球規模で、海流の流れに変化が見られ、異常気象が起こつていた。

亮太は、先刻から眩暈におそわれていた。それは断続的に彼におりずれた。寒さのせいだ。身を切るような風が吹いている。背筋を悪寒がはしる。前を歩く兄の背中が遠い……。それでも重い足を運ぶ。全身に、何度も悪寒がはしる。いや、コレは悪寒ではない。言いうのないモノ……。何かが、彼に訪れていた。気づけば風はや

んでいた。

闇のなかに舞い始めた雪のよつに、静かに、それは、彼に降りてきた。彼は気づいた。足元が崩れた。心の中で、何かが割れた。必死ですぐるものさがした。が、彼がすぐのことのできる『確かなもの』は何ひとつ無かつた。

そうだ。僕は、『何も知らない』。

『確かにこと』なんて何ひとつ無い。

『言葉』は何ひとつ真実じゃない。

なのに、『心は、言葉でいつぱい』だった。途切れることなく……。

僕は、世界に、触れるることはできない。僕の知っている世界は嘘だった。本当の世界は、今、目の前にある。『荒々しい野生の宇宙』。

自分と結びついていたすべてのものが、ちづりぱりぱりになつた。頭のなかに声が響いた。

「お前は今、落雷のあつた家の中にはいるよつだ。お前の周囲は落雷のあつた家のように崩れる。そしてその雷光がお前を貫通する自身が風に溶け込んだかのように感じた。空が近かつた。何処からか、綺麗なメロディが聞こえてくる気がした。足もとの薄いガラス板が割れたように感じた。不思議だった。こんな薄いガラスのうえを、どうして平氣で歩いてこれたのか。誰も、どうしてコレを不思議に思わないの……。僕は空氣……。風と同じ……。

だんだん、心が静かになる……。言葉が消えていく。彼の変化に気づいた兄が、彼の肩をゆすり彼の名を呼ぶ。おにいちゃん……。おにいちゃんてなに……？　この人は、だれ……？　僕は……？　本当はいつたまに……。

そして彼の心は沈黙した。

黄色い公衆電話に気づいた。前方へ飛び出し、百円玉のつまつた後ろのコインケースも開いていた。誰が開けてくれたのか、すぐに

わかつた。マジックでメモがあつた。『バイクで、関門へ向かつている。けど、なしか。この雪スゴ過ぎ』。彼が生きていたことを少し喜んだ。陰鬱な顔の口元に笑みが漏れた。

受話器を上げた。神はそこまで無慈悲ではないようだ。通じた。

「耀くん!? 耀くんなの!? 無事だつたの!?」

「ああ……」簡単な、受け答えしかできない。今の彼は、『冗舌』ではない。

「良かつたあ……」ミキは涙で声を詰まらせた。安堵する彼女に静かに伝えた。

「亮太が……」直接的な表現はできなかつた。「被災した」と言つた。電話の向こうで、息を呑む声が聞こえた。彼は唇をかんだ。しゃくりあげる声が聞こえてきた。次々と、百円玉が、ただ落ちるだけ。

長い沈黙の後、口に出たのは、自分ですら予想していなかつた絶望的な望みだつた。

「ここから、連れ出せば、もとに戻るよな……」

「うん……。うん。きっと」彼女は答えたが、そんな話は聞いたことがない。

「必ず、連れて、九州を出る」

「うん……。うん……」そうとしか言えない。涙で声にならない。泣いている従姉妹にホンダは静かに告げた。

「俺は、悪魔の間では有名人らしい。狐に刀を貰つたンだ。そいつで奴らを斬つた」

「耀くん……？」疑わざにはいられない。

「何を言つているの……」

「大丈夫だ。俺は正気だ。俺はエレボスというらしい。奴らが俺をそう呼んだ」

「どういうこと?」それは何……?

「奴らは俺を知つていた。多分、狙われている。俺は奴らの仇敵らしい」

「狙われ……」ミキは、絶句した。彼女に話の意味はよくわからない。どう判断してよいかも。けれど、それがどんなに恐ろしい事態かは、容易に想像できた。

「けど、大丈夫だ。片つ端から叩き斬つて、必ずここを抜け出してやる」力強い口調ではない。押し殺した涙まじりの憤怒の声。

受話器の向こうの従兄弟の声が遠く聞こえた。それは、彼女の知らない誰か、なのかも知れない。

まつたく、クソダサイ。家族と一緒にで、しかもハワイだなんて……。浮かれている亮太をよそに、彼は羽田空港でぶつたれていた。春休み、親戚の家族と彼の家族でハワイへ旅行することになったのだ。ここでバツクして、東京で遊んでいたい、などと思つたりしていたとき。あらわれたミキの姿を見て驚いた。小学生の時の記憶しかなかつた、男の子みたいだつたひとつ違ひの従姉妹が、美しく成長していた。

「すげえ……。東京の高校生だ。素直に感心した。化粧もしているのか。」

「全然、変わつてないじゃん」彼女は、開口一番そう言った。「小学生のときとおんなじ顔」嬉しそうに、彼を見た感想を言った。あまり愉快な評価ではなかつた。

「変わつたよ」無愛想に言う彼に、「何処が?」と聞き返した。

「一目でわかつたよ。耀クンだつて」

彼は、わからなかつた。記憶のなかの少女と、目の前の少女がうまく重ならなかつた。

「自分じゃわからんないよ」

「じゃあ、変わつてないってことじゃん」愉快げに言った。「バスケがうまくなつた」彼は必死にさがしてそう言った。

「昔からうまかつたじゃん」由布院小学校の校庭に「ゴールネット」があつた。よく遊んだ。そのことを彼女は憶えていた。「ダンクができるようになつた

「へえ……」彼女の瞳に尊敬の色が浮かんだ。視線が眩しくおもえて、思わず目をそらした。

ハワイまで、七時間のフライト。亮太を挟んでふたりは座つた。親達は後ろの座席にいる。彼女はよく眠つていた。彼は、眠れなか

つた。はじめて、飛行機に乗ったのだ。ずっと、雲海を見ていた。

両親同行だから、まったくマリンスポーツはなし。海に入ることすらなかつた。マウイ島でハレアカラに登つて、カウアイ島でプレスリーが映画の中でギターを弾いた山を見にいつて、オアフ島でダイヤモンドヘッドに登つた。ハワイへ行つたというのに、山ばかり登つていた。後は、アラモアナでショッピング。彼は、ナイキのシユーズを買つた。

「どうして、ハワイでナイキを買うの」従姉妹にからかわれたが、「安いし、コレ、大分じゃ売つてなかつたから」と反論した。

「へえ。東京だつたらあるのに。でも、確かにこっちのほうが安いかも」と言われて、素直に東京が羨ましく感じた。

オアフ島にいる間は、コンドミニアム滞在だつたから、マックと、ABCのおにぎりをよく食べた。さすがに何しに来たのかわからないので、時々、朝早く起きて適当なホテルのモーニングを食べて、ふたりで海岸を散歩した。ワイキキから、ダイヤモンドヘッドを見ていると、何だか、昔から知つてゐる場所のような気がした。

そのダイヤモンドヘッドをあとにホノルル空港を発つとき、とても寂しく感じた。たつた九日の滞在だつたが、離れたくなつた。「ハワイに住みたい」飛行機が飛び立つまで、ミキは言つていた。帰りの飛行機の中で、ふたりは並んで座り、眠つた。

次の夏休み、彼女はひとりで由布院に遊びに来た。お金がないから、大阪からフェリーで來たと言つた。彼は、すっかり変わつた由布院の町を案内した。硝子作りを見学して、猛烈な勢いの鯉に餌をやつた。金鱗湖を散歩したとき、下ン湯に入ると「ミキをおしとどめた。下ン湯は、混浴で脱衣所もなく、浴槽の横にすのと、脱衣棚があるだけだ。しかも、申し訳程度の木立に覆われた露天は、観光客からほほ丸見えだ。よほど豪傑でない限り女性ははいらない。日の暮れかけた金鱗湖の橋のうえで、いろんなことを話した。

「アニメーターになりたいの」ミキは言つた。彼は感心した。自分は将来なりたいものなど特に無かつたから。何をやつていいのか、

わからない。けれど、思ったことを言った。

「東京に行きたい」

「ホントに?」嬉しそうな瞳をむけ彼女は言った。湖面に映る民宿の灯りが背景。フィルムのワンショットのよう記憶に残った。

受話器を置いて、ホンダは思った。

韓国経由でも、何でもかまわない。東京へ行く。亮太をもとに庚

す。ミキに会う。生きていれば、必ず会える。

「行こう」かじかむ手に吐息を吹きかけている麻奈に言った。既に、雪が積もっていた。

受話器を置いて、彼女は思った。

東京に来るつて、言つたでしょう。今、来て。

北九州までたどり着いたとき、既にバイクで走れる積雪ではなかった。川野は路肩に軽の四駆を見つけた。針金でドアを開け、直結でエンジンをかけた。ホイールハブをまわし、四駆にギアを入れた。歩道を走った。十号線をそれ、裏道へ入った。海岸に沿う防波堤横の、道とは呼べない道。干潟は猛烈な勢いで雪が舞い、視界をさえぎっていた。雪が深い。滑れば堤防を転がり落ち農業用水路に転落だ。その道を北上できるだけ北上し、十号線に再び向かった。旧北九州空港跡地横を走り、門司へ向かう幹線道路に入った。後は一本道だ。だが、それ以上進むのは無理だった。積雪がバンパーまでとどいている。立ち往生してエンストすれば、凍死だ。真っ暗闇のなかに看板を見つけた。アウトドアショップ。中には冬山登山用のシエルフなどもあるはず。

雪の中に降りた。膝上まで埋まつた。脚を引っこ抜きながら、前進する。歩道に、うずくまっている人がたくさん。

「お前ら、凍え死ぬぞ」声をかけたが、当然返事はない。ホントに、みんな死んじまう。

「知らないからな」吐き捨てたが、それは良心への言いわけだった。彼ひとりで、これらの人々を助けることなど不可能だ。自分が生き残れるかどうか微妙な状況だ。

ショウウインドウを破つた。吹雪とともになかへ踏み込んだ。マネキンの後ろに扉を見つけて開いた。そこは店内だった。闇のなかに足を踏み入れ、吹き込む風と雪を後ろ手にさえぎつた。静寂に耳鳴りがする。暗闇を懐中電灯で探つた。

店舗奥に設営展示してあるドーム型のテントを見つけた。そのなかに目的の品々を次々放り込んだ。濡れた服を脱ぎ、保温性の高い衣服に着替えた。電池も見つけた。そしてランタン。周囲が穏やかな光に包まれると、気持ちが多少明るくなつた。ダッチ・オーブン

のなかに木炭をいれ火をおこした。テントの中が暖まつた。一酸化炭素中毒には気をつけないとナ。一酸化炭素だつたつけ？ まあ、いいや。シンナーみたいなモンだる。ちょっとラリつたほうがマシかも知れない。自分にいきがつて見せたが、シンナーに手を出したことはない。マリファナはあるが、彼の感覚では、マリファナを吸うのはカッコいいことで、シンナーを吸うのは馬鹿のやること、だつた。

葉っぱ吸いてえな。もう、何日切れてンだ？ 家を出たのが十日前で、その時持つてた十グラムは三日で吸つちゃつたから、かれこれ一週間禁煙してる。スゲエ。煙草を吹かしながら感心した。

彼の地元は門司だつた。

学校はくだらなかつた。友達も。くだらない。悪ぶつてるくせに、だらだらつるみやがつて、いきがついていても、女の腐つたような奴らどもだ。と言つたら女の子に失礼だ。集まるたび、いない奴の悪口ばつか。

友人の妹をふつて、総すかんを喰らつた。本當だ。けれど別に嫌いだつたわけじやない。逆だ。かわいい子だなと好意を持つていた。けれど、中学生だつた。まあ、歳はいつこしか違わないけど。數度、デートもした。普通に。まあ、メシを食つたり、お茶を飲んだり、彼にしては健康的なデートだ。だけど、相手の気持ちはわからない。彼のことを好きなのか、どうか。一度、良いムードになつて、キスしようとしたら拒まれた。なるほど、と思つた。脈なしだ、と。彼にとつてキスを拒まることは、ふられたことと同義だつた。

その夜、行きつけの店で、中学校の同級生とばつたり会つた。中学のときはほとんど話したこともない女の子だつたが、話してみると、コレが途轍もなく気が合つた。おまけに綺麗になつていたし。で、ふたりで大盛り上がりしているところへ、友人が妹を連れてやつてきたのだ。

自身の置かれた状況には気づかず、彼はその偶然を喜んだ。満面の笑みで驚きの声をあげ迎えたが、一瞬の後、解きようのない誤解

が生じていることに気づいた。彼女は、好きな人に裏切られた女性の顔、をしていた。何でだよ、と思った。そうだったのかよ。ソンならサクッと言つてくれればいいじゃねえか。けれど、時既に遅し。この場をどう言い繕うとも、とりなす術はない。

彼は右手をあげ、指をふつて、サヨナラをした。それから、向き直り、前以上の勢いで話しかけ始めた。半分以上やけくそだつた。腹も立つていた。中学生がこんな店に来るんじゃねえよ。それから、友人だ。いつも人のことをスケこましみたいに言いやがつて。だから、こんな些細な誤解も取りかえしようがなくなんだよ。

取りかえしのつかなくなつたものは、それだけじゃなかつた。翌日から、総シカトされた。友人全員。そうかよ。テメエら。こつちには何の事情聴取も無しで、一方的にハバかよ。文句があるなら、口がついてるだろう。言えよ。腹が立つなら、手があるだろう。殴つて来いよ。ソン時あ、こつちも手も口もついている。殴り返してやる、彼はそう思つたが、実際、その機会があれば、互いの気持ちもわかるだろうし、和解だつてできだろう。が、誰一人として、彼にチャンスを与えたなかつた。彼も、意地になつて原因には心当たりがないふうをよそおつていた。

今日まで。

もう、誰一人、残つていない。多分。

あの娘は門司にいただろから、早いうちに本州へ渡つただろ。無事だといい。他の奴らも。両親は、多分駄目だ。熊本へ行くと言つていた。旅行だ。彼は、その留守中に家を出て富崎へ向かう途中だつた。年に一回あるライブ・イベントは、前から観に行きたかつた奴だ。もし、あの日、列車に乗らなければ、今頃は本州にいただろう。列車は脱線した。いや、追突だつた。死体の山の中で、彼は意識を取り戻した。東別府駅だつた。停車していたとき、後発の特急ソニックが突つ込んできたのだ。だが、状況がわかつたのは、しばらくその駅前で呆然と座り込んでいて、それからだ。ようやく衝突事故だと理解できた。同時に、街の異様な雰囲気にも気づいた。

まだ、停電していなかつたから、街頭のテレビで、状況把握に努めた。だが、はつきりわかることは何ひとつなかつた。誰もがそうだつた。誰一人として、なにが起きているのかわかっている者はいなかつた。だが、なにか起きている。尋常でないことが。徒歩で別府へ向かい、ネット喫茶で情報収集した。それも無駄だつた。携帯ははからまつたく使えなかつた。その夜、停電した。いつせいに、街の灯が消えた。

片っ端から民家を探し回って、ようやく、石油ストーブのある家を見つけた。何処も石油ファンヒーターばかりだった。停電していっては無用の長物。

家人の姿はない。リビングのラグの上に、おぶっていた亮太をおろした。まったくの無反応。そのままそこに座る。麻奈と顔を見合わせる。麻奈が瞳をふせた。それで、自分がひどい顔をしているとわかった。多分、暗然たる面持ち。

真っ暗な部屋を石油ストーブの赤い灯りが仄かに照らし出す。冷えきつっていた部屋がわずかに暖かくなる。

雪が激しくてこれ以上進めない。今夜はここでしのぐ。朝になれば、出発する。たとえ、横殴りの雪が吹きつけ、腰まで積雪に埋もれながらでも、進まなければならない。時間がない。今、思つている次の瞬間にはそれが訪れるかも知れない。自分にも。

亮太の虚ろな眸子を見て思う。痴ほう、ではない。ショック状態。極度の。それがずっと続いている。ショックの度合いが大きすぎて、灰のようになつていて。実存、という言葉が頭に浮かぶ。小難しいことは大嫌いだ。だけど、弟の精神の中で、何かが起こったのは確かだ。それも劇的な変化が。本来あつた彼の自我は、その激変に耐えられず粉々に碎かれた。今あるのは燃えのこり。けれど内面的な変化は推測でしかない。対外的なことのみを言えば、彼は現実から引き裂かれ、そこに存在しないかのようだ。彼自身もまた現実を認識していない。以上のことを鑑みれば、コレは重度の統合失調症……？ なのかも知れない。あるいは自閉、失語……。だとしたら、直る。時間はかかるても。医者に診せれば。しかし、コレは希望的観測かもしれない。もつと、完璧な完膚なき人格破壊かもしれない。ただひとつ、はつきり言えること。早く、ここを脱出すること。打ちひしがれている時ではない。思い屈しても、頽れそうになつて

も、暗澹たる現実ふりはらい、ここを脱出しなければならない。麻奈の顔を見る。あれ以来、一言も話さない。悲しんでいる。怯えている。その両方。

自分と一緒にいることが、この子にとって安全なのか危険なのかわからない。ミキに話したとおり、自分は狙われていると考えて間違いない。エレボスとは、奴らと敵対していた者の名だ。それが、何者か知らない。だが、そいつはこの刀の持ち主だったはず。何故、自分に使えるのか。狐の言つた血の意味は何なのか。思いがそこには及ぶたび、彼は混乱する。

ただ、これだけははつきり感じている。狐はこれを妖刀と言つた。そのとおりだ。ふるうたび、自分がまったく違う何かへ変貌していく感じがする。怖ろしい何かへ。はじめて手にしたときからそうだった。あの獣の群れに怖れなく挑んだ。しかも冷静だつた。普通じゃない。あんなことありえない。けれど、この刀を抜くたび、その感覚はどんどん強くなる。

違う。刀のせいじゃない。あの日から、そもそものはじまりから、違つっていた！！

彼はほとんど眠つていない。あの日、転落したバスの中で目覚めてから、ずっと。時折、立つたまま、五分ほどまどろむ。それだけで足りた。かつてないほど、意識は研ぎ澄まされている。この身体の変化は説明できない。身体だけじゃない。考えてみればおかしうさがる。両親を見ついたとき、泣かなかつた。いや、泣きはしたが、あの程度だ。驚きはしたが、冷静だつた。普通だつたらPTSDつてやつになつてもおかしくない。ふりはうえない悪夢の如く、あの光景が脳裏に甦つてきて当然なんだ。俺は、どうなつちまつたんだ！？

だけど、いい。俺がどうなつたつていい。

彼は唇をかむ。亮太とこの子を必ずここから連れ出す。九州を脱出す。奴らは微塵にしてやる。

気づかないうちに、少し眠っていた。五分と経っていない。目を開いた。何も変わっていない。亮太も麻奈もそこに座っている。けれど、彼女の瞳を見て、既にそこに彼女がないことに気づいた。

薄暗がりのなかで、何度も目をさました。暑いのか寒いのかわからないテントのなか。息苦しくて外へ転がり出た。途端に芯まで冷えてテントのなかにもぐりこむ。朦朧とした意識のなかで何度もそんなことを繰り返した。目を覚まそうとして煙草に火をつける。が、三分と持たない。そのまま寝入ってしまう。起きているのか眠つているのかわからない。その浅い眠りのなかで夢ばかり見た。悪夢ではなかつた。友達の夢。以前と同じように悪さをして夜中に遊んでいる夢。

突然、はつきりした意識を持つて目覚めた。暗がりのなかで身を起す。夢の中の友人たちと、今ここにいる現実がつながらなくて、戸惑つた。

夜は明けているようだつた。煙草に火をつけ大きく煙を吸いこんだ。吐いた。二・三度大きく繰り返すと、立ちあがり怒鳴つた。畜生！！ マネキンを蹴り倒した。うつろな音をたててそれは転がつていった。

ショーウィンドウから外をのぞいた。積雪は腰くらい。雪は少し小降りになつてゐる。

彼は装備に取りかかつた。スノーボードの上に、可能な限り荷物を積み上げ固定した。引つ張つていくつもりだつた。防寒対策は完全だ。冬山登山用のブーツ、ズボン、ジャケット。完全防水の物ばかり。上着のポケットに拳銃を入れた。腰のベルトにバールをさした。

歩いていく。海峡まで。

割れたショーウィンドウから外へ出た。積雪は予想以上だつた。

胸元近くまで雪に埋まつた。

「クソ畜生！」ぶつける相手のいない苛立ちを咳きにかえ、雪を搔

き分けで進みはじめた。ロープで腰に結わえたスノボは、雪のつえをするする滑つた。

同じ頃、ホンダもまた北上をはじめていた。ふたりの子供を乗せた大きなショッピングカートで雪をおしわけながら……。

天候はこちらの方が悪い。横殴りの雪が吹き付けている。子供たちを覆っているシートがはためく。が、濡れても、お腹がすいても、この子達が声を発することはない。風邪をひき肺炎になつても、苦しいとも言わず、息絶えていくだらう。そんなこと、させない。早く、北九州へ。

渾身の力でカートを押した。雪が激しい。前が見えない。ビールのフードで、半分以上視界が遮られている。

雪の下で何かを踏んづける。凍つた人間の体。多分、……。迂回して進む。

自身が今来た道をふりかえり、絶望に近い気持ちにとらわれる。たつた……これだけ。まだ、たつた、これだけしか進んでいない。だが、歯を食いしばる。吹きつける雪の中、うつむき氣味に進む。海峡へ。

フードの向こうに、透けて見えたモノがある。彼を待っていたかのようだ。

それは降り積もった雪の上に座っている。その身体は沈まない。それはよく見たことがある。尤も、本の挿絵でだ。ヤギの頭と一本の角、身体は人間に似ているが腰から下は獣、背中に黒い翼。今まで見てきた奴等に比べれば、ずっと人間っぽい。けれど、なんだ。背筋の凍るようなこの感覚は……。今までよりもずっと恐ろしい敵。刀を手に取つた。

そうだ。やつだ。

静かに口を開いたのは、悪魔が先だつた。

「我が名はバティン。久しづりよの。エレボス」

そうだ。その名だ。氣をつける。こいつは狡猾だ。何故……俺は

？思い出せ。姿が違う。そうだ。こいつの本当の姿はもつとおぞましいモノだつた……。何故、俺は知つてゐる。だが、もつ、迷わない。

「貴様の本当の姿は違うはずだ。何故、偽りの姿を装つ？」

悪魔が山羊の口を開く。邪悪な笑みの端から、ちらちらと炎がのぞく。

「らしくなつたものだ。わずか十口のうちに……。だが、まだまだ弱い」

吹きつける雪のなか、ホンダは雨具を脱ぎ捨てた。剣を抜いた。

「我を斬るか？ 弱き人間よ。笑止。斬りたくば斬るが良い」

距離、約三メートル。飛びかかつて斬れる距離ではない。雪が邪魔だ。

相変わらず、悪魔は積もつた雪のうえに座つてゐる。微動だにしない。

「尤も、貴様が斬るのは我にあらず」悪魔の笑みが大きくなる。

「エレボスよ。貴様をなぶるのは楽しい。簡単には斬るな。泣き叫びわめけ」

静かにそう言い残すと、悪魔は雪に沈んだ。違う。沈んだのは、憑依を解かれた人間の身体。

静寂、最悪の予感。

背後でカートが裂ける音。そして悪魔の晒い声。

取り返しがつかないこと。それが起きた。瞬時に悟り、ホンダはふりかえつた。

チユーブのような三本の長い首。うち一本の先端は沙蚕の口のように鋭い牙が管状に覗いている。中央の一本の先に獣の頭。長い顎鬚をゆらし、首をのたうたせ、勝ち誇った笑みを浮かべている。その口から、毒々しい炎の瘴気が漏れている。

腕につかんでいる。麻奈を。なら、その体は。

「てめえ！！ 誰に憑依してんだつ！！ 糞やろおつ！！ 離れろ

！！ 離れやがれつ！！」ホンダは雪を掻き分けつかみかかろうと

した。その身体を蛇のよつた尻尾が撃つた。吹つ飛ばされた。

が、再び、雪の中から躍りかかる。離れろつ！！ 離れやがれつ

！！ 尻尾に撃たれる。

悪魔が哄笑する。

「あわれなほどに弱い。すでにそのザマか。ブザマだ」

ホンダは雪にまみれ、まだ、悪魔につかみかからうと試みる。亮

太つ。亮太つ、とわめきながら。

「貴様は我等になぶられる存在にすぎぬ。灰になるがよい。エレボス」

悪魔が麻奈の首をひねろうとしている。

「止めろおおおつ！！」ホンダが叫ぶ。

「止めぬ」悪魔の嘲笑。

次ぎの瞬間。ホンダの意思ではなかつた。それは刀の意思。

轟音とどろき、悪魔の身体は木つ端微塵になつた。放射状に雪が吹き飛ばされ、血と肉片とともに舞つた。どさり、と麻奈の体が落ちた。

刀を放り出し、ホンダは半狂乱になつて、散らばつた肉片をかき集めた。元に戻れ、元に戻つてくれ。そうせすにはいられなかつた。

「どうかの……？」

血だらけの顔を向けると、そこに麻奈の姿は無く、バティンがいた。

「どうかの？ 肉親を殺めた感想は。斬つた感触は良かつたか？」  
もう……、もう……勘弁してくれ。うずくまるホンダ。

「貴様の……、目的はなんだ？」何故、俺に亮太を斬らせた。そんなことをして何の意味があるというのだ。このうえ、彼女も斬らせようというのか。

「言つたであろう。貴様を灰にしてやると。生ける屍となるがいい」相変わらず、悪魔は晒つている。かき集めた肉片を胸に抱き、ホンダは叫んだ。

「いったい、俺が何をしたつ！？ 俺が何をしたと言つンだ。何故、

俺を狙いやがる！？ 俺にこんな真似をさせていったい何の得があるんだ！？

悪魔は静かに答えた。嘲笑いながら。

「知る前に死ぬ。我が手を下さずとも」そう言つと、背中の黒い翼を羽ばたかせた。雪が舞いあがり何も見えなくなつた。視界ゼロ。雪が消え去つた時、悪魔の姿は消えていた。後に残つているものは、投げ出された刀、こなごなの肉片、血にまみれ放心して空うな目をしてるホンダだけだった。

関門トンネルは水没していた。入り口から五十メートルの地点で、くるぶしが水に浸かり、真っ黒い水面がヒタヒタと静かに波打つていた。暗い水面に浮かんでいるのは、水没した車のなかから流れ出た日用品など、か。

川野は舌打ちして踵を返した。意識しなくとも足早になる。腹は立つてはいる、疲労困憊している、しかし、闇は恐ろしい。

ほとんど駆けるようにしてトンネルを出て、橋のたもとへ向かった。雪の中、荷物を引っ張りながらそこへついたときは、すでに夕刻近かつた。

橋のたもとには、関門トンネル人道入り口がある。

川野は施錠されている非常口の扉をこじ開け、なかを覗いた。暗くて下は見えない。懐中電灯で照らすと水が見えた気がした。石ころを落としてみた。ポチヤンという音が返ってきた。

「クソ畜生がっ！」腹立ち紛れにでかい石を投げつけた。ドボンと音がして飛沫がかえってきた。

立ち止まつてはいられない。もう日が暮れかけている。急ごう。

彼は、めかり山を登りはじめた。ズルズルと荷物を引っ張りながら、急な勾配を雪かき分けて登つていいく。このジグザグの山道が、金網ひとつで高速道路と隣接する場所が一箇所だけある。そこから、橋の上へ出る。

どこもかしらも雪に埋もれていて、見落す所だった。ここだ。

そしてそこは、橋の上が一望にできる。

何百台という車が雪の中に埋まっている。吹きすさぶ強風を受け  
て、ルーフと風上の方のウインドーが少し覗いている。強風が橋の  
上の雪をさらり、海峡へ散らしている。

自衛隊の張つた鉄条網と土嚢が雪の上に頭を出している。  
川野の血がざわめいた。向こうは山口県、本州だ……。

## 脱出不可6

俺は……ルナティックになつたのか？　いや、……違う。力が抜けているだけだ。考える力が……。

血の塊を抱きしめたまま、ホンダは我を忘れ、心凍りつかせて、ただ、涙が滂沱とめどなく頬を伝つていた。

瞋恚激しく燃えることなく、憎しみの標的さえ失い、ただ、手の中の肉塊が、自身の弟であるという現実から目を背けていた。思考は言語の体をなしていない。断片的な映像の切れ切が、亮太の姿が、眼中に浮かんでは消えていった。

「やれやれ……よのう」背後から女の声がした。

いつのまにか、雪は小降りだ。唇に落ちた雪をちりりと舐めて媚狐朗は言つた。

「呆けてしまう気かえ」ホンダは言葉を返さない。ふりかえりしない。

「教えに来たのじゃえ。最悪の相手が近づいてくるとのっ」  
「これ以上まだ最悪の奴がいると……？」ホンダは無言のままふりかえり空ろな目を向けた。

「ここで、ずっと、うつむいているつもりかえ」

「あんたは……」「あんたは、奴等の仲間なのか？」あいつ等と同じなのか……？

「わたいかえ？」媚狐朗はさも愉快そうに答えた。

「わたいは、まったく違うぞえ。似てあるかも知れぬがの」艶やかな髪に降りかかる小雪をはらりと払い、妖狐は続けた。

「奴等はわたいよりもずっと古い。齡数万年、いや、数億年かも知れぬ。わたいと違い、奴等は他所で生まれた。もっと、知りたいかえ？」

「他所つてどこだ……？」

「さあて、そこまではわたいも知らぬぞえ」

「隕石に乗つて来たンだ……」確信していた。

「さあてねえ」媚狐朗は明言を避けた。

「俺は……、奴等のなんなんだ。何故、俺は狙われる」

「それものう、知つておれば教えてやりたいが、わたしに生まれるよりずっと前の、奴等との因縁じや。わたしは知らぬ

「俺は、エレボス」

「それも、知らぬなあ」わたしが知つておることはひとつだけ。

「汝にしかその太刀使えぬ。奴等を斬れるのは汝のみじや」ホンダの双眸がくわつと開かれた。

「いくら斬つても、奴等を倒せない。俺が殺しているのは人間だつ。それでも、奴等を斬ることに、意味があるのか

媚狐朗はあくまで冷淡に語る。

「奴等は、お前と戦つても負ける。必ず。故に姑息な手段を用いる……。わかるう? 奴等にとつて一番の邪魔者なのじやよ……。戦うても負けるゆえ、卑怯な手段で潰しにかかる。奴等の思惑通り、ここで呆けておるかえ? いずれにしても、今から来る者の相手をせねばなるまいの。お前にとつては最悪の相手ぞえ」

何が来るんだ。

「奴等の仲間には違ひないが、奴等とは、また、一風違つた奴じや……。その太刀の天敵」

媚狐朗の最後の言葉が終わるより先に、目が覚めた。彼は雪の中に横たわっていた。寝ている彼を見下ろす少年の姿が目に映つた。金色の髪の少年。一瞬、川野と見間違つが、もっと華奢で、中学生くらい。

「エレボスにとどめをさせと言われて來たが、このザマか

夢の続きのように聞こえたが、ホンダにも解つていた。目睫に迫る危機が。こいつの名が喉まで出かかっている。姿を変えているがこいつは……こいつの名は。

「今の貴様を倒しても意味が無い」

「だつたら……」ホンダが、かすれた声で言つた。

「だつたら、失せろ」アスルー。そうだ。こいつはアスルー。

「我が名を思い出したか。エレボス。いかにも、我が名はアスルー。

だが、お前に教えてやるつ。我を「我を思い出すが良い。金色の髪に雪がのつてゐる。

ホンダはよろめきながら立ちあがり、刀を探した。すぐそばに、それは転がつていた。

「刀を使うな」少年が言った。

「使えば貴様を殺さねばならぬ」

「何故、刀を使えば俺を殺さなきゃイケナイ?」それはどつていう意味だ。

「されば、我也本来の姿で戦わねばならぬ故。いくら、ひよつことはいえ、貴様はエレボス。我も刀もて戦わねばならぬ。素手で勝負は、我が情け。身をもつて我を、そして自分を思い出すが良い」

素手で……素手で勝負しようと、腕にはからきし自信がない。今まで、まがりなりにも奴等と戦つてこれたのは、刀のおかげだ。刀の持つ妖力（かどうかは知らないが）奴等を前に畏れなく戦えたのは刀の力だ。今の精神状態で、刀抜きで、こいつと戦えるのか？

風が吹いた。雪が舞いあがる。

ホンダは刀を拾い上げると、一振りした。どんづ、胆にこたえる音を立て、雪は吹き飛び、コロシアムのように円形のくぼみができた。その中には、ホンダと少年。刀を雪につき立て、アスルーの方を向いた。夕暮れの雪の中を、不気味な静けさが支配し、風に飛ばされ舞う雪が落陽を受けてきらきらと光つた。

ドンッ。アスルーが動くと空気が鳴つた。神速。次ぎの瞬間、顎に食らつた。立て続けにわき腹、テンブル。速すぎて見えないが、全部パンチだ。フック。ことごとく食らう一方だつた。みぞおち、鼻つ柱に強烈な拳底を食らい、雪の中に吹つ飛ばされた。

速すぎる。鼻血が口元をぬるつと伝つ。見えない。とても避けられない。人間の動きじゃない。否、違う。人間はあそこまで速く動ける。奴はその能力を限界まで引き出しているだけだ。

素手で勝負とはそういう意味か。奴は俺と、人間として勝負しようとしているんだ。悪魔らしくない野郎だ。

俺に見えるのか。奴のパンチが……。見える。心の奥底が答えた。理由はわからない。そして次ぎの瞬間、奇妙な感覚が彼を捉えた。異様なタイム感。一秒間を百七十分割に感じた。彼自身の体も、そのタイム感のなかを自在に動けた。イケル。

反撃！！

空気を割つて襲いかかった。正拳、逆突き、左中段蹴り、そのまま体を回転させ右の後ろまわし蹴り。正面を向くと腹部を狙つた鉤突きから、再び正拳の連打。アスルーはその攻撃のすべてを見事に見切りブロックした。有効打は一発もない。ガードした手をぱつと開いて、ホンダの両手を弾き飛ばした。瞬間、ホンダがノーガードになる。みぞおちに渾身の拳底。再びホンダは雪の中に倒れた。みぞおちを強打され息ができない。が、そこを狙つてくる様子はない。待つている。ホンダを。

立て。無言のアスルー。

なるほど……。ホンダは雪に埋もれたまま息を調えた。

スポーツマンか、テメエは。

ホンダは立ちあがると、遠い間合いから、跳躍し後ろまわし蹴りをぶち込んだ。敵は腕をクロスさせガードした。が、ぐらついた。着地で足を滑らせホンダは転んだ。跳ね起きて躍りかかる。右拳を敵の顔面に叩き込もうとした。その直前、敵の顔が消えた。拳は宙をきつた。次の瞬間、敵の靴底が彼の顔面を強打した。鼻血が飛沫、口の中が切れた。ぬるつとした血が口中にあふれた。ごぼつ、溜まつた血を吐き出した。やられた。胴回し回転蹴りだ。前方に宙返りしながら敵を撫で斬る蹴り技だ。まともに食らつた。ことごとく、上をいきやがる。駄目だ。勝負にならない。

ホンダは地にまみれた。口から伝い落ちる血が、冷たい雪を溶かした。これまでだ。敵わない。殺すなら殺すが良い。そうだ、もう俺には失うものも、護るべき者もいないんだ。

アスルーが見下ろす。憐れみの目を向ける。

「これまでか？ 何故、自分の力量を自分で決める。お前の力はそこまでで、それを決めるのはお前なのか」

ホンダは片肘ついて身を起し、息を調えた。俺が決めている？ 俺が自分の限界を、自ら決めているつて。ふざけるな。化け物相手にこれ以上何ができると言うんだ。いや。

再び、あの不思議なタイム感に自身の波長をあわせた。一秒間は百七十の瞬間。そうだ。もっとやれる。彼は自分のダメージを冷静にはかつた。顔面を何度も打たれた。みぞおちも、強打された。瞬間的なダメージは大きい。が、蓄積されたダメージはない。両手も、両足も思つまま動く。打てるか？ 百七十分の一のスピードのパンチを。

彼は立ち上がった。敵を見据えた。百七十分の一である必要はない。

神速再び襲い来た。敵のパンチは百七十分の五。見切つた。二発。拳が空をきつた。敵の体が泳いだ。わずかな軸のブレを見逃さなかつた。ボディに深々とアッパー・カット。次の百七十分の一の瞬間、足をふりあげた。敵の頭上高くに。

かかと落し。はじめてクリーンヒットした。距離を取り敵のダメージをはかつた。俺の力は奴に通用するのか。

炯眼鋭くアスルーが彼を見た。唇のはしに笑みが見える。  
「認めてやる。貴様を。もう、手加減はしない」

中国自動車道を、川野郁夫は歩いていた。深い雪を搔き分け、雪の中にうずもれた車両を避けながら。眠らず歩くつもりだった。もつとも意識は朦朧としていた。高速道路の街灯もない。真っ暗闇の山の中だ。雪だけが仄白く、眼前どこまでも広がっていた。

## 9 召喚

車は九州自動車道を駆進している。車種はワールド・ラリー・レースで常連優勝している車だ。路上の障害物を急ハンドルで華麗に避け、時にドリフトしながらまつしげらに北上していた。

ハンドルを握っているのはアイコだ。巧みなハンドリングとアクセルワークで放置車両を右に左にかわし走る。多少、接触しても気にすることはない。そしてまた、この状況下でも、その口が閉ざされることはない。女が一人いておしゃべりしないということはない。

ここに来るまでに、数々の仮説を立てた。エレボスのこと。奴らのこと。Hト・Hウトクタのこと。ラ・プレティエリ・ア・ナネのこと。

アニナ自身の素性を彼女はまだ知らない。あえて聞かない。それを除けば、意見はだいたいの一致をみた。

まず、Hレボスだが、はじめは転生者、生まれ変わりか、といったところから推論は始まった。が、DNA、つまり競走馬の理論をアイコが持ち出し、それが一番道理にかなっているとアニナも認めた。勿論、現時点では知りえる情報から判断して、である。

アイコが持ち出したのはこんな理屈だ。

例えば、Aというとても優れた馬がいたとする。が、その子供が必ずしも優秀であるとは限らない。逆であるケースも多い。ところがである。何世代も交配を重ねるうちに、オリジナルのAとまったく

くそつくりな、あるいはそれを凌駕する名馬が誕生することがある。これが競走馬の理論である。

つまり、現実にこの話を当てはめてみると、

「エト・エウトクタでさらわれた男女。その男の方。それがオリジナルね。エト・エウトクタ後半でウイルオトスという機械だか装置らしきものが登場するでしょ。おそらくその男はその装置で、自身の体を魔物と一体化させた。恐ろしい能力を身につけ、それゆえ、塔からの脱出に成功した。そのDNAが数世代毎に顯著に現れる。見た目は人間。けれど中身は魔物とのあいの子。その内面に闇を秘めている。混沌の子。魔術用語でエレボスと言えば、闇の人格名詞、混沌の子、と言った解釈だけれども、ギリシャ神話でのエレボスは闇の王、と呼ばれている。その原初のイメージは、宇宙開闢の混沌から来ている。そう考えると、オリジナルの男がいつたい何と同化したのか？ 一概には言い切れないわね。ただ単に魔物の能力を手に入れた、だけじゃなさそう」

「要は、わたしの搜している男は、簡単なほうの解釈でデビルマン。複雑なほうの解釈でそれ以上の存在、と言うことね……」

「あら、デビルマン知ってるの」

「日本に来る前、日本のアニメを数本見たわ」

アニメじや駄目よ、デビルマンはコミックを見てよ、とアイコは薦めた。付け加えて映画は絶対に見ないほうがいい、と言い切った。ところどころ、話はそれながらも、解釈は続く。

「で、その血脉が現在のこの地球上に存在している、ということは、間違いなくエト・エウトクタはエノク書の前編ね。エト・エウトクタの世界の住人はこの地球上へ、降り立つたはず。思い出して。エト・エウトクタの最後の一文。『そこで、彼らは船を見つけた』。宇宙船と考えるのが馬鹿げているけど一番自然」

続くエノク書では、その彼らを、天界から降りてきた天使と捉えている。つまり、墮天使という概念である。そして、彼らは地上の女達と交わったとあるが、事実だとしても、そうして生まれた巨人

族が神に滅ぼされた云々というくだりは、捏造と思われる。何らかの理由で、生まれた子供達が殺された事件があつたことは推測できるが、通常考えても人間は巨人を生めない。

「でしょ？」

「まあ、そうだけど……」そんなに簡単に片付けていいのかしら。「だつたら、人類の始祖はサムヤサ達、ないし、彼らの影響を受けてもの達、ということになるわ」

「そうね。なにか不都合でも？」

「いえ……。けれど引つかかる。両書のあまりにも大きな違いが。「エノク書と比べて、ヒト・エウトクタは話がきれい過ぎるわ。思わない。話ができすぎてて。創作の臭いを感じるンだけど……。気のせいいかしら」

アイコは大きく息をついた。確かにそれは彼女も感じるとこる。しかし。

「まず、二つの書物の性格を考えると、受ける印象の大きな違いにも納得がいくわ。エノク書は紛れもなく宗教の書。神と人間の契約の書よ。対してエト・エウトクタは太古の壮大な英雄伝。書かれた時代も違うわ。エノク書は紀元前。紀元前の人間の価値観で書かれている。エト・エウトクタは意外かもしけれど十六世紀半ば。それ以前には断片すら、これに類似する書物はない。勿論、書いた人間もわからない。おそらく『口承でごく限られた人々の間に細々と伝えられてきた物語』、それが十六世紀に始めて書物となり人の知るところとなつた。そうとしか考えられないわ」

少なくとも、今現在彼女達が持ちえている情報から推理すれば、これ以外の回答はない。

「ともかく。情報が少ないわね」とアーニナ。

「情報が少ない以上、いくら議論しても結論は出ないわ」推測しか出ない。

「そうでしょ」とアイコ。なにやら意味ありげに微笑んだ。

「わからないなら聞けばいいのよ」

アナは嫌な予感がした。誰に？

聞くの。

雪のなかで目を覚ました。死んではない。大の字で倒れている。顔が赤黒く腫れている。触れてみる。手は動いた。触ると痛かった。口の中が切れて、唇が乾いた血ではりついていた。開くとベリツと音がした。息を吸い込む。冷たい空気が口中の傷に心地よかつた。雪をすくい、顔に押し当てた。

敵わなかつた。まつたく……。

意識を失う前の、立ち去り際の奴のセリフを憶えている。

「強くなれ」俺は北西のドーム状の建造物にいる。

憐れむような目で、人を見ながら。

雪に突き立てた刀が目に入る。あの刀を使っても、多分負けた。敵わないんだ。ふざけてやがる。刀で勝負すれば、命はなかつた。奴の言うとおり。

けれど、ひとつだけハッキリしている。俺は強くなれる。奴の言うとおりなら、奴と互角に戦えるくらい。強くなれる。互角でも不十分だ。圧倒しなければ、ならない。

戦いたい。もう一度。

その時、湧き上がるよう噴出して、彼の心を支配した感情をどう説明すればよいだろうか。強いて言つならば、冷たい闘志。

彼は立ち上がつた。刀を手に取る。鞘へ収めた。

北西のドーム状の建造物、福岡ドームだ。それ以外考えようがない。彼は雪を搔き分け歩き始めた。

目的地は、もはや海峡ではない。目的も避難ではない。

両親の死、難民行、悪夢のように殺される人々、弟の被災、そしてこの手で殺めた、すべてが彼を呑み込んでいた。怨念ではない。研ぎ澄まされた冷たい魂。心の奥底まで冷えわたるよう……。人間以外のモノに彼はなつたのかも知れない。

それは、エレボス。

行く手は真っ暗だ。灯りひとつない。空にも星ひとつない。ただ、広がる暗闇。その闇の底が仄白い。

もう、何日歩いたのか記憶はない。何度夜が来て、何度朝が来たか、朦朧とした意識で数えようとしても無駄だつた。すでに雪は姿を消していた。ただひたすらにまっすぐなアスファルトの上を一步一步、歩いてゆく。一台の車もない。九州とはずいぶん様子が違う。

次のインターに着いたら、高速道路を降りてみよう。彼はそう思つていた。まだ、被災地の中かもしれないが、どうでもいい。人はいるだろつ。まともな……。

その時、前から道路公団の黄色いパトロールカーが走つてきた。幻覚のように見えた。彼に気づき、スピードを上げ近づいて来ている。

やつたぞ……ちくしょうめ。……俺は生きのびた。川野郁夫は保護された。九州封鎖以来、初めての、そしてたつた一人の脱出者だつた。

アイコは高速道路を降り、ホームセンターの駐車場に車を止めた。ここはもう、被災地の中心部に近い。ルナティックの姿がまばらに見える。北部九州では、寒波により数万人ないし数十万人の死者が出たが、それは知る由もない。

二手に分かれて必要な物資をかき集めた。アニナはポリタンクを五本トランクに押し込んだ。ここに来る前にトラックに会つたのだ。ガソリン運搬用の。給油したことは言つまでもないが、ポリタンクがあればもつと恩恵に預かれた。今度、出会つたら、チャンスは逃さない。

アイコがコンクリートの上に、黒スプレーで何か描いている。何を描いているのかしら。アニナはルーフ越しに覗き込んだ。そこに

描かれているものはすぐにわかったが、あまり好ましいものではなかつた。

魔法円。

視線に気づいたアイコは、身を起こすと、スプレー缶を力チャ力チャ鳴らし、にやりと笑つた。

その足元には、大きな円。内側に奇妙な書体のアルファベット。そしてまた円。中心には、数字の入った枠目。その数字は、縦横斜め、どの方向に加算しても同じ数字になる。それがこれから呼ぶ悪魔の数字。

「ショータイムよ」軽口を言う相手に、笑顔は出なかつた。

「ちょっと、手を貸して。あそこで寝ているルナティックをここまで担いで来るの」

「何故?」返答しだいでは断る。

「生贊じやないわ。円の中に置いて憑依の対象にするの」

「……そつ」予想とは違つたが、あまり好ましい答えではなかつた。

すでに日は暮れている。魔法円の横にオイル缶の焚き火が四つ。アイコは火の中にマグネシウムの粉を放り込んだ。閃光。

瞬きするアーナに、

「四つの星」意味ありげに微笑んだ。その手には、刀身にA・G・L・Aと刻まれた短刀。左手にペンドントをジャラジャラ。 「これから呼ぶのは、オロバス。エト・エウトクタではオノボスと記述されている悪魔。色々考えたンだけど、エト・エウトクタの記述を信じるわ。そこには『中庸の道を行く者』とある。つまり、悪魔にも人間にも味方しないってこと。じゃない？ だつたら、」「わたし達にも味方してくれないわ」ポケットに手を突っ込んだままのアーナ。

「まあ、見ていて」含み笑いを残して、アイコは円に向き直った。  
 「Athah gabor leolam - Adonai」ヘブライ語の呪文、召還の際、または祓う際、唱えられる決まり文句。だが、続く言葉はアーナの知らない言語だった。叩きつけるように唱えたあと、語氣鋭く、

「オロバス！」その名を呼んだ。

アーナは訝しがつた。オロバス？ 魔術師にとつて一番重要なことは悪魔の名を知ることだ。極端に言えば、名前さえあつていれば悪魔は召還できると言われている。勿論彼女は信じていないが。魔法円や短剣は、己が身を護る為、悪魔をそこに閉じ込めておくためのものに過ぎない。エト・エウトクタを信じるのならオノボスと呼ぶべき。

アーナの戸惑いに薄笑いで答え、アイコは再びはじめの呪文から唱え始めた。そしてその最後に、

「オノボス」今度はこう呼んだ。しかし、何事も起こらない。

それからあとは、その繰り返しだった。召還する悪魔の名を、微

妙に発音を変えて呼ぶ。

オウノボス、オロバイス、オノボイス、オノブス……。

どう表記すればよいだろう。Onobous、そう呼んだとき  
だった。

重く立ち込めた墨天から、ゆっくりと一筋の雲が降りてきた。稻  
光をまとい。

アイコは確信した。ビンゴ。

今の発音を繰り返す。オノボウス。

真つ黒い雲の塊が稻光を発しながら、魔法円のうえをゆっくりと  
まわっている。下に横たえられた男の体が、ゆっくりと持ち上がり  
雲に吸い込まれていった。

「オノボウス。偉大なる地獄の大公にしてソロモン七十二靈に名を  
連ねる賢者よ。我は求め訴えり。我はいかなる契約にも応じぬ。そ  
のうえで求める。オノボウスよ。我が願い聞き届け、汝の偉大なる  
知恵を我が前に示せ」アイコの言葉に呼応するように雲が切れた。  
切れ間に馬の頭が見えた。しかし異様に血走った目をぎろりと剥き、  
口からは瘴気吐き出している。一目で地獄の者であることが分かる。  
アイコの瞳が喜びに輝く。出現したものの恐ろしさなど意に介さ  
ぬ風。

だつて、こんなのは、初めてじゃない。

喜びに震える声を抑えながら、繰り返した。

「オノボウスよ。我はいかなる契約にも応じぬ者なり。汝に命ずる。  
その勇姿を我らが前に現せ。我が願い聞き届け、その深遠なる知恵  
を我に示せ」

どう、じゅふ、じゅふ、じゅふ、まるで地の底からわきいづる様  
な悪魔の笑い声。  
「我を呼びし、魔女は貴様か」心胆寒からしめる割れがねの様な悪  
魔の声。

その時には、雲を切り裂き、悪魔がその全身を彼女らの前に現し  
ていた。

馬の頭、長い首、その下は人に似た肌。逞しい胸板と太い腕。そして腹から下は再び獣の足、剛毛に覆われた。瘴気吐き出す口からは牙がのぞく。鋭く尖っていて、黄色い。瘴気がまづげに刺さる。冷気が頬を撫でる。

アナは思わず、マートの下の銃に手を伸ばした。少しでも危険が及ぶようなら撃つ。

「我を呼びし、魔女は貴様か」再び悪魔が問う。

「然り」凛と響き渡る声でアイコは答える。この恐ろしい姿を前に、少しも臆するところがない。既に薄暗がり。陽は落ちた。

「再度断りおく。私はいかなる契約にも応じぬ」

「されば、語ることなどない」アイコの声を悪魔の言葉がさえぎる。アイコは意味ありげに含み笑いをし、その手のペンダントの一つをかかげる。

「汝は答える」そのペンダントの石は、ポンティカ。悪魔に返答を強要する力がある。術にかかつたように悪魔が復唱する。

「我は答える」

そう。思つた以上の効き目だわ。全ては彼女の思惑通りに進んでいた。ここで主導権を握るのは、魔女。悪魔ではない。シノキティスのペンダントも併せてかかげる。

「汝に、問う」いよいよ交渉だ。

「地上にある全ての靈の名を教えよ」

「ごう、ごう、じつ、悪魔が咲笑する。

「汝、そを知りて、何をなすつもりか」

「試みる。交渉を」

「何を交渉する? 魔女よ」

「汝、知るところではない」

「ごふつ、じふつ、ごふつ、愉快そうに悪魔は笑つた。

「よからう。豪胆な魔女よ。貴様に免じて教えてやろう。今、地上にある靈は、ブーネ、ビフロンス、セレ、バティン、アンドレアス、ゴモリ、オッセ、ウラク……」ソロモン七十一靈にある名が、続々

と出てくる。しかし意外と少ない。全部で十八靈。ただし正しい発音ゲットだ。テープレコーダーは回してある。たとえ、回してなくとも、アイコは全て暗記するつもりだった。全ての靈を思いのまま召還できる。

だが、知りたい情報はそれだけではない。アイコはオノボウスのあげたリストにエリゴールが含まれていないことに気づいた。他にも名前の出てこなかつた靈はたくさんいるが、エリゴールは別だ。

「エリゴールはここに在らずか？」彼女の問いに、悪魔はあからさまな嫌悪の表情を浮かべた。

「エリゴールは我らの種族に在らず。我らの仇敵なり。汝、知らぬや」やつぱり。

「予想はしていた。礼を言うオノボウス。今ひとつ聞きたい。我らはエレボスを捜している。汝、その所在を知っているか」

「知つておるが教えると思うか。何故我らが仇敵の邂逅に力を貸さねばならぬ。道理はない」

アイコはポンティカをかざした。

「汝の知識は世界の隅々まで及んでいる。畏敬の念を持つて請う。エレボスはいずこ」

「北へ行け。もつと北だ。北の雪の中を流離つてある」

もう、そろそろ潮時だ。聞きたい事は山ほどあるが、自分の稚拙な魔方陣ではもたない。あと一分もしないうちに、悪魔は黒字の封印を破り、自分達に襲い掛かってくるだろう。せずとも、ちらほら人影はある。悪魔はそれらを自分の軍団に変化させることもできる。

アイコは凜とした声で再び唱えた。

「A t h a h g a b o r l e o l a m - A d o n a i

我が望みは叶つた。礼を言う。オノボウスよ。汝のもといた場所へ戻るがよい」

名前を得た。悪魔のリストを。ソロモン七十一靈のエリゴルがエト・ハウトクタのエリゴールであることもわかつた。エレボスは北だ。これ以上は望みようがない結果だ。

「A t h a h g a b o r l e o l a m , A d o n a i 礼を言  
う。オノボウスよ。すみやかに立ち去れ」A・G・L・Aと刻まれ  
た短刀を突きつけ、切つ先でペントグラムを刻む。

オノボウスは高らかに哄笑し、言った。

「我が望むまいと、貴様達のことは我が種族の知るところとなつた。  
エレボスを捜す魔女がいると」

「どういうこと？ 同一意識？ 意識を共有しているのか。

「違うな。魔女よ。我は語らぬ。が、知りたいものは我が見たこと  
を知る」

チーンパンカンパン。

「既にセレが知つた。覚悟はしておけ」 ひとりわ大きな笑い声を残  
すと、悪魔は憑依を解き消えた。どさつとアスファルトに倒れる男。  
意識はない。死んでいるかもしれない。何しろ悪魔に憑依されたの  
だから。

暗闇に取り残された二人は、黙つて顔を見合せた。セレが知つ  
たつて……。覚悟しておけつて……。どうこと？ アニナが静かに  
口を開いた。

「翻訳してくれない」 そうだ。悪魔は日本語でしゃべつた。

「つまり、こういうことかしら。奴らはローカルエリアネットワークでつながれたコンピュータみたいなもので、ひとつずつ単体が他の単体のデータを任意に参照できる……ってこと」

アーニナが言った。だから、オノボウスが仲間に語らずとも、既にセレという悪魔が知ることとなつた。そしてそれは時間とともに増えるだろう。

「……………」セレーネ。……………長髪のたくましい戦士で、好戦的でどうでも残虐」  
アイゴがソロモン七十一霊からの知識を言つた。「やっぱり私たち  
を狙つてくるのかしい」

アナは車に戻りバッグからモスバーグを出した。

「こんな物……」

手渡され驚くアイ二に、アイ二カは二二二の前をはだけて見せた。腹にオートマティック、腰にサブマシンガン。

逮捕されるわよ……いや、三つかあんた何者?

「わたしはルーマニアのトランシルバニア山脈にある小国、シルバニア公国の古い貴族の家柄の生まれ。わたしの家系は先祖代々、悪魔崇拜者やバンパイアを始末してきた。わたしが日本に来たのはローマ法王の依頼よ」（『イリア・サロニケ』エト・エウトクタ外伝）

ご参考ください)

シルバニア公国つて、ちょっと聞いたことがあるわ。何だつたから。違う、アレはウサギの人形シリーズよ。それより悪魔崇拜者？

つてちゅつと待つてよ。

「わたしは悪魔『崇拜者』じゃないわ」極めて近いとは言えるが。

「安心して。あなたを殺したりしないわ。一緒にいると助かるし」

「殺されるところだったの？」

「てか、バンパイアつているの？？」「悪魔がいる」の状況で、それほど驚くことでは無い。

「ええ。本来の意味でのバンパイアだけど。それは映画の吸血鬼なんかじゃなくて、悪魔崇拜者の手により不当な方法で蘇った死者よ。けつこういるわよ」

「そう。やっぱり、ルーマニアつてどんな所なんだわ。」

「あら。日本にもいたわよ」

「へつ？ 相手の意外な言葉に驚いていると

「わたしが日本に来たのは実は二度目。三年前、渕上といふバンパイアを追つて日本に来たわ」と、さらに驚くことを言った。

いやなりピーターだわ。観光で来て頂戴。

尤も、それはいいとして、いくら銃を持つても、

「奴らは弾を避けるわ。聞いているでしょう？」無駄よ。

アーニナは薄く微笑んでこともなげに言った。

「大丈夫。弾を避けた先を狙うから。わたし、集中すると敵のコンマ5秒後の動きが見えるの。だから敵が一発目をどう避けるかわかっているから、そこを狙つて一発めを撃つ。そしたら絶対当たるわ。でしょ？」

驚いた。エスパー少女だ。一瞬後の未来が見えるなんて。

「瞬間に見えるだけだけね」

その能力は、彼女の家系に隔世遺伝のよつに現れるらしい。事実、彼女の父親は普通の人間だったそうだ。

「それでも、家業は家業。父はバンパイアと戦つて死んだわ」

どんなあいづちをうつのが適當なのだろう。

「わたしは幸運なのか不幸なのか、千年にひとりの逸材らしいわ。父が言っていた・・・」

頼もしい限り、とは思わなかった。

彼女の正体はわかつた。が、それは逆に新たな謎をもたらしてい

る。彼女は気付いていない。

何故、彼女の家系にはそんな能力者が存在するのか。そして、何故、ア・ナネの夢を見るのか。エレボスに会えばどうなるというのか。謎が鮮明になり答えを導きつつある。

そして「日子の瓊矛」。アレは彼女を待っていた。少なくとも千年。いや、エト・エウトクタの時代から。何千年も。ア・ナネがアーニナに……託した。ほぼ、間違いない。

そして最大の謎。奴らは何処から来たのか。サムヤサたちは何処から地球に降り立ったのか。エト・エウトクタの世界は何処なのか。

## 10 福岡ドーム

福岡ドームは眩い光で包まれている。ドームから放たれた光が漆黒の闇のなかを射抜いている。ドーム内に強い光源があるのだ。その光を直視することは出来ない。直視すれば目を焼かれてしまう。既に何人もの自衛官が目を焼かれ視力を失った。

ドーム警戒には第八・第四師団があたつたが既に壊滅状態にある。生き残りは二十数名。雪のなかに取り残されている。

不思議なことに、光は熱を伴っていない。この光源であれば、絶対温度十の二十乗K以上あることが予測される。が、周辺の雪が溶けることはない。近づいた人間が焼け死ぬこともない。不思議な光。しかし生き残った自衛官達にとって、その光は既に問題ではない。寒さのほうが脅威だ。この雪で凍死した隊員数知れず。ほぼ全員が精神崩壊の犠牲者だ。なんら身を護る手立てもせず、死んでいく。生き残った隊員たちは一箇所に集まり、火を焚き暖をとり、次の瞬間には己に訪れるかも知れぬ狂気の恐怖に怯えている。

「後藤隊士長、平山一等陸士被災しました」

部下の報告をうけ長は唇を噛んだ。被災したとはつまり精神崩壊したということだ。

これで生き残りは十九名。いや、二十数名だが、今また一人、生きる屍と化した。狭いテントのなかで絶望に囚われている。退却命令など出てなくても、できるものならば退却したい。しかし身動きが取れない。応援は来るのか。

何も期待できない。

一人の隊員が、雪の上を歩く少年に気付いた。金色の髪の少年。積雪は一メートル強、その上を歩いている。仄白い闇の底を、光に向かって。

「デモニアックだ」間違いない。

全員がライフルを構える。ハ九式小銃。セレクトレバーを「レ」にあわせる。「レ」はフル・オート。連射。奴らが弾を避けることは、数度に及ぶ経験からわかっている。それを踏まえて奴を捉えるには連射モードで一斉射撃、しかない。

「撃て」命令でいつせいに火を噴くアサルト・ライフル。弾幕。少年には逃げ場がないように思われた。が、次の瞬間、全員が目を疑つた。

鋭く響き渡る甲高い金属音。その連續。少年は手のひらで銃弾を受け止めた。そして目にもとまらぬ敏捷さで他の弾丸を避けた。5.56mm弾は、少年の手のひらでべしゃんこになっていた。弾を避けながら少年はそれを投げ返した。一人の隊員のヘルメットを碎き、額を陥没させた。ズン。少年の体が雪に沈んだ。

「撃ち方止めつ！！」倒したのか？いや、違う！！ 雪のなかから襲つてくる。構えろつ、隊士長が号令を出す前に、テント前の積雪を破り少年が飛び出してきた。ライフルの銃身を押さえ、飛び上がり回し蹴り。顎をぶち抜く。銃口を上げた隊員に中段後ろ蹴りで踵を叩き込む。隊員たちは撃てない。同士討ちになる。少年の体が躍る。顎を碎かれ頸椎を折られる隊員たち。

掌低あばらを碎き心臓を握りつぶし呴く。屈強な自衛官達に向かい。

「エレボスに比すれば脆いな。お前達」

打ち下ろされた銃の台尻をとらえ、得物を奪つて言つ。

「それからコレ」ハ九式小銃を差し、

「面白い武器だが、エレボスの刃に比べれば生ぬるい」

ガチヤン。地面に投げ捨てた。

再び、旋風のような蹴り技。ヘルメットを割り頭蓋を碎く。誰にも止める術がない。一人残らず殺されるまで。

## 11 広島市内の総合病院

川野少年は意識を取り戻した。横になつたまま周りを見回す。清潔なカーテン、白い壁、医療器具、そして自身の横たわっているベッド。

助かつたンだ……。

カーテンが、白い壁が、彼を護つてくれている。護られているようを感じる。例えようのない安堵感。ここは安全な場所だ……。

看護婦の姿が見えた。聞いてみた。

「ここは？」

看護婦は笑みを浮かべ応じた。

「ここは集中治療室ですよ」

彼は起き上がろうとして、押しとどめられた。腕に点滴が、鼻に酸素吸入のチューブが取り付けられている。

「まだ、無理ですよ」看護婦が優しく言い添える。

「俺、重病人？」冗談交じりに聞いてみる。

「まだ体力が戻っていないんですよ。衰弱がひどかつたですから……」

なるほど。

「ここは？」再び同じ質問をした。ここは、山口？ それとも広島？

「広島市ですよ」

それを聞いて再び安堵した。九州から少しだが離れている。

「ここに居てもいいのか？」

「勿論ですよ」

いいとは言われたが病院だ。金はかかるだろう。保険を使つても集中治療室の相場は一泊約3万円。

「俺、何日寝てた？」

「三日ですよ」

「まだまだあと一週間はゆっくりしないこと  
げ、一週間だと！？」

「普通病棟に移りたいんだけど」

「そう言つと看護婦の笑顔が少し曇つた。

「回復すれば警察の事情聴取が待つています。あなたは『デモニアック』の嫌疑をかけられているの。普通病棟に移れば留置所か、特例で、医療刑務所で経過を見ながら尋問……とこうになるとらしくいわ

「わいや」思わず方言が出た。

## 12 合流

青年は十九歳になる。三年前に比べると大人の顔になつた。眼は鷹の眼、鼻筋高く、一文字の口を持つ。日蓮宗系の異端の寺で修行をしている僧侶である。それ以前は修驗道を修めていた。たつた今、下山して僧衣を脱いだばかり。蓬髪を束ね、Tシャツに袖を通してライフジャケットをはある。

身支度が出来ると自分の部屋を出て階下へ降りた。

「九州へ行つてくる」父に告げた。

「そうか……」酒の用意をしていた父は顔を曇らせそう言つただけ。何故お前が行かなければならん。言いたいことは山ほどあるが、「生きて戻つてこいよ」とだけ言つた。

「勿論だ」彼の母親は既に他界している。別れを言つべき人間は父一人だけ。

玄関を出た。

自分の車、七〇系の白いランドクルーザーに乗り込む。ハンドルを握り向かつた先はネット喫茶。

『エレボス』をキーワードに検索する。一万件以上のヒットがつた。ひとつずつ丁寧に見ていく。内容は大体共通している。エレボスと呼ばれる少年が九州にいる。彼は悪魔を斬り殺すことが出来る。その刀を振るうと爆音轟き巣巻がおきる。コンクリートが、その太刀筋に沿い、割れ舞い上がる。

その少年についての様々な噂や憶測で、掲示板は溢れている。ネットはエレボスの不確かな情報で澎湃としている。

魔術用語的に、エレボスは『混沌の子』であり『闇の人格化』したものである。ギリシャ神話では、宇宙原初の混沌を神格化したものであり、地下の暗黒の神である。

面白い記事もあった。噂の域を過ぎないが、山口と広島の県境で

九州脱出者が保護されたらしい。海峡封鎖後たつた一人の脱出者だ。エレボスと行動をともにしていたともつぱらの噂だ。

ひとつの掲示板のスレに目がとまつた。スレタイトルは『エレボスを助けて』。その内容は、こんな書き込みだつた。

わたしのいとこがエレボスです。本人から電話でそう呼ばれていたことを聞きました。それから悪魔に狙われているということ。どうか、お願ひです。わたしと九州へ行つて彼を助けてください。

その青年、野原祐一は携帯を取り出し、簡単に作成できる携帯用

ホームページを作り、再びパソコンに向かつた。

『俺はB I S。一緒に行つてやる。連絡方法は下記のＵＲＬを開き、そこにあるホムペから管理人宛にメールを送れ。俺のホムペだ。その後折り返し連絡する』

一刻も早く北へ向かうべきか、それとも今しばらくこの辺にとどまり搜索を行うべきか、アイコとアーナのふたりは迷っていた。微かに聞こえるラジオでは北部九州が大雪だと言っていた。おそらく、その雪の中の何処かにエレボスはいる。しかし一方、ここは災禍の中心地である。オル・ヴァブはこの付近にいるはず。ただ、「オル・ヴァブを見つけられたとしても、何ができるの?」「確かにその通りだけど」たとえ倒したとしても他のルナティックに憑依する。銃で倒せるのかどうかもわからない。

「じゃあ、北へ行く?」

「うーん。ふたりは黙り込んだ。たとえ倒せないにしても、オル・ヴァブに対して何らかのアクションを取るべきではないのか。この災禍の元凶だ。みすみす通り過ぎるのは間違っている気がする。だが、いつたい何ができる。結論は出ない。」

一夜明けた、きのうと同じホームセンターの駐車場だ。天候は曇り。曇天一面に広がっている。静穏、風はない。

駐車場にルナティックの姿が多い。昨日より増えている。が、ふたりは気付いていない。低い空に稲光。ゴロゴロと音をたて、徐々に近づいてくる。

「出来るかどうかわからないけど、召還……してみようかしら。オル・ヴァブ」アイコがそう言つた時だつた。

突然の大音響。雷の直撃のよつな、ミサイルの着弾のよつな、凄まじい爆音にふたりは縮み上がつた。

目をやれば、真紅の大火球が地にある。真っ赤に燃える火の玉。それが音をたて落ちたのだ。天から。

「なに!?」両手でスプリングフイールドX9を抜きアーナ。アイコは一言も口をきけず固まっている。ホームセンターのパークリングの半分を埋め尽くしている巨大な火球。それがふたりの見ている前

で収縮し炎の竜巻へと姿を変えた。その中に人に似た姿が見え隠れする。やがて、炎の竜巻は散つた。なから現れたのは、十四枚の翼を持つ長髪の騎士。きらめく鎧をまとい、巨大な剣を携え不敵な笑みを浮かべている。炎の形に似た煌めく剣。

「ねえ。もしかしてこれが……」アーナの問いに、

「セレ……」ようやく口のきけるようになつたアイコ。いくら相手が悪魔でも、言いたいことは言いたい。なんて派手な登場なの。

「これは怪異。エレボスを捜す魔女ありと聞いたが、あの男の血を引く者がいるとは」

「誰のことを言つてゐるの？ 顔を見合わせる一人。

「だがまだ牙も使えぬようだ。今のうちに殺しておこう」

「牙？ 何のことなの？」

「ねえ……」アーナがアイコに聞いた。

「撃つてもいいのかしら？」

「た、多分……」

「あなたの石は使えないの？」

「魔方陣の外にいる悪魔は調伏できないわ……でも、ちょっと話しかけてみようかしら」

「え！？」まじまじとアイコの顔を見るアーナ。けれどアイコは至極真面目な表情。悪魔に向かつて一步進み出た。

「その翼、その髪、美しきその太刀、汝……セレか？」英語で問い合わせた。すると敵は英語で返した。

「然り。我が名を知るとは貴様が魔女か」翻訳の手間が省ける。汝に問う。牙とは何のことであるか？」

蔑みの表情を浮かべ悪魔は答える。

「お前が持つてゐる。だが宝の持ち腐れだ」アーナに言った。

「今ひとつ問う。あの男とは？ 誰が誰の血を引いている？」

「それを知つてどうする。死ぬ身なれば知つても仕方ないこと」

嘲りの笑みとともに、その手の太刀をかかげ言った。

「だが、我が太刀を汚すまでもあるまい」

太刀を振るつた。周囲にいたルナティックの姿が変わつた。ジャッカルの頭、人の体、獣の足。

「死ね」冷たく呴くと再び爆音とともに赤い大火球に包まれ、炎とともに消えた。軍勢を残し。

アイコとアニナは顔を見合させた。周囲には犬の頭の怪人が數十体。悪魔はアニナが牙を持っていると言つた。だが、そんなことは後回しだ。どうやってこの場を切り抜ける？

アニナは思つた。こいつらは弾を避けるらしい。けれどそれは今まで相手にしてきたバンパイアも同じ。自分には弾を避ける敵のアクションが見える。避けた先を狙つて撃つてやる。

「離れないで」アイコに言つた。頬が染まり、目がつりあがる。

こんな世界の果ての国の何処とも知れぬ片田舎で……。母国語で呴いた。

処女のまま死んでたまるかっ。吐き捨てた。

撃つた。両腕を交差させ狙い定めて。ほとんど同時に発射された一発の銃弾の一発目を獣が避け、その避けた頭に一発目が命中した。もんどうりうつて倒れる獣。倒れたときには人間の姿に戻つていた。襲い掛かつてくる獣を立て続けに撃つ。面白いように命中した。次々と地に転がる獣。

「凄い……」アイコは感心した。しかし感心してばかりもいられない。自分も何かしなきや。

渡されていしたショットガンを撃つた。銃を撃つのははじめてではない。アメリカで何度もピストルを撃つた。しかし反動はその比ではない。めげじと立て続けに撃つたが、いつもに当たらない。

「駄目だわ」

「そのまま撃ち続けて。こつちに余裕があるときはわたしが拾うわ」

アニナの言葉に、要領を得ないままもショットガンを放つアイコ。

アイコの銃弾を避けた獣の頭にアニナの放つた銃弾が命中した。なるほど。そういうことか。アニナが横目で小さく笑みを見せた。余裕があるなあ。この状況で。アイコは感心すると同時に少し落

ち着いた。落ち着いてみれば、自分がどれほどパーくつていたかわかつた。

しかし冷静に見ても獣の数が多い。徐々に間合いを詰められる。躍りかかってきた敵の顎を蹴り上げて銃弾叩き込むアナ。既にスプリングフィールドXDは空だ。ステアーティムに持ち替えている。二体の獣の下をかいくぐりながら上にめくら撃ち。弾は喉から入つて頭蓋を碎いて抜けた。周囲に転がる人間の亡骸。踏み越えながら四方の獣を撃ち続ける。

今ならいけそうだ。アイコは咄嗟に思った。

車を取りにいける。彼女と車の間に獣はいない。駆け出した。一匹の獣が横から襲いかかってきた。鋭い牙を避け地面に転がる。転がりながら銃口を敵に押し当て撃つた。倒れた獣の下敷きになつた。いや、もう既に人間の姿だ。半狂乱になつて死体を押しどけ跳ね上がるが、ようやく車の中に飛び込んだ。差しつぱなしのキーをまわす。エンジンがかかつた。焦っている。ギアをローに入れるとエンストした。唇を噛み、再び試みる。今度は大丈夫だ。彼女はアナの姿を捜した。獣がかたまつてている。あそこか。手遅れなの？  
かたまつている獣の合間をすり抜けるようにしてアナが姿をあらわした。勿論、その引き金は引きっぱなし。TMPは火を噴きつ放し。

アイコはアクセルを思い切り踏み込み、獣の群れに突つ込んだ。人を轢くのはこんな感触なのかと思った。八匹くらいぶち当てた。けれど車に撥ねられるくらいでは致命傷とならないらしい。ボンネットの上にのぼってきた。振り落とそうとノーズを左右に振つた。倒れている人間に乗り上げた。車は四駆だ。難なく乗り越えたが、嫌な感触がボディ下から伝わってくる。ボンネットの獣、ドアに張り付いている獣、撃ち倒して、アナが躍りこむように乗り込んだ。「オーケイ、ゴー」とだけ言つた。アイコはアクセルをめいっぱい踏み込んだ。



ミキは、とりあえず一番いいワンピースを着て、待ち合わせ場所へ向かつた。何故一番いいワンピースを選んだのかは、自分でもわからない。十分も早く待ち合わせ場所に着いた。沢山の人がまわりにいる。そこは待ち合わせ場所のメッカのひとつ。こんな状況下でも、いや、だからこそかもしれない。人々は恋人と待ち合わせ、大切な時間を過ごす。

彼は自分に気付いてくれるだろうか。彼とはBISと名乗る男。アメリカのスパイダーマンのレア本を持つて現れると言っていた。そんなものの持ち歩く人はいないだろうから、すぐわかるはず。自分のことは、ワンピースの上に革ジャンをはおつしていくと伝えてある。一人の男が現れてすぐにわかった。手にはスパイダーマンのコミック。八十年代ならこんな格好の男がゴロゴロいただろうか。オリーブ色のMA-1、白いTシャツにジーンズ。ごついブーツを履いている。茶髪の長い髪を後ろで束ねている。鋭い眉に鷹に似た眼。風貌精悍。背は高く、鍛え抜かれた逞しい体がTシャツの上からでもわかる。

「あなたがBIS?」

「俺の名は野原祐一、エクソシスト（悪魔祓い師）だ。これを渡しておく。貴橄欖石という石を埋めこんだペンダントだ。悪魔の狂気を防いでくれる。これで精神崩壊からは身を護れる。俺は『死者の石』というのを持っている。同じような効果があるものだ。それから、その革ジャンはいいが、ワンピースは着替えて来い。靴も丈夫なブーツか動きやすいスニーカーに履き替える。俺は修験道で一年、日蓮宗系の変わり者の和尚のしたで一年修業した。俺の法力が悪魔に通じるかどうかわからないが、一緒に九州へ行こう。」

「あ……ありがと……」圧倒された。

「広島市内の総合病院に、川野郁夫という少年が保護されている。

彼に同行してもらう。君のいとこ『エレボス』と一緒にいたらしく

「そ、その人も一緒にやってくれるの？」

「B.I.S」と野原祐一はにやりと笑つて言つた。

「連絡など取れるわけがない。病院に忍び込みそりつて行く。勿論、本人の意思を尊重するが」

「とりあえず、銃が効くことがわかつただけでも収穫だわ」オートマティックに弾倉を装填しながらアニナ。

疾走する車の中。既に獣はふりきつた。

「バンパイアでさえ銃弾の効かない奴がいる。悪魔だからさうに上を行くかと思つていたけれど……」

「兵隊だつたから、かも知れない。結論を出すには早計よ」ようやく冷静になつたアイコ。

「かもね。……だとしたらわたし達にはお手上げよ。はやくエレボスを見つけて助けてもらわなきや」冗談めいた口調でアニナが言い、「初戦は敗退だつたわ」と肩をすくめた。

アイコは至極真面目な口調で前方を睨み、

「セレは、あなたが牙を持つていてと言つていた」と言つた。

それを聞いてアニナも口ごもる。

「抽象的な意味でかしら？」思い当たるものはまったくないのだ。「とにかく、やるわ。わたし、もう決めたの」断固とした口調でアイコが言つた。

「オル・ヴァブを召還するわ」

「え！ オル・ヴァブを召還するの！？ 本気？」

「このステージにおいてのみ、わたし達は悪魔より優位に立てる。そうでない場合は追い立てられ殺される対象に過ぎない。だから、先手を打つてできるだけ情報を集めておくの。それも大ボスのね。言つとくけど、これも賭けよ」

賭け、と言つた意味は、大ボスをうまくコントロールできるかどうか、といったところだろうか。

「この辺が丁度良さそう」アイコは車を停めた。

そこはどう見ても低所得者向けの老朽化した住宅地。平屋の長屋が軒を連ねている。家屋と家屋の間に広いスペースがあり寂しい公園がある。その公園の真ん中にアイコはスプレー缶で円を書いた。

「オル・ヴァブを呼ぶ召還円を知らないから、凡庸な円を書くわ。つづりは〇一一・B a b u u でいいはず。だけど、記号と数字がわからない」

アイコは魔法円の中心にペンタグラム五芒星を書き込み、円の内側に独特的の書体で悪魔の名を書いた。

「強みは正しい発音だけはわかっていることかしら」それはオノボウスから得ている。オル・ヴァブ。ヴァブの前に小さくゼ音かズ音が入る。オル・ズヴァブ。オル・ゼヴァブ。名前があつていれば悪魔は現れるはず。後はこの魔法円が悪魔を有効に封じることを祈るだけだ。

うつろな目をしたルナティックを一人連れてきて円の中に立たせた。

「Athah gabor leolam - Adonai  
呪文に続け、

「オル・ゼヴァブ」名前を叫んだ。

一発目から反応があつた。召還円の中を小さな黒い飛行体がブンブン渦巻いて飛んでいる。

「オル・ゼヴァブ」再び叫んだ。飛行体の数が増えた。よく見ればそれは太った蠅だ。普通の蠅の一倍くらいある。召還円から出るこではない。召還円の中をぐるぐる回って飛んでいる。

「オル・ゼヴァブ」次の瞬間、大地が揺れた。

召還円の中に巨大な真っ黒い物体がある。いや、違う。黒いのは全て蠅だ。もぞもぞ動き回っている。物体が身動きした。とたん、いつせいに蠅は飛び立ち、円の中ぐるぐる渦を巻いて飛びはじめた。蠅が邪魔でその者の姿がよく見えない。身長は一メートルくらい。でっぷり太つていて極端に短い足。さらに目を凝らしてみれば、皮

膚の下は無数の何かが蠢いている。その何か。すぐにわかった。熟れたいちぢくのようくに破れた皮膚から、蛆が大量にこぼれているのだ。頭の一部が欠損し中の脳とのたうつウジが見える。鼻と口からもウジがこぼれている。灰色の巨大な眼球の奥にも蠢く蛆がのぞく。

「汝、オル・ゼヴァブか？」

巨人は質問には答えず逆に問つた。

「我を呼びし魔女は貴様か」

「然り。我はいかなる契約にも応じぬものなり。いかなる代償も払うつもりはない。そのうえで汝に聞きたいことあり。我が求めに応じ問い合わせよ」

がごう、ごふ、ごふ。腹を揺らして悪魔は嘲笑つた。

「我に聞きたいことがあるとはこれは笑殺なり。我に何を聞く」  
聞くだけ無駄だといいたいのか？ 戸惑う。この悪魔のこの対応はどう判断してよいかわからない。威圧感がないのだ。これまで見てきた悪魔に比べ。勿論、誠実さなど感じないが。どこか超然としている。地上にこれほどの災禍をもたらした者だといつに、面と向かえば（気持ち悪さはともかく）害意を感じない。

「まず汝に問う。セレの言う牙とは何のことであるか」

答えが得られるとは思つていなかつた。が、次の瞬間、悪魔は思ひもよらぬ秘密を明かした。

「セレが何を言つたか知らぬが、我らにとつて牙といえばサムヤサの牙だ」

「サムヤサの牙つ！？」

「ごう、ごふ、ごふ。笑い言つた。『汝知らぬとみえる』

牙！？ アーナは閃いた。もしや。あの彫刻には牙がついていた。まさかアレがサムヤサのモノだったの？？ でも小さすぎる。だけど。アーナはカバンの中から『日子の瓊矛』を持ち出した。アイコに手配せする。アイコも彼女の推測に吃驚している。が、悪魔との交渉中に動搖は表せない。

「サムヤサの牙とはアレであるか？」 日子の瓊矛を差し聞いた。

「然り」そう言つてまた笑つた。

「どうやれば使えるのだ？」

さらに笑い言つた。

「持ち主ですらわからぬものを、何故俺が知りえようか」

使い方はわからない。だが、この瞬間より以降、アイコはアニナ＝サムヤサだと固く信じるようになる。エレボスがそうであるように。アニナはサムヤサのコピーに近い存在。だから、その娘であるラ・プティエリ・ア・ナネが夢に現れる。

「汝の災禍で地上は荒れ、人は少なくなつた。汝この地球全てに災いをもたらすつもりか」

「違うな。魔女よ。人間がいなくなつてしまえば困るのは我らだ。ゆえに我が災禍はあと四十八日の間続き、それ以降、わたしは眠ることとなる」

「四十八日……」

灰色のぎょろ田を動かし悪魔は続けた。

「だが、バティンらに気をつける。奴らが画策していることは宇宙を覆す災いだ。奴らの技に比すれば我が災禍など甘いものだ。気をつける。バティンが封印を解こうとしている。おそらくアスルーが護つている」

しばらく押し黙つたままのアイコ。頭の中で様々な符号がはまつたり外れたりを繰り返していて、言葉が出てこない。

「何故そこまで教えてくれるの」混乱させるための嘘の場合もある。

「私は孤独の王。バティンらの小賢しい遊戯に付き合ひ気はない」

そう。そうね。あなたは孤独の王にして、……蠅の王。

「聞きたいことは済んだか？ 魔女よ」

灰色の濁つた目でアイコを見る悪魔。アイコは大きくうなずき礼を言つた。

「充分である。礼を言ひ。オル・ゼヴァブ。もはや我が望みは叶つた。元いた場所へ戻るがよい。Athah gabor leol am-Adonai」

悪魔が蛆だらけの口でにやりと笑った。

「私は孤独の王だ。我が則に従い我是生きる。千年に一度蘇り。それもあと四十八日となつた。魔女よ。我を恨み恐れるか」

「いいえ。礼を言つわ。もっと深刻な脅威が迫つてきていることを教えてくれて」

悪魔は地を搖るがし笑い、ゆつくりと大地の中へ墮ちていった。不思議なことに描いていた魔法円が消え、奈落の底のような穴が口を開けている。

完全に姿が消えると公園は元に戻つた。地面に書いた魔法円も。「礼を言つ。蠅の王、……ベルゼブブ」アイコは小さな声で呟いた。

ミキはカーキ色の厚手の面素材のカッターシャツを着た。そして少し緩めのジーンズをはき、革ジャンをはおつた。貰つた貴重な石のペンダントをシャツの内側にかけた。

置手紙を残すか、随分悩み、何も残さず部屋を出た。『九州へ行く』などと残して行けば、大阪あたりで警察に保護されそうだ。玄関を出ようとしたとき、奥から母親が

「こんな時間に何処に行くの?」と声をかけた。

「ジュースを買いに行く」と言つて出た。それが最後の会話。マンションの外に出た彼女は、ふりかえり自分の家を見上げた。もう、帰つてこられないかも知れない。……だけど、後悔しない。待つっていた車に乗り込んだ。白いランドクルーザー七〇。

雪解けの街。どこもかしこも濡れている。動くものは何も無い。ひとりの少年以外。

その少年は工レボスと呼ばれている。狼の目を持つ少年。自分が日本中で噂になっていることなど知らない。日本ばかりでなく韓国でも。しかし、知つたところで気にもとめないだろう。

眸に強い光が宿つている。炯眼鋭く、ただ前を見据え歩を進める。ぬかるむ足元も気にせず。あれから、三体のデモニアックと遭遇した。ウラク、サバック、ビフロンス。ウラクとは二度目である。ルナティックは雪の下だ。悪魔は軍勢を呼べなかつた。いざれも一撃で粉碎した。容易かつた。しかし、憎むべきバティンとはいまだ会いまみえず、また、宿敵アスルーとも然り。

まったく音のない街。溶けた雪のなかから大量に現れたものがある。凍死者である。何百人もいる。北部九州全土では何十万という数字になるのだろう。

今、その一人が微かに動いたような気がして、彼は歩を止めた。

しかし、何事も起こらない。ただ、座り込んだ姿勢の自身の重みで動いただけだ。気にせず再び歩き始める。だが、感じている。尋常でない殺気を。

やがて、前方に、紫色に顔を腫らした凍死者が立ち上がり歩いてくるさまを見て、彼は刀を抜いた。

「古代シリアで蠅の神が崇拜されていた。多分、オル・ゼヴァブ。人々はその災いを忘れず畏れ生贊をささげていた。時が経ち中世になつて、蠅の神はベルゼブブという名を与えられた。すごいわ。ベルゼブブは実在の悪魔だった」疾走する車の中、ハンドルを握りながらひとりで悦に入つていてアイコ。

「けれどこの災いは、あと四十八日で終わる。それよりもっと恐ろしい災いを『バティンらが画策している』。何かをバティンが中心になつてやるうとしている。本当の脅威。それが『眩く輝くもの』。オル・ゼヴァブの話とエト・エウトクタの内容が一致しているの。思い出して。エト・エウトクタのリストでバティンは『眩く輝くもの創造に携わった』とあるわ。そしてその『眩く輝くもの』はラ・ブティエリ・ア・ナネによつて封印された、とある。そして、オル・ゼヴァブは、その『封印をバティンが解こうとしている』と言つた。その災いは『宇宙を覆すもの』。いつたい、何がどうなるのかはさっぱりだけど、それを護つているのがアスルー。ここも共通しているの。『アスルーが護つている』とオル・ゼヴァブは言つた。エト・エウトクタでアスルーは『眩く輝くものを守護する』とある。そしてアスルーはエレボスにしか倒せない。どう? つながつたわ。だから、ラ・ブティエリ・ア・ナネはあなたの夢の中でエレボスを搜索と言つたの。違う?」アイコは饒舌だ。

「アスルーをエレボスに倒してもらい、バティンがやるうとしていることを止めなければならない」

「アニナは無言だ。自説をさらに展開するアイコ。

「間違いくなく、あなたはサムヤサの血を引いている。サムヤサイコ

一  
ル  
な  
い  
し  
れ  
以  
上  
の  
存  
在  
、  
と  
こ  
「  
つ  
」  
と  
、  
「  
反  
論  
を  
許  
せ  
な  
い  
」  
口  
調  
で  
、  
アイ  
コ  
は  
言  
つ  
た。

「わたしは、そんな大それた者じゃない」助手席で、日本のガイドブックを開きながらアーニー。いつも容易く反論した。

「じゃあ何故ラ・ブティエリ・ア・ナネの夢を見るの？ あなたがその血脉だからよ。違う？」

「わからない」肩をすくめて答えるアーニー。

「オノボウスは言つたわ。憶えてる？ エレボスは何処か聞いたとき。『何故、我らが仇敵の邂逅に手を貸さねばならぬ』。仇敵の邂逅よ。邂逅とは少なくとも古い知り合ひが再び出会つことよ。彼らの仇敵、つまりサムヤサとエレボス……」

肩をすくめるばかりのアーニー。

「田子の瓊矛はどう？ あなたなら使えるはず」

「もつとお手上げ。何をどうすれば『使える』のかさっぱりわから  
ない」

「使おうとしてみたこともないでしょ」

アーニーは少しシムツとしてオートマティックを抜いた。

「こつちのほうがよっぽど確実。何をどうすればさうなるかわかり  
きつてるから」

「現実主義もいいけれど、この先生を残りたいでしょ。それには、  
あなたが田子の瓊矛を使えるかどうかが重要な鍵かもしれないんだ  
から。勿論エレボスが見つかるかどうかも」

車は北へ向かっている。

「『九字』を使えるようになるには、まず、『心』と『言葉』を切り離さなければならない。根源を異にする別のものとして、西へ下る車内で、祐一はミキに法力の説明をしていく。

「もともとまったく何も無い状態で生まれてくるのに、いつの間にか『言葉』は『心』の全てとなっている。試しに、心の中に『あ』の字も浮かべないでいられるか、やってみて『じらん』

そう言われて、素直に試みるミキ。あの字も浮かべなければいいんだわ、あ、駄目。『あの字も浮かべなければいい』と考えている。駄目だわ、あ、『駄目だ』と考えている。ほつとすればいいのかしら。駄目だわ。絶対何か考えてしまう……。

笑みを浮かべ祐一は言った。

「無理だろ？ これが出来れば仏陀になれる。そういうものだ。釈迦の瞑想法は、何も考えない代わりに『マントラ（呪文）』を唱えさせる。取りとめもなく考えているよりマシだからだ。南無阿弥陀仏でも南無妙法蓮華経でもオームナーマシバーヤでもガティガティパーラガティパーラソウガーティボディスヴァーハでもなんでもいいから、心中をその言葉だけにしてしまうんだ。それが出来るようになれば、一段階上の、呼吸に意識を集中させる瞑想法へ移行する。自分の体が呼吸している様をただじっと観察するんだ。話がそれたね。これらは仏陀になるための瞑想法だ。悟りを得るための瞑想法。『九字』を切つて悪魔と対峙するために、僕がはじめにやったのはジベリッシュュという瞑想法だ。これは簡単。自分の中にある感情やたまっている物全てを、『自分が知らない言葉』で吐き出しながら。例えば、僕はフランス語を知らないけど、耳にしたことはある。で、全然フランス語になつてなくていいから、フランス語のつもりで喋りまくる。『でたらめな言葉』で自分のなかにあるもの全てを吐き出す。約一十分間。これが、心と、言葉を、ぐちゃぐちゃに乖

離させてくれる。これまで单一だった心の言語を粉碎してくれる。心はすぐに言葉に頼るつとする、それにストップをかける。約二十分間喋りまくった後は、床にうつぶせ、大地に溶け込むイメージで穏やかに呼吸に集中する。これが、ヒーリング効果が高い。この瞑想法は心と言葉を切り離すだけじゃなくて、浄化作用も高いんだ。これがはじめの一歩。その後、もっと高度でデリケートな瞑想法をいくつかクリアして、『言葉のない心』を得ることが出来る。そうしてはじめて『九字』を習得する準備が出来るんだ。いつたん『言葉を失った心』に九つの文字を刻み込む。それが『臨』『兵』『鬪』『者』『眞』『陳』『列』『在』『前』。これが悪魔から術者を護る護身法であるとともに悪魔を調伏させると言つ『九字』だ

「それで本当に悪魔が倒せるの？」

「さあ、どうだろう」笑みを見せ祐一は続けた。

「祈祷で悪魔憑きを退治するときなんかは効果あつたよ。だいたいうちの和尚はそれが専門だ。ただ、九州にいるデモニアックにここまで効果があるかは疑問だ。でも大丈夫だ。もっと強力な『九字』もある。『九字』はひとつではない。まったく無力だ、ということはあり得ない。それに」と、意味ありげに笑うと、シートの横からショットガンを取り出して見せた。

「三年前、バンパイア退治に来た外国人少女から貰つたものだ。弾を避けられたらお手上げだけど。射撃の練習は充分すぎるほどしてきた。銃弾は散弾だけでなく熊撃ち用のスラッシュ弾も用意してある。我流だが武術も鍛えてきた。蹴り技を中心に。山中独りで。全ては、エクソシストとして悪魔と対峙するためには」

ミキは、なんだか例えようのない安心感に包まれた。耀を助けたい一心だったが、冷静に考えれば九州行きなど、とても恐ろしくて出来ないことだった。けれど、この人と一緒なら大丈夫かもしれない。はじめの印象と違い、とても優しい人だとわかつたし。後はラジオを耀クンが聞いてくれれば。

ミキは話を変えた。

「祐一さんはどうして九州へ行くの？」修行？ それともその成果を試したいから？

野原祐一は少し遠い目をして自嘲気味に笑った。

「三年前にあつた少女。彼女が九州にいるんじゃないかと思つて。彼女はローマ法王庁の依頼で動いているバンパイア・レイヤーだ。この状況下の九州に入っている可能性は高い」

「祐一さんはその人のこと……」「ミキの言葉をさえぎつて、祐一は早口で言った。

「一匹狼の仕事人で、とにかくやることなすことハチャメチャな奴なんだ。たつた一人で悪魔崇拜者の一派を壊滅させたり、暴力団を壊滅させたり。勿論俺も一緒にいたけれど、その頃の俺なんて、何の役にも立たないからね。最後のバンパイアとの一騎打ちも、倉庫中火の海の中だ。銃弾の効かない敵を、炸裂弾で見事討ち取つたよ。その時バンパイアから奪い取つたのが、今俺のつけている『死者の石』。本来はバンパイアが自身の能力を高めるため使うものだけど、まったく逆に、導師がつけてもその法力を高めてくれる。おまけに悪魔のもたらす狂気や精神崩壊から身を護ってくれる。エクソシスト（悪魔祓い師）になると言つたら、くれたんだ」

祐一は、コンビニの駐車場に車を停めた。

「冷たい飲み物とか、飲みたかつたら今のうちに飲んでおくとい。アイスクリームとかも。向こうじゃ絶対手に入らないし、意外と無いと欲しいからな」

ミキは素直にうなずいた。確かにその通りだと思った。

ところで今現在、彼女が一番困つてることは、この車の乗り降りだつた。70系のランクルで車高を上げている。勿論タラップはついているが、乗るときはまだしも、降りるときはまさに恐怖だつた。彼女にとつては、「えいっ」と言つても「やつ」と言つても、言つたからといって降りられるものではない。

川野郁夫は普通病棟に移つた。明日から警察署で事情聴取がある。どういう段取りになるのか知らない。知つたこつちやない。警察署で一日過ごし夜になれば病院に帰つてくるのか、それとも、そのまま留置所で寝泊りすることになるのか。

事情聴取なんて聞こえはいいが、どうせ尋問、取調べとなんら変わらないだろう。ひょっとしたら十字架を突きつけて正体を現せ！　！　とか、言われるかも知れない。だとしたらちょっと変わつてらあ。

ともあれ、自由に病院内をうろつけるのも今日が最後かもな。そういう思い、ぶらぶら病棟内を散歩してみた。院内散歩の許可は得てある。まあ、許可なくつたつて、じつとしちゃいないが。ところが病院内なんて、散歩してみて全然楽しいものではない。ああ、床屋があるなあ、へえ、珍しい、その程度である。幾分華やかで心和むのは小児科病棟である。壁の絵、折り紙、鮮やかな色彩がその場所にだけある。彼は足を止めかけたが、そこに居る子供達を見て、やりきれなさを感じ足早に去つた。

最後に彼がたどり着いたのはティケアルームだつた。なんだ？　この爺婆の大群は？　とも思つたが、喫茶コーナーもあつた。彼は珈琲を注文し、久しぶりにその香りを楽しんだ。香りだけで目が回りそうだった。珈琲でぶつ飛ぶなんてあり得ねえ。一人で笑つた。目の端に見えた。部屋の隅のパソコンが。誰が使つてもいいみたいだ。

彼は珈琲片手にそのパソコンを起動した。

何を見てみよう。愚問だ。勿論、九州だ。デモニアックだ。被災地の現状だ。情報に飢えていた。が、一分と経たぬうちに驚愕することとなる。

検索して引っ張ってきた一覧のそこかしこに、『エレボス』の文字があるので。

彼はキーワードを『エレボス』に換え検索した。一万件以上のヒット。ありとあらゆる掲示板がエレボスの噂であふれていた。『デモニアックを木つ端微塵に斬り吹つ飛ばす。その太刀筋に沿いコンクリが砕け散る。身長一メートル以上……？？ 腕がゴムのように伸びる……？？

「なんだよ、コレ。『デマばかりだな』笑うような内容のもののが多かつたが。

あいつ、スーパーヒーローだぜ。なんとなく鼻が高かつた。気分がいい。

上機嫌で自分の病室に戻ると来客がいた。ふたり。

「病院から患者を連れ出すには、夜中より日中昼夜中のほうがいい。目撃されることが問題でなければ」男が言った。

「お願い。わたし達と一緒に九州へ行つて」手を合わせて少女が言った。

「俺たちはこれからエレボスを救出に行く。君の案内が必要だ」はじめ耳を疑つた。約一秒間、川野少年の思考は停止し、その後思つたことは以下だつた。

「げつ！？ 九州へ戻れってか？ どれだけ苦労して出てきたと思つてンだ？ 第一お前は何者だ？」

「あんたはいつたい誰なんだ」

男は余裕の笑みを見せ言った。

「エクソシストだ」その返答に驚く相手のリアクションを楽しんでいるように見える。

事実、川野郁夫は驚いた。エクソシストだと？ 悪魔祓い師といふことか。だつたら、こつちの女の子は？

川野の視線に、照れたように瞳をふせその子は言った。

「じょ……女子高生……」

ある意味、それも驚きだつた。

それはともかく。

「お前ら、勘違いしてるぞ。確かに俺はエレボス……ホンダのことだろ?……奴と一緒にたけど、中津あたりで別れてそれっきりだ。今、あいつが何処にいるかなんて知らない」

「それでもいいんだ」祐二は笑みを浮かべた。

「君の土地勘、九州から生き延びてきたサバイバル能力、俺たちにとつて欲しい戦力だ。かいがぶりでなく、俺は、君の力を高く評価する。利巧で精神力が強く判断力あり危険を避ける勘がなければ、生き延びられない筈だ」

川野郁夫はしばらく答えなかつた。

彼は考えていた。これからはじまる警察の取調べ。あるかもしない留置所生活。最悪の予想は、デモニアックの烙印を押され……檻の中か、はたまた火あぶりの刑か、予測のつかない最後。それに対しても、ここに提案されているのは、生きるか死ぬかの決死行、精神崩壊するか死ぬかの二者択一。

「かつたりいよ」彼は答えた。

「ただ条件がある。マシな服を買ってくれ」手持ちの服はアウトドアショップで手に入れたモノばかりで、彼の好みとはあわなかつた。

北へ向かう車の中、驚愕のラジオ放送を聴いた。アイコとアーナだ。

はじめ、ハンドルを握りながらアイコがチューニングしていた。FMは全滅。AMで愛媛の放送を聴いていたのだが受信状態が悪くなつて。皮肉なことによく入る電波は韓国からのものばかりだつた。明瞭に聞こえる放送を無視してチューニングを続けるアイコに、「今のは? よく聞こえたじゃないか」とアーナが言つたが、コリアからの電波だと説明すると納得した。

が、突然、そのコリアの電波が、ハッキリした日本語を発信したのだ。

「わたしは、コリアのミランスー。三十分おきに、このメッセージ

を流しています。エレボス、ことホンダヨウ。あなたのいとこのミキが、あなたを救出に向かっています。この放送を聴いたら、関門海峡へ、向かってください。関門ブリッジであなたと落ち合つたりです。繰り返します。わたしはコリアのミヨンスー。エレボス。あなたの、いとこの、ミキの、友人です。関門ブリッジへ向かってください……」

エレボスが見つかるかも知れない……いや、見つかったも同然。それより、その存在を確かめられた!! アイコは口早に英訳して聞かせた。アニナも驚いた。思いは同じ。

まっすぐ海峡へ向かいたい。現在地は阿蘇。地図を見た。日田を抜け小石原を通って北九州へ入る。一直線に北へ。迷うことなくコースは決まった。目指すは海峡だ。

自分のガイドブックを見ていたアニナが言った。

「小石原は焼き物で有名らしいが、田田の奥地に子鹿田焼き（おんた）というのがあるそうだな」

どうしてそんなことに詳しいのよ? そのガイドブックは、日本人でさえ普通に知らないわ。そんなこと。

「立ち寄る暇ないわよ」釘を刺した。

「いや、ちょっと興味があつただけだ……」若干残念そうな答えが返ってきた。

だぼだぼのラガーシャツと、だぼだぼのジーンズに着替えて、川野郁夫は試着室から出てきた。ラガーシャツはミキが見立ててくれたものだ。広島郊外の大型衣料品店。それから着替え用に何点か揃え、同じく商品のダウンジャケットをはおり、そのままレジへ行って「コレください」と言った。店員は困った末、客の首根っこ押さえつけるようにしてタグをスキヤンした。約束どおり、野原祐二が精算した。勿論、払えと言われても川野には一円の持ち合せもない。

店の外に出ると、祐二はペンダントを彼にわたし言つた。

「これを首にかけているといい。貴橄欖石といつて悪魔のもたらす狂氣や精神崩壊から君を護つてくれる石だ」

「へえ。それはありがたい……けど、ほんとに効果あんの?」もし そ う な ら 、 び く つ か ず に 堂 々 と 九 州 入 り で き る が。

「うちの和尚の保証付きだ」信用度の計りようのない答えが返つて き た。

うん、まあ、しょうがない。

ランクルの後席に乗り込んだ。タグを襟や腰につけたままだ。そ のうち取ればいい。面倒くさいし。なにしろ九州へ行くつて時にこ んなもの気にしてられない。

けれど着替え用に買った服のタグはむしりとつている。

そんな川野の様子にミキは笑いながらはさみを取り出した。

「ちょっとじつとしてて」と言つと、襟のタグをはさみで切り取つ た。

「あ、サンキュー……」顔が近い。いい匂いがする。川野は照れ隠し に、ことさら無愛想に返事をした。実は東京の女子高生というも のにはじめて遭遇して困惑している。じつちは田舎のヤンキーだ。ど う考えても引け目を感じる。

「運転席に乗り込んだ祐一が言った。

「これから先は、高速を使わずに一般道で行く。封鎖されている道もある。迂回しながら西へ向かう。橋の直前で高速へ上がる。その辺はもう無人の筈だ」

アイコとアーナのふたりは地図を見ている。

「これはアレだわね」とアイコ。

「あなたの言つた子鹿田を抜けたほうが速いかも」

このまま進めば日田に着く。日田インター・エンジからハイウェイを使えばどうだ? とアーナは言つたが、それでは大きく鳥栖ジャンクションから福岡へと迂回して北九州入りすることになる。そのうえ、放置車両の状況も予測がつかない。

地図を見れば日田ICからさほど離れてないところに、小野川という川がある。この川沿いに北上すれば子鹿田がある。十軒ほどの窯元があるだけの寒村である。道はそこで途絶えているが、地図には林道が載っている。その林道の先には、日田彦山線線路沿いの県道五十一号線がある。後は線路に沿つてまつすぐ北上すれば添田を経て田川へ。田川まで出れば北九州には着いたも同然。

道は決まった。

アーナは心のなかでにんまりとした。三年前、日本に来て以来、日本は好きな国のひとつ。故国では自称日本通である。日本の焼き物の特に「MINGEI（民藝）」と呼ばれるものに非常に興味を引かれている。海外でのほうが、人気があるのではないかと思われる。子鹿田はその「MINGEI」の中でも王様的な存在である。

一方、アイコは、助手席の女がそんな呑気モードに入つているとはつゆ知らず、エト・エウトクタの推理に没頭していた。ハンドルを握りながら。

オル・ゼヴァブ召還は彼女にとつて事件だった。核心にドンとつき迫れた。

エト・エウトクタの世界、それが何処かはまだわからない。地球

から程よい近さの惑星か、考へてもその程度の答えしか出でこない。だが、サムヤサを筆頭に人類は、いや、この場合は異星人だが、この地球上へ降り立つた。それは確かと言つていいいだろう。そして先住民である人類に様々な科学をもたらした。おそらく地上の女と交わり子供をつくつたことも事実だろう。そうして、その子供らが殺されてしまつた事件もあつた筈。だが、現在もその血の系譜は息づいている。エレボスがそうだ。アナも間違いなくサムヤサだ。本人に自覚がないだけだ。『田子の瓊矛』は間違いなくア・ナネからアナに託されたものだ。それが『サムヤサの牙』であるならば、彼女はその血の継承者である。

だが今はまだ、その使い方もわからない。

対して悪魔側はどうだ。何処まで推理できる？ 地上にある悪魔は十八霊。奴らの意識はコンピュータのローカルエリアネットワーク的なつながりを持ち、他の単体のデータを任意に参照できる。データとは、つまり知識、経験、情報などだ。故にテレパシーで会話をなどしなくても知りたいことを知れる。

だが、共通した目的に向かつて動いている様子はない。今まで会つたオノボウス、セレ、オル・ゼヴァブ、どれも個性的な悪魔だが、統率が取れている印象はない。どの個体も他の個体のことには無関心。地球上に来て勝手気ままにやつっている印象を受けた。

だが、オル・ゼヴァブが教えてくれたように、バティンという悪魔の一派だけは別だと考えたほうがいい。『眩く輝くもの』の封印を解こうとしているらしい。それは絶対阻止すべき事柄に属するようだ。アスルーは、バティンの傘下なのか、それとも自らの意思なのか、そこは知れぬが『眩く輝くもの』を守護している。アスルーが護つっている以上、自分達には手が出せないと考えたほうがいい。エレボス抜きでは無理だ。さらに。

エレボスがアスルーを排除して、バティンらも倒せたとしても、『眩く輝くもの』をどう処理すればいいのかは、眞田見当もつかない。ア・ナネもヒントすら与えてない。そもそも彼女はどうやって

封印したのか。彼女にしか封印できないのであれば、わたし達にはお手上げだ。それを聞く相手は……。ア・ナネ本人が一番いい。が、召還できない。アニナが夢を見るまで待たなければいけない。そして夢を見たからといって情報が得られるとは考え辛い。それを聞く相手は、……エリゴール。彼しかいない。

うん。頭のなかが随分整理できた。とにかく今はエレボスと会う。そのことだけを考えて北上しよう。このチャンスを逃したら、もう一度と捜し出せないかもしないのだから。

小川せせらぐ山間の村。わずか十数棟の古い民家。時折響き渡る杵が土をつく音。川の流れを利用して、土をつく大きな杵が沢山あるのだ。マニアックな観光地でもあつたのだろう。だが、今は誰もいない。無人の村。

あまりにものどかなその風景に、アイコも思わず車を止めた。子鹿田である。

つくりかけの陶器が庭先に並べて干してある。が、それも、人がいなくなつて時間が経つたことを示していく、幾つかは地面に落ちている。

どの窯元の軒先にも安普請の展示場があり、素朴で野太い陶器が山積みになっている。

もう、かなり長距離走つたので、ここでしばらく休憩することにして、ふたりは車外に出た。

これが『ONTA』か。素つ氣ないふりを装いながらも、アーナの目が輝いている。まるでアフリカの器みたいだ。いや、勿論両者は明らかに違う。だが、器からただようイメージがアフリカの大地を思い起こさせた。素敵、この中皿は我が家で使ってみたい。アナが古城のインテリアと器をイメージで重ね合わせていたとき、アイコは心安らぐ思いで川面を眺めていた。誰もいなくなつても土をつく巨大な杵。変わらぬ川の流れ。もし、観光で来たのであれば、本当に心癒される場所だ。こんな、無人の里でなく、人の姿も温もりもあるのなら。

だが、休息は長くは続かなかつた。

突然の地を搖るがす大音響。一軒の民家の庭先に赤い炎の大火球。何も考える必要はない。アイコは走つて車に飛び込んだ。アーナの姿を捜した。いた。XDピストルを構えている。銃口は出現した悪魔に向けられている。長い髪、輝く鎧、十四枚の翼、煌く巨大な

太刀、セレに。

なにやつてんの。早く逃げなさいよ。FUCK！　車で突っ込んだら悪魔はどうするかしら。なんだか、あの剣なら車ごと真っ二つにされそう。

一方、悪魔と対峙したアニナは、必死で次策を考えていた。銃口を敵に向いている。引き金を弾いた場合のコンマ五秒後が見えていた。あの太刀で弾き返される。だが、それは一弾目。一弾目はどうかしら。多分当たる。でも、平氣そう。バンパイアでも銃弾の効かない奴がいた。悪魔ならさらにより、だろ？。銃口向けられて余裕でいられるのがその証拠……。

「ここにいたか。搜したぞ」悪魔がおぞましい笑みとともに言った。「わたし達に何の用？」聞くだけ野暮だわ。

「用？」悪魔は哄笑した。

「死んでもらうことだ」

やつぱりねえ。

アイコの運転する車が突っ込んできた。セレはひらりと舞い上がりかわした。アニナは立て続けに撃つた。予想通り太刀で弾かれる。が、数発当たつた。血が飛沫いた。しかし、何のダメージもなさそうだ。アニナは撃ち続けながら車に飛び乗つた。車は勢いよくバッタして庭先から出た。

悪魔の太刀が一閃した。ボンネットを切り裂かれた。バンパーは奇麗に真っ二つになつた。アイコは急ハンドルをきり、アクセルを目いっぱい踏み込んだ。タイヤが白煙上げた。おかまいなしの急発進。アニナが銃を両手に身を乗り出した。アイコはバックミラーを見たが悪魔の姿は見えない。アニナの狙いを見て、それが後方上空にいることがわかつた。道はジグザグ。すぐに行き止まり。そんな！　おかしいわ。林道があるはず。

資料館らしき建物の駐車場に突っ込んでユーターんした。悪魔が前方上空にある。立て続けに撃つアニナの弾を笑いながら弾き返している。

アイコはパークリングを飛び出した。ハンドルを切る。見つけた、道の先に。林道の入り口。タイヤを泣かせながら林道に突っ込んだ。予想以上に、いや、想像もし得なかつたくらい狭い道だ。車一台通るのがきつぎり。もし放置車両があれば逃げおおせない。いや、ハンドル操作を少しでも誤れば、タイヤを道横に落とし身動き取れなくなる。下にコンクリで舗装なんてしてなきやいいのだ。

森のなかを疾駆するWRX。身を乗り出して銃を乱射するアニナ。からかうように後を追う悪魔。戯れに太刀を一閃する。トランクを切り裂かれた。

くそ。トランクでもルーフでも切り裂けばいいわ。でもエンジンだけは勘弁して頂戴。

タイヤは奇麗に路面をとらえている。道幅ぎりぎりを疾駆する。細かくハンドルをきりギア・チェンジする。後ろのストーカーは、もうアニナに任せた。ただ一秒でも早く走ることだけ考えてハンドルとアクセルを操作した。

アニナはステアーティングサブマシンガンに持ち替えた。彼女のスプリングフィールドXは十五プラス一発入り。十六かける二、撃ちつくした。マガジンを変える暇はない。左手でルーフ内側の取っ手をつかみ、右手でTMPを乱射する。左右に散らし弾幕を張る。しかし、悪魔は見事に避けた。舌打ちする。TMPの性能は申し分ない。オープントボルトでもローラーロッキングでもない、フルロッキング（完全閉鎖式）の心臓は反動も少なく集弾性に優れる。だが、それを超える悪魔の能力。

細かく引き金を切る。指切りして四ないし三弾発射の連続攻撃。手の中で暴れる銃身コントロールし、細かく銃口動かし、頭、肩、腹、足、狙い撃つ。が、悪魔は見事に見切る。

マガジンキヤッチを押した。空のマガジンがするりと抜け落ち路面に当たり、あつと言ひ間に視界から消えた。新しいロングマガジンをグリップにぶち込んだ。

「止めてっ！」アイコに叫んだ。急ブレーキを踏むアイコ。悪魔

との距離が一気に縮まった。いや、目の前だ。腹にフル・オートで叩き込んだ。血飛沫が煙る。悪魔がその太刀振り上げた。

「出してっ！」再び叫ぶ、と同時に首を引っ込めた。急発進する車。太刀が空を斬った。

どうだつ。敵のダメージを計る。「ーん。どうもダメージはなさそうだ。まだ追つてきている。

林道からダンと一般道に出た。県道五十一号線だ。さらにフルスロットルでスピードを上げるWRX。アニナはマガジン入れ替え再び窓から身を乗り出した。後方を向く。悪魔の姿が遠く見える。追つてくる様子はない。さらに遠くなり、カーブを曲がると見えなくなつた。もう、追つてこないのか。理由はわからないが。

「なんだろう。もう追つてこないのか……」車内に身を戻しアニナは言った。

「何故かしら……」アイコも訝しげ。

「今のは軽い挨拶だつたとか」

「随分しつこい性格ね。ナンパし慣れてないんだわ。きっと

「気をつけよう。この先でも現れるかもしれない」

アニナの言葉に、そうねと同意し、多分、とアイコは言った。

「多分……。あなたが牙を使えるかどうか、試しに来たのよ」その推測で間違いなさそうだと、アイコは思った。

「そつか……」アニナは複雑な表情で返事をした。

いたるところに、自衛官の遺体が横たわっている。なるほど。と川野は思った。あの時は雪の下でわからなかつたが、こうなつていたのか。

海峡山口県側、全滅した自衛隊の部隊である。

祐二は土嚢の前で、これを排除するか、それともランクルで乗り越えるか、思案しているようだ。

ミキはといえば、土嚢の向こう側で、橋をバックに携帯で写真を撮っている。

いまだに携帯持つていたのか。川野は呆れた。行動はともかく、既に携帯の使えないエリアだ。災禍から一ヶ月以上経つている。携帯が何故復旧しないのか理由はわからない。携帯電波の周波数は0・8GHzから2・0GHz。その電波を妨害する何かがあるのか。それが災禍の圏内と一致するのか、わからない。

川野は道に転がっていた八九式小銃を手に取つた。これは必要だ。九州へ入るなら、野原祐二もショットガンを持つていい。俺も何か持つていたほうがいい。以前持つっていた豊田の拳銃は、保護されたとき押収されたようだ。なにしろその時の記憶がない。

倒れている自衛官の荷物をあさり、集められるだけマガジンを始めた。これだけあれば戦争だってできる。

八九式小銃は日本で製造されている、いわゆるアサルト・ライフルだ。アサルト・ライフルとは、邦訳すると突撃銃である。名付け親はヒトラーだ。第二次大戦中、自国で開発された銃にスチュームゲヴェアーと名付けた。英訳するとアサルト・ライフル。歩兵が持ち、動く標的を狙い、セミ・オートとフル・オートの切り替えができるライフル。それがアサルト・ライフルである。

スリング（負い紐）を肩にかけた。セレクターレバーを見てみる。『ア』と『レ』と『3』と『タ』。今は『ア』になつている。

かなりの衝撃を覚悟して、道の彼方めがけて引き金を引いてみた。引き金がびくともしない。何も起こらない。『ア』は、ひょっとして安全装置の『ア』かもしけない。まさか、と思いつつ。

その次の『レ』にあわせて再び試みた。轟音轟き銃口が立て続けに火を噴いた。銃弾はあさつての方角に飛んでゆく。衝撃に驚きあわてて引き金から指を離した。

『レ』はフル・オートだ。なるほど。……連射の『レ』??

じゃあ、『3』は? 引き金を引いた。銃弾が三発だけ飛び出した。三点バーストだ。フル・オートはすぐにマガジンが空になる。あまり実用的じゃない。使うならセミ・オートか、この三点バーストだ。

『タ』はもうわかる。単射の『タ』だ。思つたとおり間違いかつた。

川野はセレクターをセミ・オートにあわせ、何発も撃つてみた。なかなか厄介な代物だ。思うところに飛ばない。衝撃も激しい。銃自体が壊れちゃうんじゃないかと思うくらい。しかし、三十分も経つ頃にはなんとかコツをつかんだというよりも、銃というものに多少慣れた。

そばで見ていたミキに持たせてみた。彼女も覚えておいたほうがいいと思つたから。しかし、引き金を引いたまま反動で仰向けに倒れた。撃つ前にしつかり握つていろ、と言つたから銃自体はしつかり握つていたが、その代わり倒れてしまつたようだ。これはあきらめるほかない。

「これを乗り越えられるとしたら、ジープかジムニーだな」祐一が肩をすくめて言つた。「俺のランクルはでかすぎる。荷物も満載している。頂上の土嚢を下に突き崩してもう少し緩やかな斜面にしてやれば行けるかもしれない」土嚢の先に進む方法を考えている。

「エレボスが来るのを待たなければならない。それは三日後か一週間後か、まったく見当がつかない。それまで、この辺で遊んでいるしかない。しかも、それは彼がラジオを聴いたと想定しての話だ。

仮にここで十日以上待っていても彼が来なかつた場合。九州へ入る「

山間部はまだ雪が残つていた。どうやら北部九州で大雪というのは本当だつたようだ。それは添田に入つてもそうだつた。そしていたるところに人間の亡骸が横たわつていた。溶けかけた雪のなかから、体の一部をのぞかせていた。

田川に入るとさらに遺体の数は増えた。しかも、既に雪は消えてしまつている。余計に悪かつた。隠されることなく人間の死体がごろごろ転がつっていた。アスファルトの上を泥土が覆つている。放置車両の数も増えていた。いたるところで道をふさいでいた。

もつとも、ここまで来れば、北九州まではあと少しだ。この先、放置車両はもつと増えるだろう。北九州に入れば死体の数も半端ではないはず。これくらいで音を上げるわけにはいかない。アイコは地図を見てルートを決めた。峠を越え小倉南区に入る。心配なのはガソリン残量。なんとか北九州まで持てばいいけれど……。

だが、甘かつた。場所はまだ、田川と北九州の間にある山中。ガソリンが切れた。既に夜の闇のなか。

「どうする？」どうしようもない。

「夜明けを待つて、歩いて峠を下るしか

灯りひとつない山の中。アイコはヘッドライトを消した。バッテリーはまだある。アニナはルームライトをつけて銃の手入れを始めた。

アイコは毛布を頭から引っかぶつた。他にすることはない。

「先に寝るから」

アニナはなんだか嫌な予感がしていた。それが何なのか自分でもわからない。

とは言え、ダッシュボードの上でできる銃の手入れなど限られている。そうそうに片付けて自分も寝ることにした。毛布をかぶつたが、闇のなかに何かの気配を感じている。跳ね起きてヘッドライトを付けてみた。何もない。鬱蒼と茂る木々が闇に浮かび上がるだけ。

『氣のせい？』

「なに？……どうかしたの？」アイゴが田を覚ました。寝ぼけ眼で問う。

「いや……なんでもない……」アーナは答えた。氣のせいだと思い、寝るひとじた。翌朝。

ざわめきとカラスの鳴き声で目を覚ました。ざわめき？ とは違う。夢の中ですっと聞こえていた。悲痛なうめき声。一人や二人ではない。数百人、いや、それ以上の人間の。

地獄？ 夢の中と現実の区別がつかない。朝靄に包まれ眼前に広がる光景が、悪夢の中のものなのか、それとも現実なのか区別がつかずしばらくぼんやりとそれを見た。夢？

跳ね起きた。夢じゃない！！

気配にアイコが目を覚ました。彼女は悲鳴を上げた。車のなかで逃げ場を求める、身を縮め叫び続けた。朝靄のなかに浮かび上がったその光景を見て。

クリスマスの飾りのよう木にぶら下がっている。行く手の道を埋め尽くすように転がっている。老若男女。人間の生首。それが口を開いている。苦痛のうめき声をあげている。呪いの言葉を吐いている。すすり泣いている。しゃくりあげている。カラスが群がっている。その目玉をついぱんでいる。

視界の全て、見える範囲全てがそうだった。木に鈴なりの人の首。アニナは背後をふり返った。同じ光景がひろがっていた。戻れない。まずい。アイコがパニックだ。アニナは彼女を落ち着かせようとした。肩をつかみ、幻聴だと言った。しかし。

「クリソレトウスをつけているのよ！ わたし達。悪魔のもたらす幻覚だけじゃなくて幻聴も当然防げるわ！」泣きながら答えた。「そうだと死んでいる。首だけになつて生きている筈がない」「いえ。魔力で正気に戻っているのよ。ルナティックだった人たちよ、きっと。正気に戻つて意識があるんだわ」

狭い車のなか。言い合つても仕方がない。車は動かないのだ。ここ歩いていくほかない。とにかく、アイコには落ち着いてもらわなければならない。一体どんな悪魔の業なのか？ またセレなのか

? それとも知らない何者なのか、アイコの知識が必要だ。

アナは外へ出ようとした。その背中をアイコがつかんだ。

「駄目。出行かないで……」泣きながら懇願した。

「落ち着いて」と言った。

「少し様子を見てくるだけだ」車のなかにずっといても仕方がない。ドアを開けた。自分は言葉がわからないだけマシなのかもしない。日本語がわかれれば、アイコのように取り乱すのかもしない。一步足を踏み出した、そのブーツのすぐそばに首があり、苦痛に顔をゆがめ、何か喋っている。無視した。

歩いてゆけないほどではない。道を埋め尽くしているわけではない。それを避けながら進んでいくことはできる。蹴つ飛びしたくなきから……。

すぐ脇の木にぶら下がっていたひとつのが、アナの姿を見てこう言つた。

「お願い。助けて。苦しいの……」

アナは唇を噛んだ。意識がある。この女性の首は、わたしを外国人だと判断して英語で話しかけてきた。いったいどんな悪魔の仕業なんだ。

「もう、楽にして……」

XDピストルを抜き、その額を撃ちぬいた。苦悶の表情が消えた。それは田を開じた。

どうする? 自問自答する。ここにある全てを、救えない。楽にしてやることすら出来ない。弾の続く限りそれをしても意味がない。アナは車に戻り自分の荷物を取つた。

「行こう。アイコ。じつしても仕方がない。残念だがどうしようもできない」

このなかを進んでいくしかない。何処まで行けば、これが終わるのか、それもわからないが。

田を見れば、少し落ち着いたことはわかる。だが、アイコは首をふり、外へ出ることを嫌がつた。このなかを歩いてゆくなんて考え

られないことのようだつた。

「他に道はないわ。アイコ。あなたなら、これがどの悪魔の仕業かわかるかもしない。そうしたら、この人たちを……救うこともできるかもしない」

アニナの説得に、アイコは不承不承自分の荷物を手に取つた。促され外に出たが、そこから一歩も動けなくなつた。四方にそれがある。そこから進むこともさがることも出来ない。しゃがむことも出来ない。それに触れる。

それが口々に何かを言つてゐる。まずい。ここからはアイコに話しかけてくる。訴えている。苦しみを。

「アイコ。無視して」それが出来れば泣くこともない。パニックになることも。

かううじて、アイコはパニックにならなかつた。泣き顔でアニナに聞いた。

「どうすればいいの……」

アニナは、足元に注意してアイコのそばまで行つた。

「考えて。これをやれそくな悪魔はいる?」彼女が落ち着いて考えられるように、そばにあるそれらを蹴つて転がした。

「悪魔なら……」どの悪魔でもこれくらいやつてのけるのか。

「でも、これほど陰惨なことをする靈は幾つか」地上にあるのは十ハ靈だけ。限られている。

「バティンかパイモン……でも、セレかもしないし、わからない」バティン、パイモン、アニナの頼りないグリモアの知識では、両者ともルシファーの忠実な家来だつた……。そう、それにバティンはエト・ハウトクタにもその名があつた。

「バティンを召還できる?」

アイコは首をふつた。

「エト・ハウトクタには『破滅を求めざれば召還するべからず』とあるわ。それに召還してどうするの? これをもとに戻せせるの?

そんな求めに悪魔が応じる筈ないわ」

やはり無理だ。アーニナは思つた。耐え難い精神力を要求されるが、ここを歩いてゆくしかないのだ。わたし達は無力だ。心配なのはアイコのほうだ。自分は言葉が解らないからまだいい。アイコは彼らの言葉全て理解できる。

「……リゴール……」アイコが小さな声で呟いた。アーニナはふり返つた。

「え？」

「……リゴール」アイコの眸にほんの少し光が戻つていた。

川野は随分腕前をあげた。八九式小銃だ。既に自分の分身のようには感じている。公募された八九式小銃のニックネームはバディだから、まさにその通りだ。ただ、そのニックネームはかなりダサいと感じてる。

ミキに銃を持たせるのはあきらめた。手ぶらというのもかなり心配だが、どうしようもない。彼女が危機に瀕しないよう、戦える俺たちが気を使うしかない。

彼なりに、戦い方を想定している。距離があれば、敵は弾を避けろ。肉弾戦でないと駄目だ。ほとんど体当たり気味に、銃口突きつけ撃ちまくる。勿論、五メートル離れたところで決着がつくのなら、そちらを選択する。三八口径以上の銃弾の初速は大抵音速を超える。5.56mm弾（二二口径）の八九式は音速を超えないだろう。多分。しかしあいつ、ホンダの持っていた刀とほぼ同じ理屈になる。悪魔は避けきれず弾は当たる筈。

自衛官達は拳銃も持っていた。ホルスターごと三丁頂いて腰に付けている。『九ミリ拳銃』だ。それが正式名称だから味も素つ気もないが、これはイスのシグザウアーパ220というモデルである（それを日本でライセンス生産したものだ）。九ミリというのは所謂三八口径。三八口径のオートマティックということになる。この九ミリ拳銃は、野原祐二も一丁頂いて腰に付けている。ふたりで練習をしたが、共通の感想は、拳銃よりも長物の方がいい、ということだった。

今日は、ミキを連れて関門パークリング・エリアまで足をのばした。彼女がジュークを飲みたいと言ったからだ。任せろ、と豪語して連れてきた。バールは広島で一本手ごろなのを手に入れている。人目を気にせず、かなり荒っぽく壊してもいい、となると開けられない自販機はないに等しい。もっとも、頑丈な錠をついているものもあ

つたが。これはどうかと彼は思つ。自販機ドロの立場で言えたこと  
じやないが、災害時に自販機は大事な飲料備蓄庫となる。素人でも  
開けられるようにしておくべきだと思つ。

とりあえず、ミキにジュースを渡し、自分も一本飲み、入るだけ  
バッグに入れた。ミキがジュースを飲んでいる間、煙草くゆらしな  
がら、海峡を見た。ここからは橋がよく見える。見上げる橋は、災  
禍の前となんら変わりないようと思えた。

### 「エリゴールを召還するわ」

活路が見出せると、ようやく普段の自分を少し取り戻せた気がし  
た。アイコは涙を拭いた。

「聞いて。他の悪魔と違い、エリゴールはサムヤサとともに地上に  
降りた可能性が高いわ。つまり、太古から地球にいるということ。  
そしてサムヤサとともに戦つたときも、靈として居た筈。『エト・  
エウトクタ』を信じる。『地の底から戦ひ人の影が立ちのぼり口を  
開いた』という。その時、媒体はなかつた。それでも姿をあらわし  
た。人間の目に見える形で。でしょ。今まで召還した靈には、媒体  
として人間の体が必要だつたけれど、エリゴールには必要ない筈。  
不可視ではない靈の姿で現れてくれると思うの。だからルナティック  
なしでも召還できると思う。召還円と記号や数字はレメゲトンの  
召還法を信用していいと思う。所謂ソロモン七十二靈の『エリゴール』  
の召還法を用いる。これが悪魔のなした業ならエリゴールに救つて  
もらひ。レメゲトンの記述を信じるわ。静謐な騎士の姿で現れると  
言つ。人間もそうだけど、靈だつて内面が見た目にあらわれるのよ。  
きつと、救つてくれると思つ」

息もつかず喋つた。話すことで落ち着いた。頭のながが整理でき  
た。まったく自信はなかつたが、話しているうち、必ず召還できる  
と思い始めていた。

アナナはうなずき、

「任せる」と短く一言だけ。そしてスペースの確保に取り掛かつた。

首を足で蹴つて場所を空ける。召還に必要な円を描くスペース。そして自分達の立ち位置を確保する。この作業はアイコには出来ないだろう。ショック状態から抜けたばかりだ。

アイコがスプレー缶を取り出し、力チャヤ力チャヤと振る。うつむき、無心でそれを地面に描いていく。十分ほどでそれは描きあがつた。「作法も手順もでたらめだけど、多分大丈夫。ある程度破つても現れてくれると思う」それを願つた。準備にはここでは用意できないものも多数ある。だが、名前さえ知つていれば悪魔は召還できる。そしてその名前を知つている。オノボウスが『エリゴール』と言つたとき、その発音もアクセントも彼女は記憶していた。

早くしなきや。彼女は必要ないのに焦つていた。プレッシャーを感じていた。その原因は周囲の全て、そのうめき声。泣き声。

「分かってるわよっ！」彼女は苛立ち啖いた。お願いだからしばらく黙つて……！

アナーナがアイコの肩に手をのせ言つた。眸から彼女を気遣う心が伺えた。

「何も急ぐことはないわ。これは既にどうしようもないこと。周りが何を言つても、あなたがすることに何の影響も及ぼさない。これはあなたとエリゴールの『出会い』よ。集中して」

言われなくとも分かっている。エリゴールを召還するその意味を。その成否が、今後の自分達の運命を大きく左右することが。だから躊躇する……心が震える。

「Athah gabor leolam - Adonai」涙声の

呪文。

「エリゴール」彼女は呼んだ。か細い声で。再び、

「エリゴール」懇願する声で。

「我、涙もて訴えり……エリゴール」短剣をかざした。『A・G・L・A』と刻まれた短剣。

「汝に、騎士の心あらば、我が願い聞きとどけ……」短剣のうえに涙がこぼれる。そして短剣をつたつた雲が、円の中にはらりと落ち

た。我が前にその勇姿を現せ。

「エリゴール！」

異変起つた。円の中のアスファルトが割れて高く浮き上がつた。その下から現れるは清涼な光。大地に光の穴が現れ、その光のなかにゆつくりと槍と笏を手にした騎士の姿が浮かびあがつた。その顔は鎧で覆われわからない。静謐としてしかも堂々たるその姿。浮いていたアスファルトの欠片がばらばらと落ちた。光の穴は既に消えている。

「魔女よ」エリゴールが口を開いた。

「数千年のときを経て、再びめぐり合ふたに、その秘密明かせぬとは」

「わたし？　わたしなの？　アニナじゃないの……。突然の靈の言葉に驚くアイコ。

「エリゴールよ。それはわたしのこと？」

「然り」

「わたしは……、わたしはただの人間だ。言われるならアニナだ。彼女はサムヤサなんだから……。」

「彼女は！」アニナを指した。

「サムヤサじゃないの？」

鎧の奥でエリゴールが微笑んだように思えた。

「然り。サムヤサの血を濃く引いてある」

「やつぱり。思つたとおり……。」

だが、これにはアニナが閉口して口を挟んだ。

「わたしはそんなたいそうな者じゃない。第一、サムヤサの牙と呼ばれているこの日子の瓊矛だって、どうやって使つたらいいかさつぱり分からぬ」

エリゴールは静かにアニナに向き直り答えた。

「いずれ、使える。それよりも問題なのは、その時、自分が槍を伸ばしている、形を変えていふと考へないことだ。お前は、それを『創つて』いるのだ」

アニナは、余計混乱させられた。

アイコははじめの話に戻した。

「じゃあ、わたしはなんなの？ 明かせぬ秘密つていいたい」

鎧の奥の目が少し見えた気がした。慈愛に満ちた目とは言わない。それは強き眼。しかし悪魔の持つ残虐な目ではない。娘を護る父親に似た目。

「明かせぬ。汝死するとき、必ずや我現れ、秘密解き明かそつ。その時なれば、一瞬にして理解できよう」

わかつたわ。死ぬときのお楽しみね。それが遠い先であることを祈るけど。まずは、頼まなきや。この惨劇を終わりにしてもう一つ。アイコは周囲を指差し言つた。

「エリゴール。我敬畏の念を持つて汝に問う。この悪魔の業は何者のなせるものか？」

「ふむ、と鼻をならしエリゴールは答えた。

「バティンなり」

「されば、汝にこの業を解くことは可なりや？」

「一度離れた首を元に戻すことはできぬ。死んだ人間を生き返らせることも」

アイコは唇を噛んだ。緊張の糸が切れたのかもしれない。涙がこぼれた。

「違うの……。この人たちに、せめて安らかな死を……」

その様子にエリゴールは静かに言つた。

「叶えよう。汝の涙に」そして槍をふりあげるといつ言つた。

「悪しき靈バティンの業に苦しむこの者たちに安らかな死を」途端に声が消えた。静まり返つてゐる。それは相変わらずそこにある。到る所にある。だが、口を開いているものは一人もいない。静寂が山に戻つてきた。

「ありがとう……エリゴールよ……」言いながら、アイコはまた泣いた。

ずっと捜していた。古い信仰や神を調べながら、自ずとそれを捜

していた。「己が身も心も捧げ崇拜する」とができる神を。

「汝の業は悪魔を凌駕し善為す力あり……我信服し」

もう良いと思つた。己の靈の力を信じ、己の靈の業によつ己を、いや、信仰というものはそういうものではない。ただ、今、感じていることは、己の魂を己の靈に預けて後悔しないということ。

「我が魂を契約により」

彼女の言葉をエリゴールはさえぎつた。

「魔女よ。そなたの魂は孤高のもの。そなたのみのものにして靈に明け渡すこと適わず。己を大事にするがよい」

アイコは涙を拭いて言つた。

「わかつたわ……」

「この後も我が力必要なれば呼べ。大地のつえであればいづれでも私は出<sup>いざる</sup>」

「ありがとつ……エリゴール……」

アイコの言葉が終わらないうちに、再び地から清涼な光立ち昇つた。

「待つて、まだ聞きたいことが……」

「立ち向かひて難事あらば呼べ」

そう言い残すと、靈は静かに光とともに消えた

「もし、彼ら（オル・ゼヴァブやエリ・ゴーク）の言つ通りわたしがサムヤサであるならば、わたしはこの災禍から人類を救わないといけない」

アニナがポツリともらした。

「けれど、わたしには何をしていいのかわからない」

アニナの苦惱はそこにあった。考えたくないから、その問題と向き合わなかつた。

「あと、四十七日でオル・ゼヴァブの災禍は終焉となる。けれども、本当の脅威は別にある……。バティンが策動していると言つ。何をどうしたらいい……？　わたしには分からない」

アイコも答える言葉を持たない。無言のアイコに彼女は言つた。

「あなたは何者なの？」そう。エリ・ゴールはそう言つた。

「わからない」としか言えない。

「エト・エウトクタの登場人物なのか、それとも登場していない誰かなのか……。どちらにしても、あなたやエレボスと違い血の意味ではないみたい。眞実はわたしが死ぬとき、わたしだけ知ることができる。それしかわからない。少なくとも、血の意味でわたしが何者かでないのなら、今ある脅威に対して何の力にもなれない。あなたやエレボスとは違つて」

「わたしに何ができる？」再びアニナが問う。会話は堂々巡りを繰り返す。

静寂が訪れたとは言え、場所は違わない。景色は同じ、地獄の有様。ふたりは立ち上がつた。

先へ、進むしかない。エレボスに必ず会つ。しかし、そこがゴールではない。そこで答えは見つからないだらつ。さらに、先へ。

ミキは小高い丘の上から海峡を見下ろしている。大きな橋、流れ

の早い海峡、そして対岸の建物が小さな粒のようだ見える。

この先は九州だ。

ほんとに九州に着たんだ。ここに居る自分が信じられなかつた。ほんとに来れるとは思つていなかつた。いや、勿論自分ひとりじゃ来られなかつただろう。

橋の上で作業している男一人を見た。土嚢を突き崩しながらかな丘にして、ランクルで乗り越えるそうだ。自分に手伝えることはない。橋の上の放置車両もほぼ片付いている。運良くクレーンつきのレッカー車があつた。それで片つ端から海に落としていった。時間はかかつたが、時間は問題にはならない。

その先、トンネルがある。そのなかも勿論放置車両で詰まっている。

だから、トンネル手前の丘を駆け上がり、フェンスをワインチで引き倒して、隣接する一般道に抜ける。そこは川野郁夫が脱出してきたルート。

の人たちならきっとやれる。彼らに任せておけば大丈夫だろう。きっと九州へいける。

そして、わたしは、必ず耀に会う。会える。きっと生きている。

## 合流1-2（後書き）

拙作読んでくださいまして本当にありがとうございました。  
大変申し訳ありませんが、諸事情によりしばらく連載休止させていただきます。

しばらくお休みを頂き、最後まで書き上げたら、連載再開したいと思っています。

大変申し訳ありません。

今後の展開、謎解き、そして結末にご期待ください。

この物語における以下の事柄以外はフイクションです。

『ヒレボス』混沌の子。闇の人格代名詞。ギリシャ神話においては宇宙創造時のカオス的な意味合いをもち、闇の国の王の名である。『サムヤサとその一族』天界から偉大なるサムヤサラが地上に降り立ち、人類に文明をもたらした。というエノク書の伝聞。さらに、『エノク書』とその内容。

『ソロモン七十一霊』の悪魔の名と召還した際の姿、その業。召還の際唱える言葉、用いる短剣、そして石。

### 命流1-3（前書き）

拙作読んでいただきありがとうございました。  
長らく休筆して申し訳ありませんでした。  
まだ、完結しておりませんが、連載再開したいと思っています。  
どうぞよろしくお願いします。

北九州市小倉市街地。街並みは災禍前となんら変わりない。しかし、以前そこを満たしていた音の数々、行きかう車の喧騒も人々のざわめきもない。

代わりにあるのは地獄のような千の亡者のつめき声。慟哭。そして空を突き破るような轟音。立て続けに。

道にあふれた亡者たちは、泣き叫びわめきながら自分の服をひきむしり他人の服をかき破り、半裸となつて蠢き腹這いで進み、放置車両があればその上を這つて乗り越え、ひとりの少年に群がる。その少年の前まで来ると跳ね上がり襲いかかる。しかし少年の刀に血の塊となつて消える。

鳥瞰すれば、重い曇天の下、濁流のよううねる死者の流れ（その様は大量に湧いた蛆虫を思い起こさせる）の中心に、ひとりの少年があり刀をふり続けている。

エレボスと呼ばれる少年。

耀だ。体を回転させる。周囲に血の柱が立つ。亡者の只中にあつて刀をふり続ける。爆音続けざまにどどろく。

身体の変異は隠しようがない。その肌は見た目では普通の人間となんら変わりないが触つてみると鱗の皮のように硬い。骨が変質したことを感じている。腕が音の速さを超えて、その骨は折れることも、その筋が違えることもない。

拳にボクシングのバンテージを巻いている。既に血にまみれかたまり黒く染まつたそれがさらに血に染まる。その拳を亡者の顔に叩き込む。拳もまた音の速さを超える。轟音。亡者の顔が吹き飛ぶ。足が地を蹴る。上段回し蹴り。蹴りもまた音の速さを超える。爆音とともに吹き飛ぶ亡者の頭。

狼の目で敵を見据え、その殺戮の手を一瞬も休めない。

これが悪魔どもの仕業であることは推測がついている。全てのル

ナティックが凍死したここにあつては、奴らは自分の軍団を形成できない。ゆえに死者を蘇らせ俺の行く手を阻む。ここまで三昼夜、ぶつとうしで斬り続けた。睡眠は既に必要なくなつていた。食べ物も。何も食べなくとも空腹を感じない。俺はおかしくなつた。知つている。エレボスになつた。

それが何者か知らない。だが、今、ここにいる、俺がエレボスだ。右手にバスター・ミナルがある。左手には観覧車のあるショッピングモールだ。ここが砂津、門司まであと数キロ。

ラジオ放送を聴いた。ミキが関門海峡まで来ているという。追い返さなければいけない。俺にはやることがある。ここから逃げ出す気などさらさらない。

自身の放つ轟音で、自分の耳がおかしくなつたかと思った。音の奥に、亡者達のわめき声の奥に、ありえない音が聞こえたのだ。しかも次第に大きくなる。

動いている車の音。

交差点、中津方面からそれは来た。黒いボクシーなフェイスのステイションワゴン。

北九州ナンバーのその車の車高は、元の持ち主がなにを考えていたかわからないが地を這つほど低い。亡者の群れに突っ込むと、まるでラッセル車のように奴らをかき分けながら目の前に止まつた。助手席のドアが開き、金髪の少女がとびだした。英語で何か叫び、巨大な銀色のリホルバーをかまえると、続けざま撃つた。ホンダの左右の亡者が胸から上を吹き飛ばされ倒れた。運転席のウインドウが開いた。日本人の若い女が顔を出し叫んだ。

「乗つて！！ 早く！！」

状況が理解できない。しかし、従わない理由はない。刀を納め、目前の敵を蹴り倒すと、這つて亡者の上を駆けた。後席のドアを開き飛び込んだ。同時に少女も助手席に戻つた。

「いくわよ」若い女が言い車は急発進した。門司方面に向かつて。

「あなたが、エレボスことホンダヨウね。やつと見つけたわ」女が

ふり返る。

「あんたは？　いや、あんた達は？　何故俺を知っている」

「あなたをずっと捜していた」

「俺を？　あんた達は？」

車は濁流の如き亡者をかき分けて力強く進む。四輪駆動。ギアを三速キープのスノードライブモードに入れ、女はアクセルを吹かし言つた。

「わたしはアイコ。大学で神学を専攻している。民族の古い信仰や神を研究しているの。簡単に言えばオカルティスト。デモニアスト（悪魔を召還し取引する者）と呼んでもらつてもいいわ。こつちはアニナ。ルーマニアの山中奥深くにあるシルバニア公国の古い貴族の子。その家業はバンパイア・スレイヤーよ。わたしは自分の研究のため、彼女はローマ法王の依頼で九州に来たの」

かなり、驚かれる内容だった。輪をかけるように、理解できないうことを言われた。

「しかも、彼女はサムヤサの末裔もある」

「サムヤサ？」

「そう。あなたがエレボスの末裔であるように」

ホンダは軽い衝撃を受けた。瞠目した。この女は、エレボスが何者か知つてゐる。

やつた。やつと見つけた。音を聞いた時、間違いないと思つた。雷のような音。それが立て続けに。やっぱりそうだった。彼がエレボス、エレボスことホンダヨウだ。

呆気にとらわれているエレボスに、アイコはエト・エウトクタの話を聞かせてやつた。彼にとつては驚倒の連續だつたに違いない。

「その話は、何処の世界の何時代の話なんだ？」途中口を挟んできたが、

「それがわかれれば苦労しないわ」と皮肉っぽく答えた。

「とにかく」アイコは続けた。

「あなたが言つたとおり、アスルーが福岡ドームにいるのなら、福岡ドームの謎の光源が間違いなく『眩く輝くもの』。あなたにアスルーを倒してもらい、それを封印しなければならない

「封印しなければどうなる？」

「わからないわ。現時点ではわかっていることは全て話したわ。この現状も何者の成した業か、だいたい見当はついている。多分、ブーネかビフロンス。どちらも死者を操る記述がレメゲトンにあるわ。そしてどちらも今現在地上にいる」

「奴らは……倒せないのか」それは彼にとつてもつとも欲しい情報だつたろう。しかし、彼の欲しい回答は持ち合わせない。

「倒せないわ。他の人間に憑依するだけ。もつとも、今、この地に生きている人間はいないから、倒せばどこか遠方へ行くと思うけど」生きている人間はわたし達だけ。そしてわたし達は石をつけている。憑依できない。

「あなたに必要かどうかわからないけれど、渡しておくれ。クリソレトウスというの。精神崩壊から身を護れるわ」

渡されたペンダントをエレボスは黙つてつけた。

「海峡へ行くところだつたんでしょう。わたし達も韓国からのラジ

才放送を聴いたの。あなたのいとこが来ているそうね  
エレボスはうなずくと憐然とした顔つきで

「追い返す」と吐きすぎてた。

「俺は福岡ドームに用がある。避難するつもりはまったくない。おそらくあんたの言つとおり、アスルーを倒すのが俺の役目なのかもしない。とにかく、今の俺にはアスルーを倒すこと以外考えられない。ミキには悪いが邪魔だ」

アイコには頼もしい言葉だつた。アニナも、彼も、人類をこの災禍から救うため戦わなければならない。何をどうすればいいかは、まだ皆目見当もつかない。だが、この地にとどまり真の災いである『眩く輝くもの』に対し何らかのアクションをとらねばならない。

「媚孤朗という妖孤は？ あんたの物語には出てこないのか？」  
ホンダが唐突に聞いた。

「媚孤朗？」首を傾げるしかなかつた。

「俺に、この刀をくれた。音速の剣と言つた……」

「おとはや……音速を超えるのね。多分、その刀はサムヤサとともにエレボス・シ・ルカヤルが地上に持つて降りた物。太古から現在に到るまで、様々な因縁があつてもおかしくはないわ」

そう答えると、アイコは今までの話の内容を助手席のアニナに簡単に通訳して聞かせた。

アニナはリホルバーに馬鹿でかい弾を込めながら話を聞いた。

亡者達は弾を避けない。彼女の知るバンパイアのように敏捷ではない。彼女の定義によれば蘇った死者は全てバンパイアだ。だがこいつらはゾンビと呼んだほうがアメリカ文化圏では通りがいいようだ。しかし困つたことにこいつらは九ミリ弾では倒せない。お気に入りだつたオリーブ色のXDピストルはお蔵入りだ。替わりにスミス&ウェッソンM500リホルバーの登場だ。コンクリートの塊でさえ粉々に吹き飛ばせる。しかし装弾数が少ない。すぐに弾切れになる。後、つかえるのはシグアームズのレボリューションXO。4.5口径だと一発で敵は止まる。それでも装弾数は九発×二丁。この

大河のような亡者の群れにどう立ち向かう。一分経たないうちに弾切れだ。アイゴの話も上の空でアーナは前途に暗い暗雲感じていた。戦えるのはエレボスひとりじゃないのか。先刻の凄まじい戦いぶりが目に蘇る。亡者の群れ只中にあり、襲い来る亡者を片つ端から斬り伏せ蹴り倒していた。あんな真似はできない。わたしはなんの役にも立たないのかもしない。

祐一はランクルのハンドルを握った。土嚢は突き崩した。この傾斜なら登れる。唯一の不安点は天辺で腹がつつかえないかどうか。できる限り斜めにアプローチしなければ。

川野少年が土嚢の上で誘導している。祐一はなんとなく彼が気に入っていた。昔の自分を思い出す。三年前、アーナに会う前までは、ただのジャンキー少年だった。

「じつと音をたて前輪が土嚢に乗り上げた。続いて後輪。タイヤが力強く土嚢をとらえる。ノーズが天を仰ぎ視界が空ばかりになった。誘導する川野少年の手がかるうじて見える。もっと右へ寄れと言っている。

車重を少しでも減らすため、満載していた荷物はいつたん降ろしている。軽油の入ったポリタンクなど。土嚢を乗り越えた後、再び積み込む。

川野の合図で思い切りハンドルを左にきつた。天辺だ。次の瞬間、右前輪が宙に浮き車体がかしいだ。そして着地、今度は左後輪が宙をかいしている。乗り越えた。

あとはエンジンブレーキを効かせながら降りるだけだ。いや、降りるというより落ちている。もつとエンジンブレーキを効かせないと。しかし。

アスファルトでバンパーを少しこすったが、ランクルは無事土嚢を乗り越えた。

よし。あとは九州だ。

運転席を降りると、土嚢の上にいたミキが橋のほうを指差し、

「あつ」と言った。

「人が沢山、こっちに来ますよ」這つてます、と付け加えた。見れば橋の向こうから、濁流のような人の群れが、ゆっくりと這つて近づいて来ている。

側にいた川野が言った。

「なんだか、背筋が……あれ、生きてるのかな……」

「祐一にはわかつた。

「いや。死んでいる「おそらく、寒波で死んだルナティックたちだ。それが何故、とも思う。が、何をしに来たかは明白だ。

「急いで荷物を積んでくれ。俺が足止めする」

川野は八十九式小銃を肩にかけ、撥ねるように土嚢の向こうに消えた。

「重い荷物は俺が運ぶ。お前は軽い奴を積んでくれ」川野がミキに言っている。ミキは無言で従つた。鞄を手に勢い良く土嚢を駆け上がつたが、そのまま転んだ。

「どういうことかわけがわからぬが、これも悪魔の仕業なんだろう。俺の術が通じるか？ この地に来てはじめての試み。」

凛とした声で祐一は印を切つた。

「臨」唱えて独鉛印を結ぶ。

「兵」指を組み替え大金剛輪印。

「鬪」さらに組み替え外獅子印。

「者」内獅子印。

「皆」下縛印。

「陳」内縛印。

「列」智拳印。

「在」日輪印。

「前」隱形印。

調伏発動。

続けて空中に「王」の字を書いて唱えた。

たちどろくに変化あつた。死者の群れの半数が動きを止めている。呪縛した。

ここまで修験道の呪術。

さらに唱える。日蓮宗系呪法。

「阿耨多羅三藐三菩提」

（あのくたらさんみやくさんぼだい）

死靈に切りかかり成仏させる九字。刀印を結び空中に『妙』の字を書きながら、一角ごとに唱える。『妙』は九画ではない。九画に崩して宙に刻む。そして続けて唱える。

「阿・耨・多・羅・三・藐・三・菩・提・々・」

亡者の群れのほとんどが動きを止めた。しかし成仏させるには到つていい。呪縛しただけだ。それは、この呪をかけた者の力がよほど強いことを意味する。

「川野つ！」鋭く叫んだ。三体近づいて来ている。今は一瞬も手を休められない。

意味は伝わったようだ。川野が土嚢の上から八十九式小銃で狙い撃つた。三発とも命中したが、奴らは止まらない。川野はフルオートに切り替えて再び撃つた。ライフル弾が人間の体を破壊する。肉の塊になつて、はじめてそれは動かなくなつた。

これは思つたより手ごわい。呪文と九字切る手を休めず祐一は感じた。

川野はもう荷物運びを止め、呪縛を破つて近づいてくる敵を撃つのに必死だ。代わりにミキが重いポリタンクを運んでいたが土嚢の上から転がり落ちた。

もう限界に近い。距離約一十メートル。

「あと幾つ残つている？」起き上がつたミキに聞いた。

「三缶です」

「もういい。捨てて行こう。二人ともはやく車に乗るんだ」呪文の合間に早口で言った。もの凄く素早く一人は車に乗り込んだ。ミキなどはいつも「シートが高すぎて乗れません。ミキ、どうしよう」などと言つていたのに、まるでカウボーイのようにひらりと飛び乗つた。

二人が乗つたのを確認して印を解いた。瞬間、防波堤を突き破つた濁流のようにあふれ来る死者の群れ。自分も運転席に躍りこんだ。ハンドルを握る。ゆっくりと死者の群れに向かい進む。

慎重にそれの上に乗り上げた。太いタイヤが死者を噛む。車は左

右に上下に揺れた。ミキが半分泣いている。それも道理。車は今、亡者の川の上を進んでいる。窓を閉めていてもいやおうなしに聞こえる地獄の咆哮。しかもハンドルをきり損なえば海へ落ちる。ゴツゴツと人間の体を轢く感触がタイヤからハンドルに伝わる。握る手が汗ばむ。ハンドルをとられそうだ。一気に駆け抜けたいがそれはできない。ゆっくり一輪ずつ、タイヤで死体を捉えながら進むしかない。時々跳ね上がつてウインドウにぶち当たる奴がいる。ボンネットの上に乗つた奴が視界を邪魔する。助手席の川野が九mm拳銃を抜いて窓を開けようとしたが押しとめた。九mm弾では始末できない。それは車がバウンドすると自然に下に落ちた。

永劫とも思える瞬間を幾千も重ねて、車は海峡を渡りきった。だがまだ安堵できない。トンネル手前の丘を登らなければならぬ。

祐一はノーズを土手に向けた。本当はここも荷物を降ろして登る予定だつた。今は荷物を満載している上、人間が三人も乗つていて、だが仕方ない。

エンジンが咆哮をあげランクルは斜面を登り始めた。もつとアクセルをふかしたい。しかし過度に踏み込めばタイヤは空転をはじめスタックしてしまう。あくまで適度に、土を捉える感触を確かめながら登つていくしかない。スタックしたら最後だ。

そしてフェンス。フェンスがある。それをどうする? このまま突き破れるのならいいが……。

思案のまともならないうちに、ランクルは見事に土手を登りきりエンス手前まで来た。その向こうは一般道だ。

祐一はアクセル踏む足を緩めずフェンスに突っ込んだ。スピードが足りない。フェンスは軟らかくランクルを受け止めた。さらにアクセルを踏み込むとタイヤが空転を始めた。まずい。破れない。スタックしてしまう。ワインチを使うしかない。

祐一は車を少しバックさせ、サイドブレーキを引くとエンジンも止めギアをローに入れ川野に言った。

「ワインチで引き倒す。援護してくれ」言つやになや運転席から飛び降りた。

見れば土手を登り始めている亡者の群れがある。背後に回った川野がめくら撃ちに弾を叩き込んだ。

「なんでこいつら立て歩かないんだ?」見当はずれなことを言っている。

祐一はワインチを引っ張り出しフェンスにフックをかけた。巻き取る。フェンスがかしづ。

「川野、頼む。時間稼ぎしてくれ」

もう奴らはかなり登つてきている。

祐一は自分もショットガンを取り出した。運転席のドアを開けると、後席で身を硬くしていたミキが涙声で、

「どうしてエンジン止めちゃうんですかあ?」と言つたが、今それに答えている暇はない。

川野に並んでショットガンをかまえ、這いよる亡者に銃口をむけた。狙い定めるは頭部。ショットシェルではなく熊撃ち用のスラッシュ弾。馬鹿でかい鉛玉が屍の頭吹き飛ばした。

化け物を撃つことは仮想していた。しかし人間を撃つことは想定外。いやな感触だ。全弾撃ちつくしショットシェルを装填する。今度はバックショット（散弾にはバックショットとバードショットがある。バックショットは鹿撃ち用。バードショットは鳥撃ち・クレ一射撃用）そのトリプルオー。ペレット（散弾一粒）の大きさは9.14ミリだ。九ミリの鉛玉のシャワーを浴びてみる。

川野がコツを飲み込んだらしく三点バーストに切り替えて撃ちはじめた。頭を狙えば三発で敵は動かなくなつた。

「激ヤバ。ゾンビ映画だ」川野が言つた。群れて這いよる様は映画よりおぞましい。

ふたりは確実に敵をしとめていたがいかんせん数が多い。徐々に這い登つてくる。

背後でめりめりと音がした。ふり返ればフェンスが根こそぎ引き

倒されていた。オーケイだ。

「援護頼む！！」川野にそう言い残すと、ウインチの回収に取り掛かつた。フックを外しあまつたワイヤーを巻き取る。あとは撤収だ。そこへ。派手なタイヤの音を響かせてフェンスの向こうに止まつたのは黒いステイショングン。

飛び出してきたのは三人。若い女がひとり、刀を持った少年がひとり、そしてアニナ。

祐一は、瞬間、時間が止まつたように感じた。亡者達の唸り声も聞こえない。

「アニナツ！！！」一目でわかった。三年前と何も変わっていない。いや、背が伸びている。スレンダーになった。彼女は俺を憶えているだろうか？

「祐一……？」信じられないと言つた面持ち。かまえていた拳銃が下を向く。

「どうしてここに……？」

「お前に会えるかな、と思つて」そう言つて笑みを浮かべた。

アニナも笑みを返した。いや、そう思つたのは一瞬、次の瞬間飛び掛るように抱きつかれた。弾みで草むらのなかに倒れた。手荒い抱擁を持って歓迎された。この場には似つかわしくない再会シーン。「信じられない……まさか会えるとは思わなかつた」胸のうえで興奮気味にアニナが言つた。

「俺もだ」と言い、一番伝えたかつたことを言つた。

「俺、エクソシストになつたんだぜ」

「本当？」

「約束したからな」

「凄い……本当になつたんだ……」

それから祐一は思い出しきりと笑つて続けた。

「ほら、三年前、空港前で別れたじゃん」

頷くアニナ。

「なんでメルアドくらい聞かなかつたのかなと思つて

アニナは噴出し、確かにそうだ、と言つた。古城だからといってパソコンがないわけではない。

アニナは祐一を促し、ひとりの少年を田で追つた。既に幽鬼の群れに飛び込んでいる。そして立て続けにとどろく爆音。拳を、蹴りを、刀を亡者に叩き込む。

「アレは……。ひょつとして彼がエレボス?」

「そう。わたしも手伝わなきや」

アニナは身を起こし、銃をかまえた。祐一に会い弛んでいた表情が引き締まる。眸がつりあがる。丘の下に銃口を向けた。祐一もシヨツトガンをかまえた。

ランクルからミキが飛び出した。勿論耀を見つけて。

「耀つ！…」叫ぶがふりむかない。

「耀つ！…」全くふりむかない。

「耀つ！…」聞こえているはずなのにふりむかない。

一匹の邪鬼が彼女に近づいて来ている。彼女は気付いていない。祐一はそれを撃つた。散弾は亡者の体に無数の穴を空けたが、止まらない。まずい。亡者はミキに飛び掛る。

その時、一足飛びに大地えぐつて降り立つたエレボスがその太刀で亡者を粉碎した。そしてミキに言った。

「すぐにこいつら全部片付けてやる。だからとつと東京へ帰れ」

その言葉にカチンと来たようだ。眉を吊り上げた。

「ちょっと！… それがはるばる九州までやってきたわたしに言つ

言葉！…」

口喧嘩がはじまつた。

「これが俺だ。俺の姿だ。そして俺にはやることがある。ここを離れる気は全くない

「いったい何をやるつて言つのよ！…」

「男には倒さなければならぬ相手がいるんだ」

芝居のように陳腐な台詞だと思った。本人も気付いたようで顔を赤らめ言い直した。

「と、とにかく。喧嘩を売られたんだ。奴は待っている。行かなきやいけない」

「喧嘩？ いつたい誰が喧嘩を売つたって言つの？ その相手は人間？ 違うでしょ。馬鹿じやないの。化け物相手に勝てるわけないじゃない」

「その位にしとけ」

ショットガンぶつ放す手を休め、祐一は割つて入つた。

「とにかく車に乗るんだ。ここを離れよう」

ミキはまだ言い足りない顔をしていたが、踵を返すとランクルの後席に乗り込んだ。

エレボスもいきりたつて顔色を変えたままワゴンに乗つた。

祐一が運転席に乗り込むと、アーナが助手席のドアを開いた。

「乗つていいか？」と聞いた。

「勿論」と答えた。

二台の車は出発した。ランクルは一般道へでた。

「もう一人いた女性は？」祐一はアーナに聞いた。

「アイコ。大学生であなたよりひとつ上よ。悪魔を召還できるのなるほど。それは凄い。

しかし、会話ができたのはここまで。祐一もアーナも積もる話があつたのだが、後席のミキの様子におののくこととなつた。憤懣やるかたない様子でぶつぶつぶつぶつ言つてはいる。

「なんて奴」

「あの冷血人間」

「いとことは思えないわ」

ぶりぶり腹を立てているミキに、隣りの川野が困つた顔でお手上げ状態。

日本語のわからないアーナも遠慮して口を閉ざした。

祐一は苦笑いしてハンドルを握るしかなかつた。

エレボスとミキの戦いは続いていた。

場所は「ディスカウントショップ」のパークリング。ここに死者の姿はない。

アニナは、日本語はわからないが、大体言い争いの内容は想像ついた。

戦い続けるエレボスとミキをよそに四人はそれぞれの情報を教えた。アイコが主になってその推論を展開した。日本語で話しているからアニナには祐一が通訳してくれている。

「わかつてることはこれでほぼ全部ね。」この推論で間違いないと思つ「締めくくつてアイコが言つた。

会談が決裂した様子でホンダが座に加わる。ミキは腹を立て離れたところでジュースを飲んでいる。その場に加わりはじめてホンダは川野に気づき「あれ?」と言つた。

川野はにやりと笑い、

「よう」と答えた。何故? というホンダの視線に、「戻ってきた」自分でも呆れているよ、という表情。「とにかく、これでパーティが揃つた。RPGならそんなトコね」とアイコ。

「戦士が一人」と言つてホンダとアニナを見た。

「ビショップがひとり」と野原祐一を見て言つた。

「わたしは魔女かしら。そして」泥棒と言いかけて止めて、「シーフ」と川野を見た。離れたところにいるミキに手をやり、「彼女は……」と言いよどんだ。

「マスクットガールかしら」

「頼みがある」ホンダが川野に言つた。

「車の運転はできるか?」

「あ? まあ、できるけど」

「もう一度海峡を渡つてミキを東京へ連れ帰つて欲しい」「え？」

全員がホンダの顔を見た。

「俺たちは残る。四人なら車一台でいい。ワゴンでミキを連れ帰つて欲しい」

「ああ、まあ……」川野は返事を渋つた。この地が天国でないことは知つてゐる。しかし彼ら抜きで、自分ひとりで、少女を護りながら東京まで行けるかというと、それは別問題だ。襲撃されたらどうすれば良い。それに橋の上は死人だらけだ。今逃げてきたばかりだ。「海峡に死者の群れがまだいたら、俺が全部片付ける」

アニナはやり取りを見守つた。通訳は祐二がしてゐる。短い時間だが、アニナは川野のキャラクターが少しづかつていて、多分、頼まれるといやとはいえない性格。

「まあ、いいけど……」川野は答えた。

ホンダは安堵した表情を見せた。

「とにかく。もう一回、海峡に行つてみてからだな……。通れるようなら東京に行つてやるよ」煙草をふかしながら川野が言った。しかし、

「彼女を連れてきたのは俺だ。俺に責任がある」祐二が口を挟んだ。  
「俺たちと一緒にいるほうが安全じゃないのか？」川野の射撃の腕は認めている。それ以外の才能も。しかし災禍の圈外にたどり着くまでに、奴らに襲われたら、たつた一人でどう立ち向かう？ 俺たちはこれから福岡ドームへ向かう。一緒にいて、戦える自分達が護つてやつたほうがいいのではないか。

「いや……」ホンダは目をそらした。ここにいれば必ず死ぬ。目がそう語つていた。

橋の上の亡者の群れは影も形もなくなっていた。いつたい何処へ、と誰もが思った。

「どちらにしても、土嚢を排除しないとな……」祐一が言った。ステイショングンでアレを乗り越えられるわけがない。手じろなジープがジムニーがキー付であるばいいが。それ以前にこの傾斜を下れるのか。ついさっきランクルで乗り越えた丘である。

ぎー、という異音を発しながら、ミキがワゴンの助手席から降りてきた。凄まじく不機嫌だ。

「もう、いいから」ホンダに言った。

「ミキ、川野郁夫君と仲良くなっちゃつから。叔父さんになるかも知れないから覚悟しといて」と川野の腕を取つた。

ホンダは仮頂面で何も言わなかつた。正確に言えば「ここに子供ができるても叔父ではない」。

祐一が「川野と仲良くなる」という部分を「川野とメイクラブする」と訳したから、アニナは思わず頬が染まつた。大胆に公言してからするのか。日本人は。加えて、自分よりどう見ても幼い感じの少女が自分より進んでいることがショックだつた。祐一の訳がアバウトすぎるのもいけない。もともとガンジャの売人をして留得した英語だからである。

その時。空を搖るがす大音響。

見れば橋のうえに巨大な火球、燃え盛つている。

アニナとアイコには、何者が現れたかすぐわかつた。

「逃げよう」アニナが言つて、

「はやく、車に乗つて！」アイコが全員を促した。

「いつたいナンダ？」アレ、呑気にかまえた川野の頭をアイコが車内に押し込んだ。

アニナはふり返つた。既に炎の中からセレが姿を現わしている。

煌く巨大な剣をふるつた。太いワイヤーを断ち切つた。左右。

関門大橋はつり橋である。大変な重量を支えていたワイヤーは、その張力に従い跳ね上がり門司側の山肌をえぐり宙に躍つた。支えを失つた巨大な橋はバランスを失いかしいだ。

「まずい。橋が崩れる。アーナは思った。

「知つてゐるのか？」出現したセレを指し祐二が言った。

「ストーカー」と、答えた。

「最悪だな」祐二はランクルに乗つた。

セレはまつすぐこつちへ進んできている。アーナは祐二の隣に乗つた。全員二台の車に乗り込んだ。ワゴンのタイヤが白煙をあげ横滑りし、ガードレールにテイルをぶつけ、猛スピードで走り出した。祐二のランクルがあとを追つた。

アーナは背後をふり返つた。ピタリと後を追つて来る。距離が縮まつてゐる。川野少年が後席の窓を開け八十九式小銃で狙い撃つた。アーナも助手席から身を乗り出し、レヴォリューションXで撃つた。数発当たり血が飛び散つたが、何のダメージもないようだ。

大音響が響き渡つた。木立に隠れて見えないが、橋が崩落したのだろう。水しぶきと粉塵が車を襲つた。

「この先は？ 山道を下ると何処へ出る？」祐二に聞いた。

「海岸線だ。そうだ、まずい。高潮が来る……」

言つてゐる間にそれは来た。津波のように襲い來るのではなく、駆駆と恐ろしい速さで渦巻く水面が盛り上がりってきた。山道の行く手を閉ざす暗緑色の水。急ブレーキを踏むワゴンとランクル。が、先頭のワゴンは既にフロントタイヤを水に取られている。ノーズが流される。もつていかかる。

「川野、ウインチで固定しろ。俺は後ろの奴を……」運転席のドアを開けながら祐二が言った。

「どうするの？」アーナは聞いた。

「俺はエクソシストだぜ」そう言つてにやりと笑うと駆け出した。

一方、川野はたつたアレだけの指示でやるべきことを理解してい

た。ランクルからウインチを引っ張り出すと、もう完全に水に浮いたワゴンのリアバンパー下部の二字型の金具にフックを引っ掛けた。ワイヤーをぴんと張る。これで潮に飲み込まれない。

背後へ駆けた祐一はまっすぐこちらへ向かってくる悪魔セレに真っ向から挑んだ。

空中を縦横に刻み、

『臨』『兵』『鬪』『者』『皆』『陳』『列』『在』『前』。早九字を唱えた。

悪魔のスピードが若干落ちた。

続けて唱えるは、日蓮宗系最高呪術「頭破七分」。雑魚に唱える呪文を唱えても時間の無駄だ。これを破られれば一巻の終わりだが。賭けだ。

宙に『妙』の字を九画で刻みながら、  
『妙』『法』『蓮』『華』『經』『頭』『破』『七』『分』唱えた。  
教義では、その瞬間鬼子母神が発動して、敵を摧破し尽くすと言つ。その信憑性はともかくとして、唱えた瞬間異変は起きた。  
セレが止まった。

頭髪、顔面が白く染まっている。いや、無数のひびに覆われているのだ。

次の瞬間、ひびは全身を覆いつくしボロボロと崩れ去った。あとにルナティック、人間がどさりと地に落ちた。

祐一は大きく息をした。

アニナは祐一のそばに駆け寄ると感嘆の声をあげた。その顔に祐二が微笑んだ。

ワゴンから降りてきたエレボスが言った。

「その男を殺そう。早く」憑依されていたルナティックだ。倒れている。意識はない。

「すぐにそいつに憑依する。このあたりに入れ物はない」

アニナもそれは同感だった。この場にいる生きている人間、全て石の力で護られている。セレを完全に退けるには、ルナティックの

処分は必須。しかしあおかたの日本人は罪のない無辜の人間を殺すことのためにめらいを見せた。当然だ。この男は憑依されていただけ。何の罪もない。

エレボスは続けた。

「次の瞬間殺されるのは俺たちだ」

刀を抜きかけたエレボスを制し、アニナが銃を抜いた。躊躇する日本人を尻目に、額を撃ちぬいた。

「これで、セレは遠方へ行くしかない。憑依できる体を求めて」できるだけ遠くへ行ってくれる事を望む。しかし、それも災禍の圈内。悪魔なら数時間で飛んでこれるだろう。

そしてもうひとつ。セレが知った。私たちの邂逅を。つまり、彼らの種族全員が知ったと同じこと。

## かさなつた符号

オイル缶で焚き火をした周りに、全員が車座になつた。ショッピングモールの屋上駐車場だ。ここに動く凍死者の姿はない。パークリングの登り口は放置車両でふさいだ。しかし、だからと言って油断はできない。悪魔であれば天から降りてくるだろう。店舗入り口であるエスカレーターを死者がよじ登つてこないとも限らない。だが、一夜を明かすには現時点でこれ以上の場所はない。

アイコはこの出会いを奇跡的なものと捉えていた。アニナは三年前、日本に来たときの友人に会つた。その彼はエレボスのいとこを連れてきていた。

アニナとその祐一は仲良く話している。祐一は精悍な感じの青年だ。このなかで唯一大人の男の背中をしている。その祐一が話す。「核融合の条件は決まつてはいるけれど、呪術の条件というの実は不明確だ。比較的発動しやすいと思われるアクションを取り呪文を唱えるが、常に同じ結果がでるとは限らない。残念だけど。だから全ての悪魔に対してさつきのような効果は期待できない」アニナがふむふむと頷いている。英語で喋っているから他の人間は会話に入れない。

エレボスとそのいとこの少女は相変わらずだ。冷戦状態。

エレボスは確かに人間離れしている。獸？ 漂う雰囲気に獸の匂いがする。ううん。それ以外の何か。虚無？ 狼に似たその眸の奥が見えない。

川野という少年は若いが達觀したところがある。不良少年でも群れるタイプじゃない。好感が持てた。

「とにかく、もう、九州からは出られない」アイコは全員に言った。橋は落ちた。トンネルはつぶれている。一艘の小船も残っていない。全員がその事実を認識していた。

「わたし達にやれることをやりましょう」アイコは福岡ドームへ行

く氣だつた。

頷く目を見てわかつた。他の全員の意志も同じ。

アスルーを倒し『眩く輝くもの』を封印する。封印の方法はわからない。だけど行かなければ。それは全ての破局となる。『宇宙を覆す策略』オル・ゼヴァブの言葉が耳に蘇る。

わたし達にはエレボスとサムヤサがいる。まったく無力ではあり得ない筈。この災いのときに、エレボスとサムヤサの血を濃く引くものが同時代に生きていて出会つた。この日本の。その災禍の中心地で。それは奇跡と言つよりも運命。

わたしは？ 不意に心に疑問が浮かんだ。わたしは何のためにここにいるのだろう？ 学徒として？ 宗教史の？ はじめはそうだった。だけど……。

わたしは……。ヒリゴールの知り合いであるらしい。しかし、それは教えてもらえない。死の瞬間まで。現状では、悪魔を召還し情報を得る以外、能力はない。バティンらの策略に対しても無力だ。動く凍死者達に対しても。

彼女は輪から離れた。一人歩いた。上を見上げて。澄んだ空気の奥に星空が広がっていた。その星々を見ながら夢想した。あのなかのどれからサムヤサたちはやつてきた。

あのなかの……！

どれ……！

サムヤサたちがやつてきたのは、どれでもない……！

その瞬間、全ての符号が彼女の頭のなかでつながつた。

『霧に閉ざされた星』『千年毎に歴史を失う人々』『魔物』『悪魔』『塔』『ウィルオトス』『地平は霞たち空へとのぼり』『サムヤサたちは船を見つけた』『眩く輝くもの』『全てのはじまりとなるもの』『宇宙を覆す災い』

彼女はその推論を頭のなかで繰り返した。

彼女は愕然として、自分の推理を頭のなかでくり返した。こんな馬鹿な想像はない、と思つた。三度くり返したとき、ようやく冷静になれた。

彼女は頭上の月を睨みあげた。

月。

誰もが当たり前に思つて不思議とも思わない天体。一番身近にあって実は一番謎に満ちた天体。

その謎の第一。月はその大きさに比べて非常に軽い天体。

その謎の第二。地球規模の惑星が持つにしては非常に大きな衛星。そして、この第二の謎は、生命の進化に計り知れない恩恵を与えている。太陽系の中で、地球と火星は、木星の引力を非常に強く受けている。木星は太陽になり損ねたと言われるくらい巨大な星。地球と火星は太陽だけでなく木星の引力も強く受けている。そのため、火星では、地軸の移動が頻繁に起こる。地軸の移動とはつまり、今現在北極点だったところが次の瞬間には赤道にまで移動する、極端な例えをするとそういうこと。そんなことが一度でも起これば、生命にとつてとんでもない悲劇だ。けれど、それは火星にしか起こらない。地球は巨大な衛星がその地軸を安定させている。

そして第三の謎。その起源。

その起源は、現在ではジャイアントインパクト説が主流になつている。地球誕生間もないころ、火星クラスの天体が衝突し、飛び散った破片が衛星軌道上で固まつたという説。

が、けれど、と彼女は思う。もし、そうなつたら、それらの破片は、土星の輪のようになつて衛星軌道上を飛び、永遠に固まることなどない。たとえ固まつたとしても、地球の年齢を考えたとき、時間的にそれは可能なのか疑つてしまつ。

それ以前に主流だつた説は、飛来说。つまり、太陽系外からやつ

て来た天体が、地球の引力に捉えられ、衛星となつた、といつ。

しかしこの説には致命的な欠点があつた。計算してみれば、月ほどの巨大な天体の運動エネルギーなら、それは地球ごとき小さな星の引力では捉えられない、といつ。

けれど。

もし、太陽系外から地球を目指してやつてきて、その衛星軌道上に自ら乗つたのなら？

彼女は遠い昔に思いをはせた。

地球から遠く離れた星。進んだ文明。母星の危機。建設される巨大なスペースコロニー。その、豊かな森と草原が広がり、快適な街をそなえた内部。その、隕石の衝突から守るため分厚い地殻で蔽われた外殻。そのなかには母星そつくりの生態系が復元されていたはず。そして始まつた地球への航海。おそらく、数億年かかる……。さらに地球へ到着しても、地球が快適な状態になるまで、数億年待たなければならぬ。

そして、そこにあつたはずのもの。ウイルオトス。名称は何でもいい。家畜や農作物の改良ため持ちこまれた遺伝子操作の技術、その機械。

歴史が失われたのが先か、機械により、遺伝子操作が弄ばれたのが先か、それはわからない。けれどもその機械により魔物が生まれ、終には肉体さえ必要としない悪魔たちが生まれた。その一靈、オル・ゼヴァブ誕生により、人々は繰り返し、完全に歴史を失うようになつた。天候をコントロールする機械は壊れ、コロニー内は霧に包まれた……。コロニーがあらかじめ設定されていった航路をたどり地球に到着しても、彼らは気づかないまま、ずっと時を過ごした……。

サムヤサラが、霧を晴らし、世界に光を取り戻したとき、『地平は霞たち空へと立ち昇つていた』、と記述がある。それはSFでみるスペースコロニーの内部にそつくり。

『幾本もの、聳え立つ塔』は、コロニーの支柱であると同時にコントロールタワー。

サムヤサの見つけた『船』とは、地球上陸用艇。

サムヤサの去ったあと、悪魔たちは封印されたままだった。けれど隕石衝突でそのうち十八靈の封印がとけ、地球へやって来た……。それが、今回の災禍……。

彼女は夢想から、我に返った。地球空洞説なら、聞いたことがあらけれど、月が空洞？？

こんな話は誰にも聞かせられない。

「どうしたの？ 頭が真っ青じゃないか」

「氣づくとアーニが横に来て、顔をのぞきこんでいた。

「ううん。なんでもない」彼女は首をふった。

「でも、みんなに『コースがあるの。とっても悪い『コースよ』

今のは推論を話すつもりはなかつた。その推論の先にあつた答えのみ、話した。

「眩く輝くもの、の正体」

## ルーシファー

アイコは車座になつた仲間のそばに立つた。立つたまま話した。  
「ただの根拠のない、推論だけど」

川野少年が薄笑いを浮かべた。

「悪いニュースって？」この状況で聞かされるせうに悪いニュース  
なんてあるのか？ そう言いたいようだつた。

アニナへの通訳は祐二に頼み、彼女は日本語で話した。

「登場してない、大物がいるわ。勿論、悪魔なんて五萬といて、登  
場していないう�が多いけれど」

「だつたらわからんねえよ。あんたと違つて、詳しくないんだから」  
川野が肩をすくめた。

「誰でも知つてる大物よ。その名前を知らない人なんて、いないく  
らい」

祐二の通訳を聞いたアニナが答えた。

「サタン？」

「残念、違うわ。サタンは、光じゃない」

その日本語を通訳してもらつたアニナが、眉をひそめて言った。

「まさか、ルーシファー？？」

「正解」

川野少年が、ちょっと吃驚した顔をして言った。

「今、ルーシファーって言つたんだろ？ ルーシファーって、サタ  
ンのことじゃないのか？」

秘教家であるアイコは、皆にわかるように説明した。

「昔から続くルーシファーとサタンの混同は、哀しいくらい。ル  
ーシファーの名は一度きり『イザヤ書』に出てきただけで『光を広げ  
る』という意味のヘブライ語。それが默示録では、旧約の蛇や、サ  
タン、ドラゴン、それらと混合されてしまったの。しかもサタンが  
墮天する前の天界での名前、なんて言われたりもして。けれど現

在の神智学や人智学では、ルーシファーはゾロアスター教のアフラ・マズダー、サタンはアーリマンのことだと言われている。つまり、まったく別個の対立する者、光の神と、闇の神。わたしも、おおむねその考え方賛成よ』

「神様なのか？」川野が素つ頬狂な声をあげて目を丸くした。  
「神様だからって、善い存在とは限らないわ。危険な神もいる。わたしは昔からこう考えていたの。アフラ・マズダーと同一視はしない。けれども同等の存在。その対極にあるもの。それは、まだ生まれていない、創造神。現在の宇宙の対極となる宇宙の創造主『祐二』の通訳を聞いたアニアが目を輝かせた。

「おもしろい考え方だ」

アイコはありがとう、と言つて、続けた。

「つまり、バティンを中心とする悪魔たちがそれを創つたの。『すべての始まりとなるもの』。今はアスルーに守られている。それは、おそらく直径一ミリ以下。その大きさなのにあれだけの光源となつてゐる。なかにあるのは、にえたぎるクオーラとレプトン。温度は十の二十七乗度以上あるはず。その状態で封印されているけれど、もし封印が解かれたら、一瞬でそれは膨張し、今ある宇宙をのみ込む『宇宙を覆す災い』」

「ちょっと待つて、ちょっと待つて」祐二の通訳をさえぎり、アニアが言つた。

「あなたの言つていることが、わたしにはビッグバンにしか聞こえないんだけど」

アイコはつかの間押し黙り、答えた。

「その通りよ」

川野とミキ以外は、目を丸くした。  
川野が不審な顔をして言つた。

「今、ビッグバンって聞こえたんだけど、そつなのか??」  
アイコはうなずいた。

川野とミキの目も丸くなつた。

「今あるこの宇宙はどうなるんだ？？」

「のみこまれるわ。福岡ドームがビッグバン特異点となり、そこから百億分の一秒で数万光年広がり膨張を続け、いずれ全てのみこまれる。」

邪悪な新しい宇宙の創造、それが奴らの目的。そのなかに生まれる命は互いに殺し合い奪い合う。その意識の根源にあるのは危険な神、ルーシファー。つまり神道で言う直口靈なおひのみたま、仏教で言うブッダフツド、真我、それがルーシファーとすりかわる。ルーシファーの光となる

「誰も口が聞けなかつた。しばらくして祐二が言った。

「おもしろい考え方だと、俺も思う。だが、推論に過ぎない。というよりも、そうであつて欲しいと、思う」

アイコはうなずいた。推論であることを認めた。

けれど川野がポツリと言つた。

「宇宙が始まる前はなにがあつたんだろうって、昔よく考えたけど……、宇宙があつたのかもな……」

しかもそれは、悪魔の業とはいえ、作為的に生み出されることがなる。

「それが可能なら、この宇宙はその歴史のくり返しかもしれない……」ずっと黙つていたホンダが言つた。人間はなにひとつ創造できない。けれどもしなにか創造できるとしたら、ビッグバンほどシンプルなモノはないのかもしれない、と。

が。

「推論にしても真実にしても、俺たちがこれからやることに何も変わりはない」冷たい目で吐きすぐた。

「とにかく、今夜はもう寝よう」祐一が言った。

男三人で、交替で見張ろうと言つ祐一にホンダが言った。

「交替する必要はない。俺は眠らない。俺が見張つておく」

男女二台の車に別れて眠ることにした。ランクルもステーションワゴンも、リアシートを倒せば充分人が寝られる空間ができる。車に乗り込む前、祐一はホンダの肩を叩き、ミキのほうを見て言った。

「心配するな。彼女は俺たちで護ればいい」

ホンダは吐き捨てた。

「無理だ。ここはそんな甘いところじゃない」

祐一は苦笑した。苦笑したがその意味するところは痛切に理解できたようだ。

「わかった。最大限の努力をしよう。約束する。俺の命に代えても彼女を、彼女だけじゃない、このなかの誰一人死なせない」

無理な約束だ、と思つたがホンダは何も言わなかつた。

「俺たちはひとりじゃない」そう言い残し祐一はランクルの荷台に乗つた。

夜のパーキングにホンダは一人残された。冷たい空氣に体の芯から冷える。冬空が鳴つてゐる。深い空氣の層の底にいることを知らされる。

俺たちはひとりじゃない。確かにそうだ。出会えた。神話の中の血が重なつた。俺と、アニナという少女。そしてサポートしてくれる人材も揃つた。

パーキングの端まで歩いていつて闇に沈む街並みを見た。ここは既に人間界じやない。集まつたとは言え、ほんの数人だ。それだけの人数でなにができる。俺は……。

俺がやるべきことをやるだけ。アスルーを倒す。バティンを葬り

去る。そのことだけを。

ひらひらと白い花びらが舞つた。

「ぬしに会うのは」これが最後となるやも知れぬのう」背後からその声は聞こえた。

ふり返つた。媚孤朗。艶やかな着物姿でそこにいた。風のない空氣のなかを白い花びらがわずかに舞う。幻怪。またもや。

「ぬしに教えに来た。じゃが手遅れじやつた。ぬしらはばらばらにされた。奴らの遊戯よ」

「どういう意味だ?」

「言葉どおりの意味じやえ」

「ばらばらにされた? 意味がわからぬ。」

「はよう田を覚ませ。命があぶない」

「何を言つてゐる?」

「」には既に違う土地じや。一人ずつばらばらにされた。皆眠つておる。おぬしは田くらましにあつておる」

それから切ない目でホンダを見つめた。

「ぬしにその太刀渡したこと悔いておる。ぬしを死なせとうない……」

ホンダは聞き返した。

「俺は……死ぬのか?」

媚孤朗はその質問には答えず、珍しく語氣強く言つた。

「敵が近づいておるわ。はよう田を覚ませ」

ホンダは目を開いた。軽い眩暈をおぼえた。まったく見知らぬ風景のなかにいた。そして眼前に迫り来る凍死者。反射的に拳を叩き込んだ。轟音とどろき死体が転がつた。いつたいここは何処だ? 仲間達は何処だ? 考えるいとまなく凍死者の群れ襲い来了。刀を抜き片つ端から切り倒した。一振りで一体を粉々にすると、ソニックブームが周囲にいる亡者をまとめて吹き飛ばす。頭上に都市高速道路がある。前方に上り口も。呉服町とある。福岡か?

背後で銃声響き渡つた。ふり返ればアナがいた。英語でなにか

叫んでいる。多分、何が起こったか俺に聞いているのだろう。わからない。一瞬でこうなつた。これが媚孤朗の言つた悪魔達の遊戯か。彼女以外、他の仲間の姿はない。死者の群れ只中にたつた一人で放り込まれた。しかも、言葉が通じない。

荷室は広いが三人並んで寝るのは窮屈だ。アニナは助手席の背もたれを少しさげてダッシュボードに足を投げ出して寝ることにした。「あなたにこれを渡しておくれ」グロック18Cを取り出してミキに渡した。グロックシリーズはオーストリアの名銃。その登場は全てのピストルの歴史を塗り替えた。その18Cはマシンピストル、フル・オート。装弾数は31発。グリップからダブルカラムマガジンがビ派手に飛び出している。ピストルのフルオートだから当然集弾性は良くない。彼女ることは勿論自分達で護るけれど、何事も万全とは行かない。もし彼女が危機に瀕するとしたら、敵は至近距離にいるはず。その状況でこの銃なら、めぐら撃ちで撃つても数発は当たる。

「この銃に安全装置はないわ。正確に言えばあるけれど、トリガーの部分にあるの。つまり引き金を引けば弾は飛び出す。引かない限り発射しない。暴発することはない。もしもピンチの時はこれを使つて。予備のマガジンも渡しておくわ」アイコが通訳した。ミキは恐々と拳銃を受け取りその重さに驚いている。「むぎゅうう」と言った。その日本語の意味はわからない。

ホントに撃てるかしら？ 多少心配になつた。もともと心配だつたのだが。

「明日少し練習をしよう」と言つと、「イエス」とはにかみながら答えた。

それから女三人で少しお喋りをした。こんな時になんだが、要は男の品定めだ。川野がキューーートだとか、祐一が逞しいとか、ホンダがワイルドだとか。アニナが、三年前の祐一は今と正反対でもつと華奢だったと言つと二人は驚いた。ミキが耀はあんないじやなかつた。人が変わつたみたいだと寂しげに言つた。慰める言葉はない。彼がエレボスである以上。

それから他愛無い話をしばらく続けるうちに、他の一人は眠りについた。アナだけがなかなか眠れなかつた。まどろみかけては目が覚める。数度そんなことを繰り返したあと、彼女は霧に包まれた世界の中にいた。

目の前に現れた。ラ・ブティエリ・ア・ナネ。淡い光をまとう妖精のよくなご女。その口がこう告げた。

「エレボスの音速の剣も、そなたの日子の瓊矛も、わたしが念を込めた物。そのふたつであればあるいは災いを取り除くことができるやも知れぬ」

アナは次の言葉を待つた。日子の瓊矛、どうすれば使えるようになる？ だが、彼女は消えていく。

「待て。まだ話が……」と言つたとき、轟音とどろき、夢は引き裂かれた。

目覚めれば硬いアスファルトの上に寝ていた。何故？？ 考えるいとまもない。亡者が彼女に覆いかぶさつてきていた。腰のTMPを抜くと全弾撃ち込んで跳ね起きた。爆音続けざまにとどろいていふ。見ればエレボスがいて刀を振るつてゐる。彼以外仲間の姿はない。一体何が起きた。空のTMPを投げ捨て、レヴォリューションXOで近づく亡者を撃ち倒した。

「どうなつてゐる！！ 他のみんなは？ ここは何処だ？」聞いた。日本語がかえつて來た。わからない！！ 驚目だ、コミュニケーシヨンがとれない。

アイコは冷たいフロアの上で目を覚ました。暗闇のなかだ。何処で目覚めたのかわからなかつた。ぼうつとする頭を持ち上げたとき、眠る前の記憶が戻り異常に気付いた。そばに人の気配がする。一瞬で眠気がとんだ。

「誰？ アナナ？」

懐中電灯で顔を照らされた。

「しー」とその人物は言った。

「ここ何処だかわからない。誰もいなくなつた。氣をつけて。奴らがいるかも」小声で言われた。

「川野君？」

川野は懐中電灯を消した。力チャツと音をさせてアサルトライフルにマガジンを装填した。

「何がどうなつたのかわからない。目が覚めたらここにいた。何処かのショッピングビルの中みたい」

どうなつてているのだろう？ 戰慄に似た身震いが彼女を襲つた。心臓がざわざわと鳴り、全身を冷たいものが走つた。これは悪魔の業か？ 人を一瞬にして移動させることができる悪魔もいる。複数いる。オノボスから聞いた十八靈のなかにもいる。しかしそれならわたし達を殺すことも容易だつたはず。それはしなかつたのか？ ならばその理由は？ そして他の仲間は何処にいるのか？ そもそもホンダはどうして気付かなかつたのだろう。オセ？ オセなら可能かも。ホンダを幻界に導きその間にわたし達を引き離した。わからぬ。全て仮定だ。

現状を把握すべきだわ。今、ここにいるのはわたしと川野君だけ。ここは？ 暗闇に慣れた目で周囲を見回す。彼の言ったとおりショッピングビルの中みたい。わずかに朝の光が入つてきている。腕時計を見た。六時AM。冬の夜が明ける頃。九州の日の出は遅い。ようやく空が白み始める頃だ。

そばに自分のショットガンがあつた。アナに借りたモスバーグ。「明かりのほうに進もう」川野が言って、アイコは腰を上げた。ショットガンを手にした。店舗は大型のスポーツ用品店のようだ。テニスラケットやシューズやマウンテンバイクなどがあつろに見える。「ここ、もしかして……かな？」川野が呟いた。

そのエリアを抜けすると雑多な小店舗が隣接する場所へでた。雑貨屋、時計屋、アクセサリーショップ……。そこは既にかなり明るい。同時に聞こえてくる。

「聞こえる?」と、川野。

「奴らだ」

遠く地鳴りのようにかすかに聞こえるその音は、亡者達のうめき声。

やつぱりいる。アイロは身を硬くしてショットガンをコッキングした。角を曲がった。一面ガラス張り。外が見えた。この建造物の構造がわかった。そこは吹き抜けの中庭に面した場所。

「やつぱりここリバー・ウォークだ」川野が言った。

「え?」何処なのそれは。

「小倉だよ。俺たち小倉にいるんだ。ここ、友達と何回か来た」ガラスは自動ドアだつた。通電していない今開かない。だが、鍵はかかっていない。川野がバールを差込こじ開けた。途端に猛烈に鼓膜に届く亡者のうめき声。警戒しながら吹き抜けの端に行き下を見下ろした。

びつしりと地を覆う亡者の大群。蛆虫のよつにのたうつている。

「ここからどうやって出ればいい?」

向こうに土お堀と石垣が見える。

「小倉城だよ、あれ」川野が教えてくれた。

お城とその建造物の間は遊歩道のよつになつてているらしい。今は亡者で埋め尽くされている。

「教えて。どうすればここから出られるの?」

川野は頭を抱え込んだ。金髪をくしゃくしゃに乱し、

「俺が聞きてえよ」と言った。

他の仲間はどうなつた? ここを出て何処へ向かえばいい? ま  
ず、どうやってここを出る?

祐一は硬いアスファルトの上で目を覚ました。朝靄に包まれている。何故だか見たことのある風景。九州自動車道だろうか？ 高速道路の上であることにには間違いない。

何故……こんなところに……？

寝起きのハツキリしない頭で考える。が、混乱するばかりだ。俺ひとりなのだろうか？

足元に自分のショットガンがあつた。手に取りいつでも撃てる姿勢で周囲を歩いてみる。

これは悪魔の仕業か？ バラバラにされたのか、俺たちは。それなら殺すことだってできただろうに。何故？

十メートルと行かないうちに人影が目に入った。朝靄のなか、身を起こしている。人影が声を発した。

「あ、祐一さん」ミキだった。

「一体どうなつたんですか？ みんなは？ ここは何処ですか？」どの質問も自分が聞きたいことばかりだった。

「わからない。何も」

その三點。何が起きたのか、ここは何処なのか、他の仲間は何処にいるのか、全て、まったくわからない状況下にいる。

ただ、ここは何処なのか、という点については、歩いていけばわかりそうだ。

祐一はミキを促し歩き始めた。進めば進むほど、見知った風景だという気がする。

「ここ、ひょっとして……」と、ミキが呟いた。祐一も同じ気持ちだ。

数分たたないうちにそこにたどり着いた。

朝靄のなか、行く手さえぎる土嚢。

「ここは中国自動車道だ。関門海峡の下関側だ」

その先には崩落した橋があるだけ。四面楚歌だ。九州に戾る術はない。と、同時に気付いた。

「これは袋のネズミだ。悪魔の意図が知れた。バラバラにして始末するつもりだ。」

レヴォリューションXOは既に弾切れだ。マガジンを交換する暇もない。アニナはスマス＆ウェッソンM500スナブノーズを抜いた。這いよる亡者を粉碎する。頭に当たれば頭を、胸に当たれば胸から上を吹き飛ばした。まるでミニグレネードランチャーだ。しかし五体倒したところで弾は尽きた。リホルバーに弾を込める時間など当然ない。エレボスのほうを見た。駄目だ。彼は彼で手一杯だ。こっちの窮状には気付いていない。

素手で殴り倒してやる。こんな世界の果ての何処とも知れぬ片田舎で。母国語で呟いたとき、お尻のポケットに無造作に突っ込んである口子の瓊矛を思い出した。

コレでぶん殴つてやる。ここいらの腐つた頭くらい力ち割つてやる。

飛び掛ってきた亡者に向かいそれをふりおろした。その瞬間起きた出来事を彼女は視認できなかつた。バチンという音だけが耳に残つた。

見れば足元に肉塊が転がり、眼前で腰から上を失つた足がパタリと倒れた。

！？？ なに？？ 手の中の棒を見た。変わりない。  
今のはなんだ？？

しかし考えている暇はない。奴らは次々襲い掛かってくる。新たな敵に向かい口子の瓊矛ふり上げた時、コンマ五秒後が見えた。棒の先端の彫刻の獅子が、大きく膨れ上がり巨大なその牙で敵を噛み砕き、元に戻る。自分の見たものに驚きながら棒ふりおろしたが、その通りのことが起こつた。またもや、腰から上を失つた足がそこに倒れている。

再び手の中の棒を見た。スーパー・ウェポン？ マジカル？ オカルティック？

スーパー・マジカルオカルティックウェポンだ。

たったコレだけで良かったの？ 彼女は襲い来る敵次々倒しながら思った。もつと早く使ってみればよかつた。とは言え、今がその時だったのかもしれない。華麗に敵をかわし獅子の牙で倒しながら思った。

さらに気付いた。棒の反対側は石突のように尖っている。二つとももしかしたら……。

離れた場所にいる立っている敵めがけてふりおろした。が、ふりおろす前に結果は見えていた。先端の尖った棒が宙に弧をえがいて伸び、鋭く目標物を貫いた。

凄い。どっちも使える。サムヤサは巨猿の背に乗り戦ったそれだから、槍として使うことが多かったのかしら。どっちにしてもこんな便利な武器は見たことがない。まさに無敵だ。彼女は、この亡者の群れが十倍になつて襲い掛かってきても生き延びられると思った。エレボスが何か叫んでいる。わずかに聞き取れたのはグッドという言葉。武器が使えるようになつて良かった、って言つてくれているのか。

サンキューと答えておいた。

良いロミコニケーションが取れている。とは、思わないが。

そのエレボスがじりじりと敵を退け、あるいは一足飛びに敵の頭上を飛び越え、都市高速入り口に向かっている。しきりと前方を指差しアーナに何か言つている。

上へあがろうと言つているのか。確かにここよりはマシかもしれない。アーナは死者の上を駆けた。飛び掛つてくる奴を素早く避け獅子の牙で倒した。

合流するとホンダは日本語で何か言つた。

彼女も英語で話した。

「ア・ナネが夢に現れたの。この棒と、あなたの刀なら、災い取り

除くことできるやも知れぬと言われたわ」とても重大なことだが残念なことに伝わらない。

ホンダはコミュニケーションを諦めた様子で、ただ『モモチ』『モモチ』と繰り返した。指差すほうを見れば都市高速道の看板、中国語の地名の下にアルファベットでMOMOTIと書いてある。彼女にも理解できた。そこが福岡ドームのある場所。それにしても発音しにくい地名だ。この地名ばかりではない。日本人はどうしてタコトカタコトカスタネットのように発音できるのだろう。

既に背後の死者の群れはふりはらつた。高速道路上にいる。転がっている凍死者の数は少ない。道路は一層構造。都市の上をワインディングして伸びている。この道をずっと歩いてゆけば福岡ドームに着くのか。他の仲間も、生きていれば福岡ドームを目指すに違いない。会えると信じたい。

「どうやつたらここを出られるのか聞かれて川野は頭を抱えた。思案に余る。そんなことは俺が聞きてえ。ただ、俺たちの現状はともかく、全員がバラバラになつたわけだけど、全員の目的地は同じだよな。福岡ドーム。何とかしてここを出て向かわなければいけない。どうすればいい? 窮した。名案なんかない。」

アイコが黒い缶スプレーを出した。田が呑つとさつと笑みを浮かべたが、その笑みの端は唇を噛んでいる。

「エリゴールを召還してみる。立ち向かいて難事あらば呼べ、と言つていたわ。きっと助けてくれるはず」

「エリゴールって確か良い奴だったよな?」

「唯一のわたし達の味方よ」

「神様、仏様だな……」この際悪魔でもかまわない。助けてくれ。アイコは既に床に魔法円書き始めている。記号や数字はレメゲトンの召還法から。ただ、それが既に必要ないだらうことを予測している。靈は名前さえ正確に発音すれば呼べる。魔法円は呼び出した靈を封じ込めるためのもの。エリゴールのことは信頼している。彼にそれは必要ない。

「俺、表側を見てくるよ」八十九式小銃肩にかけ言つた。この亡者の群れが建物をぐるりと取り囲んでいるのか確認したい。

「気をつけて。なるべく早く戻つてきて」

「わかった」言い残し店舗奥へ走つた。

彼女がエリゴール召還に成功して、エリゴールがここから連れ出してくれたら、ついでに言えば福岡ドームまで運んでくれたら、万々歳だな。

川野は店舗内のエスカレーターを駆けおりた。一階まで降りてみるつもりだった。このブースは分厚いガラスで仕切られているはずだから。心配なのは中庭に面したエスカレーター。アレは、さつき

自分達がいた回廊に直結している。それがあるものは何もない。登つてこられたらアウトだ。

「ここはかなりへんてこな格好をした商業施設だ。官民共同で市営劇場や美術館、公共放送局や新聞社も入っている。大きく分けて三つのブースに分けられる。自分達がいるのは映画館やショッピングが並んだ商業ブース。

一階まで降りてまず中庭側を確認した。ガラスの向こうを死者の群れが蠢いている。反対側へ踵を返した。大通り側。同じだ。わかつてはいたが軽い絶望感に囚われる。唇を噛みしばらくその場にたたずんだが、いつまでもそうしてはいられない。情報は収集した。すみやかに戻るべきだ。川野はほとんど暗がりのエスカレーターを駆け上った。

戻つてみると、魔方陣を前にアイコが困惑の表情を浮かべていた。「召還できないの……」弱りきった口調で彼女は言った。

「何故かしら……？」

しばらく考えていたが、思い当たつたらしく、

「わかったわ」と言った。

「彼は『大地の上であればいずこでも我はいざる』と言つたわ。ここはビルの三階。大地の上じやない。だから駄目なのよ」

「なるほど」そいつは無理な相談だ。大地の上は亡者であふれかえつている。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

「わたしが聞きたいわ」

川野は苦笑した。どうしてもこういう問答になるようだ。その時

ふと思いついた。ビルの一階ならどうなんだ？

「一階で試してみたら？」ここを下つた一階は無理だが、さつき俺が行つてきた場所なら？ 外とは仕切られている。

アイコは眸を輝かせて答えた。

「それならうまいくかも……」

その時、遠くでガラスの割れる音が聞こえた。一人は嫌な予感に

顔を見合せた。

店舗内に入り中央のエスカレーターを駆け下る。一階まで降りる必要もなかつた。ガラスが割れ入り込んできている。死者の群れが。這つて。

「戻ろう。いや、塞いでいい」

二人は手近にあつた棚や椅子でエスカレーターに障害物を築いた。完全に塞がつた状態にした。

「戻ろう」こうなると回廊側のエスカレーターも心配だ。

「上に逃げるしかないの？」その問いかけは川野にしたものではない。川野だつてわかつていて。自分も同じことを問いたい。神様に。はじめは一匹だけかと思った。だが、朝靄の奥に影が蠢いている。い牙が並んでいる。

朝靄のなかにその化け物は姿をあらわした。両生類のように四つんばいで、亀のようにな長い首を持つていて、大きく裂けた口には鋭い牙が並んでいる。

はじめは一匹だけかと思った。だが、朝靄の奥に影が蠢いている。無数の。

来たか。しかも話しに聞く獣の群れだ。祐一は覚悟を決めた。エレボスと約束した。俺の命に代えてもこの子だけは守り通す。

「土嚢の向こうへ行くんだ」ミキに言った。ミキは駆け出し土嚢を越えた。祐一はあの時置いてきたポリタンク三缶の軽油を土嚢にぶちまけ火をつけた。巨大な炎が立ち昇る。炎を背後に背水の陣。ショットガンで撃つた。が、獣は一瞬立ち止まつただけ。ゆつくりとこっちに進んでくる。

無駄だ。祐一は印を切つた。

『臨』『兵』『鬪』『者』『皆』『陳』『列』『在』『前』。

呪縛した。動きを止めている。繰り返す。

『阿耨多羅三藐三菩提』効果はある。が、動きを止めているだけだ。強い風が吹き、朝靄を飛ばした。その切れ目に奴らの親玉が姿をあらわした。

蝙蝠のような翼が背にあり、人の姿に似ているが、ぬめぬめした

灰色の肌。額に一本の曲がった角。大きく裂けた口。

こいつを倒せば群れはルナティックに戻る。祐二は印を切りなおす。そして唱えるは『頭破七分』。

『妙』『法』『蓮』『華』『經』『頭』『破』『七』『分』。

しかし効かない。悪魔がそのおぞましい口を開いた。

「その術、セレから聞いておる。同じ術が通じると思ったのか」

祐二は不敵な笑みを浮かべ聞いた。

「貴様の名は」

「名乗らぬ」通常悪魔は名前を知られることを嫌う。

「貴様らはここで死ぬ。何も知る必要はない」

『頭破七分』が効かぬとしても、まだ手段はある。九字十字がある。しかしそれは最終手段。安易な利用は厳に禁じられている。もし敵に打ち破られれば、その呪力は本人にはね返つて来る。命を落とすと思つていい。祐二は思った。今がその時。

『怖畏軍陣中衆怨悉退散』。

何事も起こらない。

次の瞬間。

祐二の全身の毛穴から血が噴出した。破られたつ。

がつくりと膝をつく。駄目だ。約束を守れない……。目のなかに血が入つていて。ぬぐつた。もう一度唱えられるか……。アーナの顔が脳裏に浮かんだ。三年前新宿の雑踏で出会つたときの。

黒煙吹き上げる炎背後に、かろうじて立ち上がり、『怖畏軍陣中衆怨悉退散』。血飛沫とともに倒れた。

悪魔の高らかな哄笑響き渡つた。

中庭にいた亡者の群れがエスカレーターを登りはじめた。アイコと川野はめくら滅法銃弾をぶち込んだ。しかし次々動かなくなつた死体の上を乗り越えて這つてくる。音に反応してさらに集まつてくる。きりがなかつた。一人は手近にあつた店舗の立て看板や棚で工

スカレーターを塞いだ。

「撤退しよう」籠城が最良の作戦だとは思えない。だが、現時点では他にどうしようもない。

ミキは崩落した橋の突端まで行つた。下を見る。はるか眼下に、いてつく冬の海が見えた。逆卷いている。足がすくんだ。ふりかえつて炎を見た。今にも炎を突き破つて出てくる獣を想像した。

死にたくない。でも、死ぬより怖い。

アニナに貰つたグロツク18を両手で握り締めている。右手でグリップを、左手でグリップから飛び出たマガジンを鷲掴みしている。祐一さん、大丈夫かしら。お願ひ神様、わたし達を助けて。

だが、炎の向こうからあらわれたのは絶望だつた。火を割つて獣がゆつくりと土嚢を下つてきた。そしてもつとおぞましい者の姿も。彼女は夢中で引き金を引いた。スライドが激しくブローバックを繰り返し、三十一発全弾を一瞬で撃ち尽くした。当たつたのか当たつてないのかわからない。彼女は急いでマガジンを交換しようとしたがマガジンキヤツチボタンが何処かわからない。何処なの？ グリップのボタンによくやく気付き押してみる。空のマガジンがカラリとアスファルトの上に落ちた。貰つた予備マガジンを押し込んだ。再び引き金を引く。もう、獣は目前に迫つている。弾は当たつている。だが、彼女は再び絶望にとらわれた。拳銃が効かない。

耀。せつかく会えたのに。喧嘩しかしてない。何も話してない。耀。助けてよ。

景色が涙で滲んだ。

彼女は海へ身を躍らせた。ひらひらと風に舞う花びらのように落ちていた。

既に都市高速は降りた。居住区を一人は突っ走っている。同じ形のマンションが何棟も並んでいる。凍死者は影すらない。そのことを不審に思いながらもアニナは全速力で駆けた。ホンダに追いつかない。おいていかれる。それほどホンダの足は速い。

居住区を抜け小さな橋を渡りきると、右手奥に福岡ドームの巨大な姿が垣間見えた。左手にパーキングビル（ホールクスタウン）。ドームへと向かうその道は、おびただしい数の亡者で埋め尽くされている。幾重にも折り重なつて這つている屍。

ホンダは既にその只中へ斬り込んでいる。次々と跳ね上がる亡者を血の塊へと変える。アニナは追いつき、ホンダの援護にまわった。斬り込む彼の左右背後の亡者を退けた。復路はない。ただ進むだけ。

既に『日子の瓊矛』は己の分身の如く使いこなせる。エリ、ゴールの言葉を思い出す。『槍を伸ばしているのではない。創つているのだ』と。その言葉の意味はわからない。使えればいい。

もしかしたらエレボスの刀とこの槍で同時に貫けば『眩い光』を封印できるのかもしない。消滅できるとは考えづらい。もしできるのなら、数千年前にサムヤサとエレボスが災い滅したはずだ。けれど、もし、わたし達の力がオリジナルを超えていたら？

だが、今、そんな話はできない。言葉が通じない。

パーキングビルの陰から巨大な福岡ドームの全景が見えた。窓という窓から眩い光があふれでている。建物自体が光に包まれていると言つていい。

そして、そこへ向かう巨大な階段。が、階段自体は隙間も見えない。まるで滝のように、うねりながら、折り重なつて、這い、降りてくる、亡者の群れ。

アニナは一瞬ひるんだが、ホンダは迷うことなく突っ込んでいった。

「仲間を待たないのか？」

聞いたが通じない。わからない日本語が返ってきた。もつとも、仲間がいたとしても、この状況に対処できるのはホンダとわたしら一だ。祐一の呪縛があれば助かるが。彼は今何処だろう。遠い空を見上げた。この空の下のどこかに彼がいる。生きていると信じたい。

一人は既に階段半ばまで登つてきていた。日本画で見たことがある。滝をのぼる黒い魚。アレに似ている。跳ね上がる「者」をホンダは超人的な動体視力で捉え粉碎する。自分は真似ができないと思った。わたしが敵を捉えられるのは、コンマ五秒後が見えるから。どの死体が襲つてくるか見えるからだ。対してホンダは、五体同時に襲い掛かられても、爆音五回轟かせ斬り抜ける。人間とは思えない。刀だけじゃない。拳も蹴りも、視認できない。敵を粉碎する。これがエレボスか。凄まじい。

階段登りきつた。ドーム全体が見えた。目前に五番ゲート。目を射る光。幾重にも折り重なつてうねる亡者。そして、その口中に一体の悪魔。

「バテイン」ホンダが言った。通じた。奴がバテイン。

川野とアイコは四階エスカレーターに陣取り、登つて来る亡者の群れに銃弾をぶち込んでいた。そこは映画館のあるフロア。待合室から持つてきたソファなどでエスカレーターは完全に塞いでいる。が、そこを突破されればさらに上に逃げるしかない。それは死へ向かう悪循環。

川野はエスカレーター脇へ行き、そこから身を乗り出して、ライフル弾を屍に叩き込んだ。マガジンがもう残り少ない。弾が切れれば三丁の九ミリ拳銃があるだけだ。役に立たない。どうすればいい？ どうすればここから生きて出られるっていうんだ。

その時、階上のエスカレーターから死者の群れが固まりになつてなだれ落ちてきて、彼は完全に下敷きになつた。

川野は何が起こったかまつたくわからなかつた。気付けば亡者どもにおしつぶされている。八十九式小銃が手から離れた。あつと言ふ間にそれは何処かへ消えた。

糞、離れる、噛み付くな、糞野郎ども、もみくちゃにされながら腰の九ミリ拳銃を一丁抜いた。両手でめくら滅法撃つ。当たつても蚊が刺した程度かよ、畜生。身動き取れない。一体俺が何をした。神様に聞いた。生きたまま化け物に食い殺される最後なんて、そこまで悪いことをしたおぼえはない。空になつた。最後の一丁を抜いた。不敵に笑い言った。

「脳みそなしの糞野郎ども。拳銃にはこういう使い方もあるンだ」額に押し当てた。歯を食いしばつた。引き金を引いた。

アイコは亡者の塊にショットガンをぶち込み続けた。しかし幾重にも折り重なつていて助けられない。動かなくなつた屍を手で押しのけてショットガンぶち込んだ。待つてて、必ず助けてあげるから。なかなか聞こえていた銃声が聞こえなくなつた。まずい。焦つた。その時。

亡者が飛び掛つてきて押し倒された。頭に鈍い衝撃を受けた。夢中でショットガンを撃つた。動かなくなつた屍がするりと落ちた。跳ね起きた。が、眩暈がする。立つのがやつと。左目に血が入つてきた。額に触れてみた。齧り取られている。手に血と脳漿がべつとりついた。

糞畜生。噛み付いた死体を蹴つ飛ばした。

まずい。わたしはもう死ぬ。川野君も死んだ。駄目だ。ここでは死ねない。何処へ行けばいいの。上の階も死人でいっぱい。

彼女は回廊の先へよろめきながら歩いていった。違うエスカレーターを見つけた。死人の姿はない。彼女はそれを上りはじめた。意識が遠くなる。駄目だ。倒れたら。

「バテイン。姿を偽らずに来たか。すぐにハツ裂きにしてやる」ホンダは言った。

「ひよこのうちに殺しておけば我が手を汚すこともなかつたろうに。だが、もう手遅れだ。我らが業はあまねく宇宙を覆うだろう。貴様にその瞬間を見せてやれないことが残念だ」そう言って高らかに笑つた。

「俺が死ぬと？ 笑止。死ぬのはお前だ。バテイン。五秒で片付けてやる」ホンダは返した。そばのアニナに言った。

「こいつは俺が倒す」意味が通じたかどうか分からぬ。

ホンダのそばの凍死者を立て続けにアニナが倒した。目を見れば分かつた。奴をぶつとばせ、そう言つていた。

ホンダは片目眇めて敵を見た。自然体で立つた。バテインは長い三本の首を持つ。両脇の一本はワームのような口を持ち、その口のなかには鋭い牙が並んでいる。真ん中の一本は長い顎鬚を生やした山羊の顔で口から青い瘴氣吐いている。

左右の首が襲い來た。一瞬だつた。ホンダは姿勢すら変わつていな。が、轟音一発とどろき首が落ちた。落ちた首はのたうつている。にやりと笑むと瞬時に間合いをつめ、その胴を薙ぎ払つた。爆音とともにバテインの巨体が沈んだ。

「我を退けたとしてもや運命は変えられぬ。エレボスよ。死するまで戦うがいい」笑つた。その言葉を最後に、バテインは人間の姿に変わつた。予想はしていた。宿主を変えていることを願つていたが。そこに転がるのは少女の遺体。両腕を失い腰から下を失い、横たわつている。麻奈。

ホンダはポケットから黒ずんだ布キレを出して彼女の胸の上においた。血に染まり固くなつた亮太のシャツの切れ端。身を起こし、憤怒の表情でホンダは言った。

「行こう。……光のなかへ」

あのなかにはアスルーがいる。血が躍る。もはや一刻も待てない。光へ向かつた。躍りかかる死者は薙ぎ払った。

アニナが英語で何か言った。よくはわからないが、死者の群れは自分に任せたなかへ行けと言っているのか。

ホンダは頷き刀をふるつた。ゲートのガラスは粉々に吹き飛ばされた。炯眼光らせ光のなかへと飛び込んだ。

自分が何処を彷徨つているのかわからなかつた。何も確かなことはない。全てが不確かだ。ここは劇場だらうか。そのホール。ガラスの向こうに庭園が見える。いや、よくよく見れば庭園とは大袈裟だ。ルーフバルコニーだ。電飾が張り巡らされている。夜間はイルミネーションが奇麗だらう。アイコは迷わず押し戸を開いてそこへ逃れた。背後からは死者の群れゆつくりと迫り来ている。柵を乗り越えビルの端へと向かつた。下を覗く。気の遠くなるような高さだ。

この方法で後悔はしない？ 自分に言い聞かせた。後悔はしないかつて？ ほかの選択肢があれば教えて欲しい。

彼を召喚するに、魔法円は不要だ。優れた召喚士なら、名前を呼びさえすれば悪魔は現れる。賭けだ。

彼女は身を投げ出した。宙を落下してゆく。

駄目だ。恐怖で引きつり声が出ない。喉を振り絞つた。

「エリゴール！」

地面に激突する寸前、優しく逞しい腕が、彼女を受け止めた。周囲には清涼な光立ち込めていた。亡者どもは光に焼かれている。

「魔女よ。約束のときは来た。そなたが何者であるか。そなたの前世を。だが、わたしの口から伝えずとも、既にそなたは知っているようだ。我が姪ラ・プティエリよ」

エリゴールの腕の中で、アイコは既に自分の前世を思い出していた。

霧に包まれた世界を。塔を。魔物を。夫サムヤサを。娘ア・ナネを。

「であらざれば、いかにして人間に悪魔が召喚できようか。穢れなきラ・プレティエリの魂なればこそ」

そう。そうね。そうだつたわ……。じゃあ、教えて。これからどうすれば良いの。わたしはもう駄目だけれど、他の仲間たちは？ルーシファーを止められるの？

「エレボスとサムヤサが眩い光のもとへたどり着いた。今、アスルーと戦つている」

目を射る光。だが、目が焼かれてしまうことはないようだ。あたりを見回した。全てがホワイトアウトしたような世界。スタジアム入り口にあの少年。以前と同じ少年姿だ。

ホンダは刀を突きつけた。

「俺は刀で闘う」

アスルーは静かに答えた。

「いいだろう。されば余も本来の姿で闘う」

ホンダは待つた。一瞬でアスルーは姿を変えた。

三面六臂の美しい神の姿に。光さえ発している。これがアスルーか。まるで神様だ。上等じゃねえか。例え神であろうとも倒す。

左右の腰に三本ずつの剣、六本の手がその全てを抜いた。

神速。再び。襲い来了。しかも以前の比ではない。六本の刃が次々打ち下ろされる。ホンダはその全てを一本の剣で弾き返した。立て続けに轟く爆音。アスルーの体が傾ぐ。剣が鈍る。以前のホンダとは違う。彼にはアスルーの隙が見えていた。間隙縫つて左拳をその横つ面に叩き込んだ。アスルーの顔色が変わった。打ち下ろされる刃が激しさを増した。この勝負、貰つた、彼は思った。雨の如く降る刃をことごとく弾きながらその瞬間を待つた。

その瞬間、わき腹ががら空きになつた。間髪いれずまわし蹴りを叩き込んだ。あばらの折れる感触を捉えた。アスルーの剣が乱れた。

貢つた。

渾身の一撃。

光り輝く神を粉碎した。

ホンダは大きく肩で息をした。勝つた。

しかし、刀を納めることはしなかつた。左手に持った鞘を捨てた。  
「お前らは一人じやねえだろう。姿をあらわせ」そう言つた。

「見事だ、エレボス」返事が返つてきた。そして、スタジアム入り口からアスルー神があらわれた。次々と、幾体も。

「エレボス・ヨウ・ホンダよ。過去にも問うた。今また問う。争いをやめ我らとともに偉大なる瞬間を迎えようではないか」

「それが鬪神の台詞か。答えは簡単だ。お前らの最後の一人をしとめるまで、闘いはやめない。この刀はこの瞬間を何千年も待つていた。刀の意志に従うのみ」

「さればエレボスよ。我らが剣の餌食となれ」

「逆だ、アスルー。この太刀にひれ伏せ」

ホンダは一直線にアスルーの群れに突っ込んだ。飛び上がり後ろまわし蹴り。スニーカーの踵が神の頬を捉えた。着地と同時に都合十八本の剣が打ち下ろされた。三体のアスルーに囮まれている。全てかわし、弾き返した。紙一重で体を掠める刃。増幅されるソニッケブーム。都合十発の衝撃波にアスルーの腕は止まり体は傾いだ。

そこだ。刀を叩き込んだ。バターを切るナイフのように、その体を薙いだ。一瞬の後、粉々になつた。一体倒した。が、倒した瞬間が最大のピンチでもあつた。刀はふり抜いている。左半身に十二本の剣が襲い掛かる。からうじて弾き返した。

アスルーの数が増えた。五体に囮まれている。打ち下ろされる三十本の剣。無心で反応した。神速は彼だつた。左右背後からの攻撃も全て見切りかわし、弾いた。己が剣を叩き込む瞬間を待つた。六本全ての剣を弾かれたアスルーの腕が上がつた。胴ががら空きだ。薙いだ。続けざま一体。が、すぐさま、一体のアスルーが新たに加わる。既に床は血と肉片で覆われている。ズブリと靴が沈む。足を

踏ん張り剣を交わす。体が勝手に反射している。無心だった。その瞬間、スローモーションのように感じていた。

左まわし蹴りを放つた。がら空きになつた横腹に叩き込んだ。が、飛んできた剣が左足を斬りおとした。同時に左から飛んできた剣を、咄嗟に左手で庇つた。左腕が飛んだ。剣はそのまま彼の頭蓋を齧いだ。左目まで刺さつた剣をアスルーが抜いた。次の瞬間、三十本の剣が、彼をハツ裂きにした。

倒れながら、最後に脳裏に浮かんだのは、金鱗湖を背景に微笑むミキの顔だった。

五体のアスルーが、その全ての剣をおさめた。ひとりが重々しく鎮魂の言葉を吐いた。

「エレボス。見事なり」

「そなたはこれから我とともに冥界に入る。そこなれば、これより起ることの影響は受けぬ。そして難を逃れ、そなたは、新しい宇宙に生まれ来る命に警鐘を鳴らさねばならぬ。それがそなたの使命だ」

アイコはエリーゴールの言葉を子守唄のように聞きながら絶命した。大地から清涼な光立ち昇り一人を包んだ。光が消えたとき、二人の姿も消えていた。

絶え間なく轟く爆音を背後に、アナナは襲い来る亡者を薙ぎ払つていた。ゲートを護る。口子の瓊矛をふるう。死者を次々と肉魄へ変える。が、キリがなかつた。亡者は大地を埋め尽くしている。目の届くかぎりどこまでも。それがすべてこちらへむかつている。必死で薙ぎ払いながらエリーゴールの言葉を再び思い出した。「それを創つていいのだ」。

創つている?

じうじうとかしら? アーナは瓊矛の槍のほうを敵へ向け、振

り下ろしながらイメージした。瓊矛はそのイメージどおりに枝分かれした。枝分かれしてそれぞれ亡者に突き刺さり体内で無数に細かく分岐し、まるで毛細血管のよつに亡者の体内を駆け巡り、飛び出すと次の亡者を貫く、同じように枝分かれして。貫かれた亡者はブシュツと言つ音をたてて血の塊となつて大地を染める。分岐は果てしなく続き、瓊矛は手で支えきれないほど重くなつた。もういい、戻れ、アニナが念じた時には、福岡ドームのゲート入り口、目に見える範囲の全ての亡者を討つていた。血に染まつたステージ。驚愕とともに、今、自分がしたことと、手の中の棒を見た。棒は彼女の思うとおりに伸び枝分かれし、そしてもとに戻つた。頭の中でもまだ説明がついていない。驚いていた。しかし、気付いた。

音が聞こえなくなつていた。絶え間なく轟いていた爆音。ピタリと止んでいる。アニナはホンダの身を案じた。勝つたのか、それとも……。アニナは意を決し光のなかへと飛び込んだ。

目が利かない。真っ白い光のなか。徐々に目が慣れる。足元がずるずるぬかるんでいる。血だ。足が何かを蹴つた。見覚えのある腕。まさか。その先に、血と肉塊のなかに沈んでいる、ホンダの体を見つけた。既に息はない。同時に、そこに立つ無数のアスルーの姿に気付いた。アニナはホンダの手から音速の剣を取つた。立ち上がつた。

アスルーが口を開いた。

「間もなく、封印はとかれ偉大なる瞬間がおとずれる。汝サムヤサよ。無駄な闘いは止めその瞬間を迎えるがよい」

「間もなくとはどのくらいだ」

「数十秒後だ」

「数十秒！？」たつた数十秒でこいつらを排除して……。

アニナの考えを見透かしたようにアスルーは言った。

「なかには数百の我らの一族がいる。抵抗は無駄だ」進退窮まった。

ルーシファーは誕生する。

ふざけるなつ。ここで指をくわえてみていろと。

上等だ。

右手上に口子の瓊矛、左手に音速の剣握り締め、彼女は言った。  
「最後の一秒まで闘い抜いてやる」

言うと同時に駆けた。二体のアスルーが行く手をふさいだ。合計  
十一本の剣のコンマ五秒後が見える。槍を先に口子の瓊矛ふるう。  
十一本に枝分かれした槍が刃を弾く。スタジアムなかに躍りこんだ。  
真つ白い閃光のなか、中央に球体の光あり、それを取り巻くように  
数百のアスルーがいた。

五体のアスルーに背後から切り刻まれながら、球体のコンマ五秒  
後を見た。貫く口子の瓊矛、そして球体のなかに生じる黒い影。  
まさか、防げるのか、誕生を。

薄れゆく意識の最後の力振り絞り口子の瓊矛ふるつた。一直線に  
伸び光を貫く槍。が、その瞬間封印が解けたのだ。彼女の見たモノ  
は逆だった。

球体のなかに生じた黒い闇は、百億分の一秒のさらに百億分の一  
秒、そのさらに百億分の一秒で、銀河と同じ大きさにひろがつた。  
そして闇が熱エネルギーに変わり、超高温の火の玉が生まれた。  
ビッグバンだ。温度は十の一十七乗度、その百億分の一秒後煮えた  
ぎるクオーラとレプトンの光のスープとなつた。そしてウイークボ  
ソンの分離が始まり、開闢から一秒後にはじめての原子核が誕生し  
た。

そして三十万年後、宇宙は光の塊から真空の宇宙へと晴れ上がる。  
温度が三千度まで下がり、光子が陽子や電子との相互作用を断ち切  
り透明な宇宙へと晴れ上がつたのだ。

そして七億年後、星が誕生し初期の銀河が形成され始める。銀河  
は銀河群を形成し、銀河群は銀河団を形成する。  
そして開闢から百三十七億年後。



## Hンドロール／旧宇宙の残渣

百三十七億年後。

アイコは静かに意識を取り戻した。  
わたしは、誰だ。

ほとんどすべての記憶を失っていた。そこが旧宇宙から存在する  
冥界の片隅であることはわかつた。が、自身のことも、旧宇宙で起  
こつたことも忘れ去つていた。

目の前に、おとはやの剣と田子の瓊矛があった。それはエリゴー  
ルが、自身の命と引きかえにこの冥界に再生した物だつた。すでに  
冥界の物であり、冥界の力を授けられていた。が、エリゴールが誰  
であつたか、もう思い出せなかつた。

ただひとつ、それを届けなければいけないこと、それだけはわか  
つた。

けれど、誰に……?  
からうじて思い出した。  
そうだ。エレ、ボス……。そして、サ……ヤサ……。

悪魔の名

ルシフラー—守護神、Asura(旧宇宙におけるアスルー)。

# 創造神、 Lucifer。

対立する者

天使、無し。

神、無し。（正確に記すなら「ナラバ」の宇宙における神は、ルシファー）。

旧宇宙の残渣、サムヤサ、エレボス。

中立者

ルシファーの子であり、覚醒していない人間六十五億。

（覚醒した者。過去にキリストとその弟子、釈迦とその弟子、など、神の子（悪魔の子）ら）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9491a/>

---

エト・エウトクタ

2010年10月8日13時18分発行